

博士学位論文

ヘレニズム時代の王権と国際関係

—ポリュビオスにみるヘレニズム世界の自他認識と「一体性」考察—

京都府立大学

柴田広志

(2014年6月提出)

目次

序章：問題の所在.....	1
第1部 ヘレニズム諸王国の戦争と国際関係の基本的性格	9
第1章 シリア戦争考	10
I、第1・2次シリア戦争の経緯	11
II、第3次シリア戦争	12
① 第3次シリア戦争概観.....	12
② アンティオコス2世の死と幼王誕生の可能性	13
③ プトレマイオス3世の侵攻と第3次シリア戦争の終結.....	15
III、第4次シリア戦争.....	17
① 第4次シリア戦争の経過	17
② 第4次シリア戦争考察.....	17
IV、第5次シリア戦争	20
第2章 小アカイオスの反乱 —第4次シリア戦争時のセレウコス朝王族反乱—.....	26
I. アカイオスとは何者か	27
① アカイオス登場時のセレウコス朝情勢	27
② アカイオスの出自と家系について	28
II 王位辞退から王位僭称までのアカイオスの動向.....	30
① セレウコス3世暗殺時の状況について.....	30
② アンティオコス3世即位後のアカイオスの動向.....	32
③ アカイオスの王位僭称.....	34
III. アカイオスとプトレマイオス朝との連携	37
① アカイオスとプトレマイオス朝の連携	37
② 第4次シリア戦争後のアカイオスの動向	39
③ アカイオスは、セレウコス朝の王位を欲したか.....	40
第3章 「バルバロイ」観と王権 —古典期からポリュビオスまで—	46
I、古典期のバルバロイ観.....	46
II、アンティオコス3世の東方遠征.....	49

① アンティオコス 3 世のメディア・アトロパテネ遠征	49
② アンティオコス 3 世のパルティア遠征	50
③ アンティオコス 3 世とバクトリア遠征	51
III、ヘレニズム時代のバルバロイ観	52
小括	59
第 2 部 ヘレニズム時代のアレクサンドロス大王像	61
第 4 章 ヘレニズム時代のアレクサンドロス大王像 : ポリュビオス『歴史』を手がかりに ..	62
I、問題の所在 : アレクサンドロス像とポリュビオス	63
① 史料状況と先行研究の傾向	63
② ポリュビオスのアレクサンドロス像検討の意義	65
II、テーバイの破壊に対する評価	67
① スパルタでの使節の議論にみられるふたつの見解	67
② テーバイの破壊に対するポリュビオスの評価	69
③ ヘレニズム王権の側からみるテーバイ破壊	72
III、ポリュビオスのアレクサンドロス大王像とその影響	73
① アレクサンドロス大王と後世の王たちとの比較	73
② アレクサンドロス大王と配下の将軍たちへの評価	76
③ ポリュビオスの記述と後世との関連性	79
おわりに	81
第 3 部 ローマの進出とヘレニズム世界への衝撃	85
第 5 章 ヘレニズム諸王国とローマの戦争 - マケドニア・セレウコス朝とローマの抗争 - ..	86
I、マケドニアのピリッポス 5 世とローマの戦争について	86
① 第 1 次マケドニア戦争	87
② 「第 2 次」マケドニア戦争	87
③ 対ローマ戦敗北後のピリッポス 5 世	89
II、セレウコス朝のアンティオコス 3 世とローマの戦争について	91
① リュシマケイアにおける最初の殺生	91
② リュシマケイア会談から開戦前夜まで	94
③ アンティオコス 3 世とローマの戦争	95
④ アパメイアの和約以降	97

第6章 「バルバロイ」ローマをめぐる議論.....	103
I、ローマは「バルバロイ」か	103
II、「バルバロイ」ローマをめぐる議論①：第1次マケドニア戦争時のギリシア ..	105
① ナウパクトスの和平会議（前217年）	105
② アイトリア使節とアカルナニア使節によるスパルタでの論戦（前209年） ..	106
③ ロドス使節トラシュクラテスの演説（前207年）	108
III、「バルバロイ」ローマをめぐる議論②：第2次マケドニア戦争から	108
① キュノスケパライの会戦まで	108
② 戦後の措置をめぐる	110
終章	115
参考文献	120
関係地図	127

序章：問題の所在

アレクサンドロス大王が前 323 年にバビロンで死去した後、そのドナウ河からインダス河にまで至る広大な支配領域は、彼の部将たち、いわゆる「後継者」(διάδοχοι) たちによって奪い合われることとなった。この後継者戦争の中でアレクサンドロス大王の王家アルゲダイは滅亡し、前 306 年ごろから後継者たちは相次いで王を称するようになった。その後も抗争は続き、前 276 年ごろにはセレウコス朝・プトレマイオス朝・アンティゴノス朝という、いわゆるヘレニズム三大王国の鼎立をみることとなった。これらヘレニズム諸王国は、しかしながら、その成立後も戦争をやめることがなかった。同時代史家のポリュビオス(前 200~120 ごろ)をはじめ、ヘレニズム時代の文献記録は、絶えざる戦争の記事で埋め尽くされているといっても過言ではない。

当時の歴史のこのような状況は、ある疑問へとつながる。ヘレニズム諸王国の王たちは、何故、かくも飽きることなく戦争を続けていたのだろうか。そして、ヘレニズム時代の国際関係は、どのような原理のもとに動いていたのだろうか。これが、本稿の出発点となった問題意識である。

ヘレニズム時代の国際関係という問題について、ドロイゼンに始まるヘレニズム時代史研究では、第 2 次世界大戦まで、東西文化の融合や広大な地域における人類同胞概念、そしてヘレニズム世界の一体性や諸国家間の勢力均衡、という図式が強調されていた。第 2 次大戦以前の代表的なヘレニズム史家のひとりであるロストフツェフは、ヘレニズム世界の一体性は、アレクサンドロス大王の経済政策に拠るところが大きいと主張した^①。この大部の研究において象徴的に見られるように、かつてのヘレニズム時代像は、文化史や経済史の側面に大きく依拠したものだだった。

こうしたかつての通説は、近年では批判にさらされている。ヘレニズム時代には戦争が絶えることがなかったという国際関係の実情から、ロストフツェフが主張する勢力均衡の存在を、疑問視する研究が多くなっているのである。この絶えることがなかった戦争と、王権の間の密接な関係への着目が、近年の研究の潮流として注目される。すなわち、ヘレニズム諸王国の王権の、軍事的な成功への依拠に対する関心が、高まっているのである。

それでは、どのような軍事的成功が求められていたのだろうか。この問いかけは、ヘレニズム時代の戦争、ひいては国際関係の性格への問いであり、先にあげた問題意識に方向

性を与えるものである。そこで、王権と軍事に関する研究を整理し、本稿の目指すところをより明確にしたい。なお、先行する諸研究では、おおむね「王権」という用語は王の主宰する宮廷や統治システムなどの広義の意味合いではなく、王個人の権威・権力を指しており、本稿でもこの用法を踏襲する。

王権と軍事の関係を論じた研究

ヘレニズム世界の一体性を強調したロストフツェフなども、ヘレニズム王権と軍事の密接な関係を看過していたわけではないが、長谷川岳男やエックスタインが指摘するように、この問題についての研究は、とりわけウォールバンクの仕事を出発点としている⁽²⁾。ウォールバンク以下の研究者たちがそろって着目するのが、ビザンツ時代に編纂された辞典『スダ』にあらわれる、次の一節である。

王権。それは血統や正統性によって付与されるものではなく、軍を指揮する能力や、問題に十分に対処する能力に依拠するものである。これがピリッポス、およびアレクサンドロスの後継者たちについてのことである。アレクサンドロスの直接の子は、彼らの精神の弱さによって血縁に頼ることができず、アレクサンドロスと繋がりのない者たちがほとんどすべての有人世界の王となったのだ⁽³⁾。

ここには、ヘレニズム期の王権は出自や正統性によるものではなく、軍事指揮官としての能力に基づくものであったことが明快に示されている。

この問題に関して、ウォールバンクの要点は以下のように整理できる。ヘレニズム諸国の王たちは、アレクサンドロス大王の血族ではなかったために血統による正統性を主張できず、軍事的功績によって大王の後継者に相応しいことを示し、もって王と称することができた⁽⁴⁾。その領土は「槍もて勝ち取ったる」ものとしてその勝利を象徴するものであり、王たちはこの防衛に能力を示す、限定的な軍事功績を期待されていた⁽⁵⁾。また、こうした軍事機能の王への集中のため、王の権力は強力なものだった⁽⁶⁾—以上が、ウォールバンクの議論の要点である。

その後、王権と軍事との密接な関係をさらに深く検討したオースティンの研究を経て、ヘレニズム諸国の王権の特質として、軍事指揮官としての役割が大きな部分を占めていたことや、その中で軍事的機能を集中させた王の権力が強力であったことについては、大方の研究者の合意を得つつある⁽⁷⁾。カニオティスは、王たちが防衛的な軍事力を発揮する存在であることを要求されていたことを強調し、支配下の者たちや他の王たちへのアピールを

常にしておく必要があったことを指摘する⁽⁸⁾。エックスタインもヘレニズム王国の王権の特色として、軍事に特化していたことをあげる⁽⁹⁾。

このように、王権と軍事の関係を論じた研究が指摘することは、アレクサンドロスの「後継者」諸王国は、軍事的功績によって王（βασιλεύς）の号を獲得した、ということである。次に、これらの戦勝が「後継者」たち、およびその子孫たちにも王としての正当性を付与したために、ヘレニズム王国の王たちは、代を重ねても軍事的功績を誇示することを求められた。このため、軍事的権能は王に集中し、各王国は「王すなわち国家」としての性格を強く有することとなった⁽¹⁰⁾。同時に、王への軍事機能の集中は、ヘレニズム諸君主の王権を強いものとすることに結実した。そして、こうした王権のありかたは、アレクサンドロス大王のそれを踏襲するものだった。以上が、先行研究が共通して認識していることである。

ヘレニズム世界の国際関係と、軍事的功績の対象

しかし、ここに問題が存在する。ヘレニズム時代の王権と軍事の関係を論じた研究は、ヘレニズム世界の一体性や勢力均衡といった、従来のヘレニズム時代像を擁護する立場をとるウォールバンクから始まったが⁽¹¹⁾、近年の大勢は彼の国際関係観を退ける傾向を示している。はやくも彼の研究の翌々年に、オースティンは「後継者戦争が本当に終わることはなかった」と喝破し、ヘレニズム世界の一体性や勢力均衡を虚構として否定している⁽¹²⁾。前 278 年から前 221 年までのヘレニズム世界の動向を概観したエージャーも、勢力均衡は政治的実態としては存在していたが、国際関係の前提となる理念ではなかったと示唆している⁽¹³⁾。エックスタインは、ウォールバンクの研究の重要性を指摘する一方で、ヘレニズム諸国相互が常に戦争状態にあった事実を重視し、ヘレニズム時代を「無秩序の時代」と評価する⁽¹⁴⁾。

ヘレニズム諸国の王たちが、互いを王としての正当性を獲得するための敵として認識していたのであれば、ヘレニズム世界の一体性や勢力均衡に疑念を示すオースティン以下の国際関係観は、妥当なものといえる。しかし、はたしてそうだろうか。

王権の確立に際して求められた外敵の像という問題は、ウォールバンクとオースティンの主張が最も鋭く対立した点だが、その後は十分な成熟と発展をみることがないままとなっている。そうしたなかで参考となるのが、ピロウズとミッチェルの研究である。ピロウズによれば、アレクサンドロス大王の王家アルゲアダイが前 310 年に滅亡した後、ディア

ドコイの中で王を最初に称し得たのはアンティゴノス・モノプタルモスとプトレマイオスであり、後者に対する勝利が、前者が王と称するための決定的要因だったことを指摘する⁽¹⁵⁾。一方ミッチェルによれば、ヘレニズム諸国は、初代の王の段階では正当性を確立していなかった。それは、ヘレニズム諸国の開祖たちがアレクサンドロス大王の「ギリシアの解放」という立場を継承せずに、相互の抗争に終始していたためである。しかし、前 270 年代に起きたガラティア人の侵入を撃退することによって、ヘレニズム諸国の王たちは「ギリシアの防衛者」を主張する根拠を獲得し、それによって正当性を確立し得たというのがミッチェルの主張である⁽¹⁶⁾。

ここで、ガラティア人の侵入の時期に注意したい。ガラティア人の侵入は、ヘレニズム諸王国が領域をほぼ確立させ、世代交代した段階で起きた事件である。この点を考慮するならば、ヘレニズム王権と軍事の関係は、前 280 年代までのディアドコイ戦争期と、それ以降で変化した可能性を示唆する。すなわち、その時期まで後継者たちは相互に淘汰しあっており、他のディアドコイに対する戦勝が王としての正当性を担保していた。ディアドコイが世を去って、ヘレニズム諸王国の王たちが次の世代—これを第 2 世代と呼ぼう—に移行した前 270 年代以降も、引き続き王には軍事指揮官としての力量が求められた。しかし、ヘレニズム諸王国草創期と異なり、ガラティア人（ケルト人）をはじめ、ヘレニズム世界の外から侵入してくる異質な集団に対抗して「槍もて勝ち取ったる領土」を守る防衛的軍事指揮官に、期待される役割が変わったことが、先行研究の整理から想定できる。

この整理によって示された方向性は、すぐに次の疑問へとつながる。まず、ヘレニズム王国間の戦争が王たちの王権に寄与するものでなくなったのならば、ヘレニズム王国同士の戦争は、どのような性格のものだったと定義できるのか。また、ヘレニズム時代の人々が敵として想定した異質な集団とはどのような集団で、それはどこにいて、どのような特質をもつものと想定されたのか。

史料の問題

ヘレニズム時代の人々にとっての異質な集団という問題の考察には、同時代文献の検討が必要である。しかし、ヘレニズム時代の同時代文献で現存するものは、きわめて少ない。まとまった分量が現存する唯一の同時代文献は、前 2 世紀に書かれたポリュビオスの『歴史』のみである⁽¹⁷⁾。

ポリュビオスは、ヘレニズム時代のギリシアの連邦国家・アカイア連邦の有力都市メガ

ロポリスに、前 200 年ごろ生まれた。その父親リュコルタスは同連邦の最高職である司令長官（στρατηγός）を 2 度務めた有力政治家である。ポリュビオス自身、連邦の重要職である騎兵長官を経験したが、アンティゴノス朝マケドニア王国が滅亡した後、アカイア連邦からローマに送られた 1000 人の人質の一人として、人質生活を送ることとなった⁽¹⁸⁾。この間、のちにローマの有力政治家・軍人となる小スキピオと親しい交わりを持ち、前 148 年からの第 3 次ポエニ戦争で彼がローマの司令官となった時には、小スキピオに請われてカルタゴに随行しており、その滅亡を見届けている。こうした経験から、彼の著作である『歴史』は、ローマの興隆と東方進出に多くのページを割く一方、ヘレニズム世界の動向の情報も多く伝えており、当該時期のヘレニズム世界とローマの、双方についての最重要史料である。したがって、ヘレニズム時代の人々が異質な存在と考えた集団の考察を目的とする際、彼の記述の重要性は自明といえる。

ところが、ポリュビオスの記述から、ヘレニズム時代の他者のイメージを再構成するという作業は、管見の限り盛んとはいえない。チャンピオンが 2004 年に出した研究はその数少ない試みであり⁽¹⁹⁾、本稿の執筆にあたってこの研究から多くの着想を得ている。しかしチャンピオンの研究の主な関心は、ポリュビオスがローマという存在をどのように受容したか、という点にある。これに対して本稿の主たる問題意識では、ポリュビオスが他者としたのはどのような集団だったのかということが、課題となる。

課題の設定

以上の整理に基づき、本稿の目指すところを、より明確にしたい。本稿は、ヘレニズム時代の国際関係を規定した枠組みを明らかにし、ヘレニズム世界の一体性や勢力均衡という、近年批判にさらされているかつての通説が有効性を失ったのか、という問題への回答を試みることを目標とする。

その最初の作業として、ヘレニズム時代の国際関係の基本的な枠組みを、王権と戦争の関係から整理する。この際に、ヘレニズム王国が他のヘレニズム国家と戦争をするときと、それ以外の集団すなわちバルバロイとされた集団との戦争では、王権に与えた効果が違うことが想定されるため、それぞれに分けて分析する。その対象とするのは、セレウコス朝である。この王朝を取り上げるのは、セレウコス朝がヘレニズム王国に対しても、それ以外の相手に対しても、豊富な戦争の事例を有するためである。すなわち他のヘレニズム王国相手の戦争については、境を接していたプトレマイオス朝との間に、幾度も戦争を行っ

た。また、セレウコス朝はヘレニズム王国の中でも最も広い領域を支配していたため、とりわけ東方において数多くの異質な集団と接しており、こうした諸集団との戦争の事例も多いことも、その理由である。

第1章と第2章では、ヘレニズム諸国同士の戦争の性格を考察する。このうち第1章では、セレウコス朝とプトレマイオス朝の間の、シリア戦争と総称される一連の戦争を分析する。前2世紀の半ばまで大国であり続けた両王国の戦争は、ヘレニズム国家同士の戦争の基本的な構造を知る、格好の事例といえる。また、このシリア戦争のうち、第4次の戦役の時期にセレウコス朝の王族である小アカイオス（以下アカイオス）が反乱を起こしている。一時は、ポリュビオスによって小アジアの王や君主の中で最強の存在と評された⁽²⁰⁾この人物の経歴は、ヘレニズム国家間の戦争が王権の確立に寄与したか否かを知る上で、重要な手掛かりとなる。そこで第2章では、このアカイオスの反乱について分析する。

次に考察するのは、ポリュビオスの記述を通して、異質な集団との区分の枠組みであり、本論ではこの点に関する意識を自他認識と呼ぶことにする。この構造を読み解く鍵として、蛮族を意味する「バルバロイ」という言葉が、ポリュビオスの記述の中で何者に対して使用されたのか、という点に注目する。ポリュビオスは、如何なる存在をバルバロイであると考え、その枠組みは如何にして規定されるものだったのだろうか。そして、彼の想定した他者との区分は、ヘレニズム時代の他者の枠組みとして普遍化しうるものだったのか。第3章では、ヘレニズム世界外の集団との戦争の与えた意味合いについて扱う。この章では、残存するポリュビオスの記述の分量という制約により、アンティオコス3世の治世の前半、即位当初のメディア・アトロパテネ遠征（前220年）から「アナバシス」と称された東方遠征（前212～205年）までを対象とする。これらの戦争の分析では、特にヘレニズム世界の東方において、ポリュビオスがバルバロイと規定した集団に注目する。これは、セレウコス朝とバルバロイの関係を論じた箇所が、ヘレニズム王権との関わりの中で用いられた例としては多いという事情による。現存する『歴史』の記述中、ポリュビオスがバルバロイという言葉を使用した箇所については、筆者の検索では85例が確認でき、チャンピオンの研究では93例が示される⁽²¹⁾。このうち、バルバロイという言葉の使用例の4割ほどは西方における、ローマやハンニバルとヨーロッパ方面のバルバロイ集団との関係についての用例であり、セレウコス朝関連の箇所は全体の2割ほどを占めている。ヘレニズム時代人ポリュビオスが考えたバルバロイの地理的な区分、そして共通する性格を分析することを、章の目的とする。以上の3章をもって、ヘレニズム時代の王権と国際関係の

基本的な枠組みを考察するものとしてまとめ、第1部とする。

この自己と他者の区別という問題は、アレクサンドロス大王という存在の前提抜きには語りえない。ヘレニズム時代の人々はアレクサンドロス大王をどのような存在としてとらえ、ポリュビオス自身はどのようなイメージを持っていたのだろうか。この問題を第4章で考察し、単独で第2部とする。

こうした構造は、ローマの進出によってどのように変化したのだろうか。アレクサンドロス大王によって規定されたヘレニズム世界の枠の外に位置するのが、ローマである。ポリュビオスはヘレニズム世界の描写を、第140オリュンピア紀、すなわち前220年から前216年にわたる時期から開始している。この時期から筆を起した理由について、ポリュビオスは「歴史はあたかもひとつの身体をもち始め」たためである、と述べている⁽²²⁾。これは、ローマの存在を意識した記述である。そして、ローマがヘレニズム世界への進出を開始したのは、第1章から第3章までで主たる分析対象とした、セレウコス朝のアンティオコス3世の治世と重複する。ローマの進出当初にヘレニズム世界の側の目には、この新参者がどのような存在と認識されたのだろうか。そして、この過程を伝えるポリュビオスは、ローマを如何なる存在として扱ったのだろうか。ローマの進出がヘレニズム諸王国の王権に与えた衝撃を第5章で、ローマに対するヘレニズム世界側の認識を第6章で分析し、合わせて第3部とする。

以上の検討を通じて、ヘレニズム時代に生きた人々が想定した、自己と他者の間を分ける枠組みを考察する。そして、ヘレニズム世界がローマという新参者の登場をどのように受け止めたのか、最初期の状況からその後の変化への展望を示す。こうした問題設定のため、本稿の分析の下限はマケドニア王ピリッポス5世の死去（前179年）ごろまでとする。

(1) Rostovtzeff (1941) vol.1, 134.

(2) 長谷川岳男 (1995) 37-50 ; Eckstein (2009) 247-65.

(3) *Suda*, s.v. Basileia (2): Austin 2nd, 45.

(4) Walbank (1984a) 66.

(5) *ibid.*

(6) Walbank (1984a) 73-4.

(7) Cf., Sherwin-White, Kuhrt (1993) 117-140; Per Bilde et al. (1996) 9-14.

-
- (8) Chaniotis (2005) 70-71.
- (9) Eckstein (2009) 249-50.
- (10) Walbank (1984a) 65-71; Austin (1986) 455-6.
- (11) Walbank (1981); 邦訳 (1988) 322-58 頁。以下、ウォールバンク『ヘレニズム世界』。
- (12) Austin (1986) 455-6.
- (13) Ager (2003) 49-50.
- (14) Eckstein (2009) 257.
- (15) Billows (1990) 155-60.
- (16) Mitchell (2003) 287.
- (17) Erskine (2003) 5.
- (18) Walbank (1972) 6-13; 大戸千之 (2012) 145-206。
- (19) Champion (2004).
- (20) Polyb.4.48.12.
- (21) Champion (2004) 245-253.
- (22) Polyb.1.3.4.

第1部

ヘレニズム諸王国の戦争と国際関係の基本的性格

第1章 シリア戦争考

セレウコス朝とプトレマイオス朝は、ともにアレクサンドロス大王の「後継者」の直系にあたる、ヘレニズム世界の二大国である。かたやセレウコス朝は小アジア以西の旧アケメネス朝領域をひろく支配し、一方でプトレマイオス朝はエジプトを本拠とし、小アジアエーゲ海沿岸域にも勢力を保有していた。シリア戦争とは、この両大国が数次にわたって展開した戦役を総称する呼称である。

この一連の戦争については、個別事例の考察は存在するものの、全体像の概観を意識した専門研究は、ハイネンが『ケンブリッジ古代史』第2版に発表した研究を除き、管見の限りでは存在しない状態だった。ハイネンはおもにプトレマイオス朝研究者としての立場から、第1次から4次までのシリア戦争を分析している。それによると、プトレマイオス朝は、シリアにおけるセレウコス朝との戦争によって、エジプトでの支配権を確立した⁽¹⁾。またハイネンは、第1次シリア戦争と同時期のガラティア人侵入が、セレウコス朝の小アジア支配に大きな打撃を与えたことを強調する。すなわち、王位を継いだばかりのアンティオコス1世がシリアでの戦争に集中していたため、小アジアの土着勢力がそれぞれにガラティア人に対処せざるを得なかった。最終的にガラティア人の攻勢を食い止めたのはアンティオコス1世による勝利だったが、それまでの間にこれら小アジアの諸勢力に、王位をとなえる足がかりを用意する結果となったという⁽²⁾。

ハイネンの研究は、シリアのみならず小アジアにおける諸勢力の動向にも目を配るなど多岐にわたる重要な論点を包含するものだが、セレウコス朝側についての言及が少ないという問題がある。また、プトレマイオス朝がエジプト以外にも広大な領域を有していた点を考慮すると、他のヘレニズム国家との抗争が王権に与えた効果に対する考察が充分ではない。オースティンは、プトレマイオス朝側の積極的な姿勢が指摘されがちなシリア戦争だが、双方ともにこの戦役を欲したとする⁽³⁾。

オースティンの指摘が妥当であった場合、両者は互いの戦争をいかなる文脈の中に位置づけたのだろうか。こうした問題意識から、筆者は以前、セレウコス朝史サイドから第5次シリア戦争までを扱った研究を出したが⁽⁴⁾、その後セレウコス朝に関する仕事を多く出しているグレインジャーが、近年研究を出している⁽⁵⁾。彼の仕事はセレウコス朝とプトレマイオス朝の関係を、前301年から前128年に至るまでのヘレニズム世界の、最も重要な外交問題としている⁽⁶⁾。その一方でグレインジャーは、大規模な戦闘は第4次シリア戦争の

ラピアの決戦を含めて少ないことなど、双方の軍事的衝突が限定されたものだったことを指摘する⁽⁷⁾。

グレインジャーの研究は、かつての拙稿と多くの点で意見を共有するものであるが、シリア戦争と王権の関係という問題への関心は低い。すなわち、シリア戦争における勝敗、とりわけ敗北が両王朝の当主の正当性に影響するものだったのか、という検討が存在しない。第3次シリア戦争でセレウコス朝はバビロニアにまで侵攻され、第4次シリア戦争ではラピアの決戦で敗北を喫している。こうした軍事的蹉跌が、セレウコス朝の当主の王権を弱体化させるものだったか、セレウコス朝の側に重心を置きつつ考察を展開する。なお、本章の分析の下限は、第5次シリア戦争（前202～200）までとする。

I、第1・2次シリア戦争の経緯

まず、最初の2度のシリア戦争を概観し、これらに共通する性格を確認しておきたい。最初に両王朝が衝突したのは、プトレマイオス朝では初代プトレマイオス1世から同名の2世に、セレウコス朝では開祖セレウコス1世からアンティオコス1世に代替わりした後、前274年頃のこととされる。これより前、イプソス会戦後にシリアを獲得したセレウコス1世は、シリアの帰属を巡ってプトレマイオス1世と摩擦を起こしたが、開戦には至らなかった⁽⁸⁾。しかし、この時の両国の不一致が、後に起こるシリア戦争の伏線となった。

最初のシリア戦争の詳細な経過は不明であるが、序盤にプトレマイオス朝側がバビロニアまで侵攻するも撤退し、両国が和議を結んだことが確認されている⁽⁹⁾。次の第2次シリア戦争は、プトレマイオス朝はプトレマイオス2世のまま、一方のセレウコス朝側はアンティオコス2世に代が替わった直後、前260年頃に発生した。この戦役は前253年頃まで継続したが、最終的にはセレウコス朝側の優位のうちに終わり、イオニア・キリキア・パムピュリアを獲得した⁽¹⁰⁾。また、この第2次戦役の後、プトレマイオス2世の娘であるベレニケ・シュラがアンティオコス2世の妃として輿入れした⁽¹¹⁾。

以上が第1次および第2次のシリア戦争の概略であるが、共通する特色として最初に指摘できることは、シリアにおける両国の戦役が、いずれも王が交代した直後に起きたということである。その後、いずれかの王朝で王が交代するまで、両王朝間の直接的軍事衝突は見られない。また、いずれの戦役においても、プトレマイオス朝・セレウコス朝ともに敵側領土の全域征服には至っていない。以上からシリア戦争の性格として、王の交代時に

失効する、互いの勢力範囲に関する合意を画定するための作業だったということが仮定できよう。この点を確認した上で、比較的史料が残存している第 3 次シリア戦争への考察に進む。

II、第 3 次シリア戦争

第 3 次シリア戦争については、それまでのシリア戦争と違い、開戦までの経緯や原因についても史料からたどることができるが、残存する史料は、ほとんどがプトレマイオス朝の側のものに偏っている。したがって、この戦争についての研究は、ほとんどがプトレマイオス朝の側に立ったものとなる。本節での課題は、この戦争について主にセレウコス朝の側から分析することである。以下、最初に戦争の経過を概観し、開戦までの情勢を整理した後、戦争の内実について考察を加える。

① 第 3 次シリア戦争概観

先述のように、第 2 次シリア戦争の終結後にプトレマイオス 2 世の王女ベレニケ・シュラがアンティオコス 2 世に嫁ぎ、最初の妻であるラオディケ 2 世は小アジアに遠ざけられた。ベレニケ・シュラとアンティオコス 2 世の間には男子が誕生したが、その後ラオディケ 2 世は王妃の地位を回復した⁽¹²⁾。

そのころ、プトレマイオス朝が分離していたキュレネを統合した。プトレマイオス 1 世の死後、エジプトと隣接するキュレネは、プトレマイオス 1 世の義子マガスのもと、プトレマイオス朝からは分離・自立していた⁽¹³⁾。セレウコス朝のアンティオコス 1 世は、このキュレネ王のもとに娘アパマを嫁がせ、キュレネとプトレマイオス朝の間に楔を打ち込んでいた⁽¹⁴⁾。マガスは、自分の死後にプトレマイオス朝との再統合を希望していたが、前 250 年頃にマガスが死んだ後、寡婦アパマはマケドニア王アンティゴノス 2 世の弟・デメトリオス美王を、ベレニケの夫として招いた。このデメトリオス美王とアパマが密通したため、ベレニケがデメトリオスを殺してプトレマイオス 3 世を夫として迎えたことを、ユスティヌスが伝える⁽¹⁵⁾。キュレネの継承に際して、相続人母娘の間で意見の対立があったことがうかがい知れる。

プトレマイオス 3 世は、前 246 年に父の後を受けて即位した後、妹ベレニケ・シュラから救援要請を受けた⁽¹⁶⁾。このときセレウコス朝では、プトレマイオス 2 世の即位とほぼ同

時期にアンティオコス 2 世が小アジアで死去した後、王位をめぐる内紛が起きていた。アンティオコス 2 世の側にあり、王の長子セレウコスを擁したラオディケ 2 世と、シリアで王子アンティオコス⁽¹⁷⁾とともにあったベレニケ・シュラが、それぞれに息子の擁立をはかっており、ベレニケ・シュラは即位したばかりのプトレマイオス 3 世に救援を要請したのである。

プトレマイオス 3 世はこれを受けてシリアに向けて発つものの、彼がシリアのセレウケイア・ピエリアに到着したときには、ベレニケ・シュラとアンティオコスは、既に殺されていた⁽¹⁸⁾。しかしプトレマイオス 3 世は進軍を止めず、遠くバビロニアまで軍を進めて、同地でセレウコス朝の新王である、ラオディケの息子セレウコス 2 世と対峙した。その後、プトレマイオス朝はエジプトに退き、セレウコス 2 世はプトレマイオス 3 世が手中に収めた領域をほとんど回復するが、前 241 年頃に戦役が集結した後も、セレウケイア・ピエリアはプトレマイオス朝の支配下に置かれ続けることとなった⁽¹⁹⁾。以上が、第 3 次シリア戦争の概要である。以下、この「戦役」の終結までを検討する。

② アンティオコス 2 世の死と幼王誕生の可能性

アンティオコス 2 世の死によって、セレウコス朝は成年に達した前王の長子と幼年の王子のどちらが後を継ぐかという問題に直面した。その原因は、アンティオコス 2 世が治世を通じて、次期国王ともいべき共治王を定めなかったことによる。この時点まで、セレウコス朝では後継者を共治王として立て、王位の継承を円滑にすることが図られていた。開祖セレウコス 1 世は、長子アンティオコス 1 世に 2 人目の王妃ストラトニケを妻として与えると同時に、王の称号を与えて上部諸州の統治を任せさせた⁽²⁰⁾。そのアンティオコス 1 世もまた、最初は長子セレウコスを、その粛清後は次子アンティオコス 2 世を共治王としている⁽²¹⁾。しかし、アンティオコス 2 世には、その治世を通じて共治王を立てた形跡がない。『天文日誌』の該当箇所は、アンティオコス 2 世が治世を通じて単独の王だったことを伝える⁽²²⁾。

ボワは、このアンティオコス 2 世の行動は、従来のセレウコス朝の慣習を崩すものだったと指摘する⁽²³⁾。オグデンは、その背景として、ベレニケ・シュラがアンティオコス 2 世の王妃として輿入れする際、彼女所生の王子に王位を継がせる約束があったと主張する⁽²⁴⁾。

アンティオコス 2 世はなぜ、ベレニケ・シュラの産んだアンティオコスを共治王として立て得なかったのだろうか。言い換えるならば、ヘレニズム諸王国はこの段階で、幼少の

王の存在を許容し得るほど成熟していたのだろうか。ここで、やや横道に逸れるが、アレクサンドロス大王死後の、ヘレニズム諸王家の王位継承について整理したい。

アレクサンドロス大王の王家アルゲアダイが断絶した後、ディアドコイ諸国は第 3 次シリア戦争の時点に至るまで、幼少の王を戴いた例がない。アレクサンドロスの死後にその王家が滅亡したのは、前 323 年の大王死去の際に、王位継承にふさわしい男子王族がいなかったことによる。すなわち、その時点で王位継承権者は、精神障害を持つとされた腹違いの兄弟アリダイオスと、王の後の 1 人ロクサネが身ごもっていた胎児のみだった⁽²⁷⁾。アリダイオスはピリッポス 3 世として、ロクサネの産んだ男児はアレクサンドロス 4 世としてともに王に擁立されるが、両者ともに政治・軍事能力に欠けており、ディアドコイ間の抗争の中でアルゲアダイは消えていった。

その後を受けて王を称したディアドコイのうち、カッサンドロスとリュシマコスが後継者選別に失敗して王家が没落した。マケドニアを領したカッサンドロスの場合、彼が前 297 年に死去した後に王家内の抗争が発生し、デメトリオス 1 世ポリオルケテスの介入をうけて国を奪われた⁽²⁸⁾。そのデメトリオス 1 世を追い出したリュシマコスは、前 281 年にコリュペディオンの会戦でセレウコス 1 世に敗死し、その遺児らが年少だったため、妻アルシノエは異母兄プトレマイオス・ケラウノスと結婚して、円滑な王位継承を図った。しかし、遺児らは一部を残してケラウノスに殺されてアルシノエ自身は追放され、没落の憂き目にあっている⁽²⁹⁾。セレウコス朝が次代の王を共治王として立ててきたのは、こうした事態を防ぐうえで、有効かつ必要な対策だった。

セレウコス朝・プトレマイオス朝・アンティゴノス朝のいわゆるヘレニズム三大王国で、幼少の王が立った初例は、前 205 年に即位したプトレマイオス朝のプトレマイオス 5 世である。この王の父、プトレマイオス 4 世即位時に男系王族は全て殺されており、直系の男子は他に存在しなかったとみられる⁽³⁰⁾。セレウコス朝で幼少の王が即位した最初の例は、前 164 年のアンティオコス 5 世である⁽³¹⁾。アンティゴノス朝は最後まで幼年の王をもたなかった。前 229 年にデメトリオス 2 世が死んだ時、幼少の王子ピリッポス（後の 5 世）の摂政に指名されていた王族アンティゴノス・ドーソンが、ピリッポス 5 世の母親と結婚し、アンティゴノス 3 世として王位についた⁽³²⁾。そしてドーソンの死後、改めてピリッポス 5 世が王位を継承している⁽³³⁾。

以上の事例が教えることは、少なくとも前 3 世紀末まで、ヘレニズム諸王国は幼少の王を戴くことが可能な段階にはなかったということである。『スダ』に示されているように、

王は軍事・政治に自らあたるのが可能な人間であることが求められていたのである⁽³⁴⁾。

よって、前 3 世紀半ばのこの段階では、軍を率いることが可能な年齢に達していることが、王として立つ条件であり、幼い王子アンティオコスが王位を襲いうる可能性は低かったとみるべきだろう。しかし、アンティオコス 2 世が最後まで共治王を立てられなかったことは、後継者セレウコス 2 世にとって大きなつまずきとなった。シリアでは、ベレニケ・シュラがアンティオコスを王と宣言し、兄プトレマイオス 3 世に援助を求めた⁽³⁵⁾。これを受けてプトレマイオス 3 世は、新妻ベレニケ 2 世をエジプトに残してシリアへと発ったのである。シリア以外にも、小アジアでベレニケ・シュラに同調してアンティオコスを王と宣言した例が確認される⁽³⁶⁾。

幼少のアンティオコスが王として権威を確立するためには、プトレマイオス 3 世の援助が必要だった。プトレマイオス 3 世は、セレウコス朝の内政にどの程度、関与するつもりだったのだろうか。スレウェリン・ジョーンズとワインダーは、プトレマイオス 3 世がベレニケ・シュラと結婚し、その子アンティオコス「王」を後見する予定でいたことを指摘する⁽³⁷⁾。

ベレニケ・シュラとアンティオコスがいたセレウキスでアンティオコスを支持する勢力があったことは、プトレマイオス朝との連携を歓迎する勢力が存在していたことをうかがわせる。セレウコス 2 世がいちはやくこの母子を排除したのは、当然の措置だろう。しかし、アンティオコスとベレニケ・シュラの排除は、プトレマイオス 3 世の侵攻を止めることに繋がらなかった。それどころか、プトレマイオス 3 世はさらにセレウコス朝領内深くに侵攻したのである。

③ プトレマイオス 3 世の侵攻と第 3 次シリア戦争の終結

第 3 次シリア戦争の特質として、プトレマイオス 3 世が殆ど軍事衝突もなく、セレウコス朝領内深くに侵攻したということが挙げられよう。すなわち、セレウコス朝統治下の諸都市は殆ど何の抵抗もなく、続々とプトレマイオス朝の軍に城門を開いたということである。その侵攻経路の始点がセレウケイア・ピエリアという事実は、無視してよいものではない。この地域は「セレウキス」と称され、セレウコス朝がテトラポリスと総称される 4 つの重要都市を建設し、セレウコス朝の最重要地域となっていた⁽³⁸⁾。このときセレウコス 2 世は未だ小アジアにおり、当該地域におけるセレウコス朝の新しい王の不在が、この事態を招いたということが想像されるだろう。

ヘレニズム諸国の王たちにとって、未だに軍事的功績を挙げていない新王の即位時は、王国がもっとも危険にさらされた瞬間であるとみてよい。ベレニケ・シュラにとっては唯一の支持基盤といってよいセレウキスに入ったのち、プトレマイオス 3 世は、当初はベレニケ・シュラ母子の代理人として、母子の死の報に接した後は復讐者として振る舞った⁽⁴⁰⁾。こういったプトレマイオス 3 世の巧妙な行動が、新しい王の不在によるセレウキスの動揺を助長し、プトレマイオス朝軍の円滑な侵攻へと繋がったとみてよいだろう。

プトレマイオス 3 世の破竹の進撃は、しかしながら、バビロニアで停止した。セレウコス 2 世がこの地に先回りし、対陣することとなったのである。仮にプトレマイオス 3 世がバビロニアを占領しても、行動限界を超えており、長く保有することは不可能だったとヘルブルは指摘している⁽⁴¹⁾。彼の意見は妥当であるが、その他の要因についても考慮すべきであろう。プトレマイオス 3 世が敵中深くの侵攻を成し得たのは、何よりもセレウコス朝の新王が確立していなかったという理由による。

こうした中、プトレマイオス 3 世はエジプトでの反乱の報を受け、バビロニアから急速に撤退することとなった⁽⁴²⁾。反乱の規模については不明だが、プトレマイオス 3 世が帰国を急いでいないことから、グレインジャーは反乱が深刻なものではなかったと推測している⁽⁴³⁾。すなわち、エジプトでの反乱は、プトレマイオス 3 世にとっては撤退のための格好の口実に過ぎなかったというのだが、この後のプトレマイオス 3 世の動向については史料が乏しいため、グレインジャーの指摘の妥当性は判断しがたい。プトレマイオス 3 世の後退後、彼の征服地の多くはセレウコス 2 世によって奪い返されたが、セレウキスの四大都市のひとつセレウケイア・ピエリアは、彼の在世中はプトレマイオス朝から奪還できぬままに終わった⁽⁴⁴⁾。撤退するプトレマイオス 3 世に対する追撃戦が失敗に終わったことを、ユスティヌスは伝える⁽⁴⁵⁾。

他方、セレウコス 2 世はその治世を通じて不安を抱えつつ、王位を維持し続けた。幼い王を擁してのセレウコス朝への間接支配というプトレマイオス 3 世の計画は、果たされぬままに終わったのである。

以上、第 3 次シリア戦争の検討から指摘できることは、2 点ある。まず、第 1・2 次シリア戦争の結論と同様、敗者というべきセレウコス 2 世の王権は致命傷にいたらなかったことが確認できる。次に、アンティオコス王子の王位獲得失敗が示唆することは、ヘレニズム諸国は、この段階では幼少の王を戴き得るほどには成熟していなかったことである。

III、第4次シリア戦争

① 第4次シリア戦争の経過

第4次シリア戦争の起こる前、セレウコス朝とプトレマイオス朝は、ほぼ同時に王が交代した。セレウコス朝の側では、セレウコス2世の後、セレウコス3世の短い治世を経て、前223年にアンティオコス3世が王位につき、対するプトレマイオス朝では、前221年にプトレマイオス3世から同名の4世に王が代わった⁽⁴⁶⁾。第I節で述べた、セレウコス朝ープトレマイオス朝間の戦争が開始される条件がそろったことになる。

まず、セレウコス朝の宰相ヘルメイアスが、若い王に対プトレマイオス朝戦を促し、アンティオコス3世は軍を集めて対プトレマイオス朝戦に備えた⁽⁴⁷⁾。しかし、シリア南部に向けて進軍を開始した直後、メディアのサトラップであるモロンによる反乱とバビロニア占領の情報に接し、アンティオコス3世は軍を退いた⁽⁴⁸⁾。その後、アンティオコス3世は繰り返しプトレマイオス朝との戦争を主張するヘルメイアスを押し切り、自ら軍を率いてモロンを討ち、さらにはメディア・アトロパテネに軍を進めて同地の支配者であるアルタバザネスを服属させ、国境を安定させた⁽⁴⁹⁾。この間に小アジアでアカイオスが反乱を起こすが、その反乱を放置したまま、アンティオコス3世は前219年、プトレマイオス朝との戦争を開始した⁽⁵⁰⁾。

アンティオコス3世は、最初の目標であるセレウケイア・ピエリアを奪還した後、プトレマイオス朝を裏切ったテオドトスの手引きに従って、シリアを徐々に南下した⁽⁵¹⁾。プトレマイオス朝側の対応は遅れ、コイレ・シリアの都市を次々と落とされたが、使節をアンティオコス3世のもとに派遣して動きを牽制し、その間に軍を編成した⁽⁵²⁾。軍容を整えた両王は前217年、シリア南部のラピアで激突し、プトレマイオス4世が勝利した⁽⁵³⁾。敗れたアンティオコス3世はアンティオケイアに逃げ戻り、プトレマイオス4世に和を請うた。プトレマイオス4世もそれを受け、両国間に和議が結ばれた⁽⁵⁴⁾。アンティオコス3世は、セレウケイア・ピエリアは確保したものの、緒戦で征服した都市の大部分はプトレマイオス朝下に帰した⁽⁵⁵⁾。以上が、第4次シリア戦争の概略である。

② 第4次シリア戦争考察

最初に考察するのは、アンティオコス3世の宰相ヘルメイアスの姿勢である。モロンの反乱が発生した直後、未だ軍を発していなかったアンティオコス3世は、プトレマイオス朝との戦争を中止して自らこれを鎮圧しようとした。しかし、すでに将を任じて派遣して

いること、および小アジアを管轄するアカイオスがプトレマイオス朝と密通していることを理由に対プトレマイオス朝戦争を主張する、ヘルメイアスに従った⁽⁵⁶⁾。その後、モロンがメソポタミアまでを手中に収めるに至ってもなお、ヘルメイアスは王自身による反乱の征伐に反対した⁽⁵⁷⁾。

ヘルメイアスが一貫して主張したのは、「王が自ら戦う相手は王ないしは王国全体の脅威となる外敵であり、反乱者は部下に任せるべき」という論理である。ヘルメイアスはこの点を、モロンの反乱発生時も、バビロニア失陥後も変えていない。当初はアンティオコス 3 世がこの意見に従った点から見て、彼の主張には説得力があったとみることができる。しかし、最終的にはアンティオコス 3 世はヘルメイアスの主張を退け、自身によるモロン征討を決意した⁽⁵⁸⁾。その後も対プトレマイオス朝戦を主張するヘルメイアスの姿勢は変わらず、アンティオコス 3 世がモロンを討った勢いに乗じてメディア・アトロパテネへの侵入を決意した際にも王に反対し、対プトレマイオス朝戦を主張している⁽⁵⁹⁾。ヘルメイアスが自説を曲げてメディア・アトロパテネ侵攻に同意したのは、アンティオコス 3 世に子が誕生したとの知らせを受けてからである。ポリュビオスはヘルメイアスの悪意を指摘しているが⁽⁶⁰⁾、むしろ彼の主張からは、セレウコス朝の王が最初に行うべき事業はシリアにおけるプトレマイオス朝との領域画定である、との認識を読み取るべきだろう。

次に、ラピア会戦前夜のアンティオコス 3 世とプトレマイオス朝の和平交渉を検討する。既に見たように、プトレマイオス朝側は自軍の陣容を整えるまでの時間を確保するために、アンティオコス 3 世に対して使節を派遣して和平交渉を行った⁽⁶¹⁾。この交渉で注目されるのは、双方が王朝開祖の時点での領域に対する所有の正当性を主張している点である。

アンティオコス (3 世) は、最初アンティゴノス (1 世) ・モノプタルモスによるそれらの地の掌握と次のセレウコスによるその地の統治権を主張し、従ってコイレ・シリアの支配権も正当な所有権も、従って自分にあり、プトレマイオスには無い、と言った。(中略) (アンティゴノス 1 世の領地は、これを倒した) その場所にいた全ての、カッサンドロス・リュシマコス・セレウコスによって分割され、セレウコスの取り分を全てのシリアの地にした、と。一方プトレマイオスの側からの使者たちは、それと反対のことを証明しようとした。(中略) ラゴスの子プトレマイオス (1 世) の時の所有物は、…プトレマイオスは全てのアジアの領土をセレウコスに贈与し、コイレ・シリアより南とフェニキアを自ら手に入れたのである、と述べた⁽⁶²⁾。

アンティオコス 3 世側の主張は、前 301 年のイプソスの会戦以前にアンティゴノス 1 世

に属していたシリアの地は、同会戦の勝利によってセレウコス 1 世の所有するところとなったので、その後継たる自分が全シリアを支配する権利を持つというものだった⁽⁶³⁾。対するプトレマイオス朝側は、セレウコス 1 世に帰属したのはコイレ・シリアとフェニキアを除く全てのアジアである、と主張している⁽⁶⁴⁾。

両者の主張からは、開祖の獲得した領土を越える地域については支配の正当性を持たない、という認識を読み取ることができると思われる。従って、少なくともヘレニズム国家同士では、領土の取り合いは限定されたものだった、とみてよいだろう。両者の主張は完全に対立しており、議論は平行線をたどった。

いまひとつの両者の対立要因は、小アジアで活動していたアカイオスの扱いをめぐるものであった。詳細な経緯は次章で検討するが、セレウコス朝の王族であるアカイオスは、セレウコス 3 世が暗殺された後をうけて小アジア各地を転戦する一方、アンティオコス 3 世がメディア方面への遠征によって不在である隙を衝いてシリア北部を制圧しようと試み、麾下の兵たちの不服従によって失敗していた⁽⁶⁵⁾。しかし、未だにその勢力は小アジアに健在であり、アンティオコス 3 世にとっては脅威となっていた。この前後、アカイオスの父アンドロマコスがプトレマイオス朝の手中におかれていたことから、アカイオスの反乱はプトレマイオス朝に教唆されてのものであったとする議論も存在する⁽⁶⁶⁾。後の情勢からみてプトレマイオス朝とアカイオスとの接触が存在したのは確実であり、プトレマイオス朝側はアカイオスも和議の中に加えることを提案するが⁽⁶⁷⁾、アンティオコス 3 世にとっては到底、認められるものではなかった。交渉の決裂は、自明のことといえよう。

アンティオコス 3 世がアカイオスを脅威としていたことは、彼のコイレ・シリア制圧の速度が非常にゆっくりしていたことや、プトレマイオス朝との折衝がコイレ・シリアから見れば後方にあたるセレウケイア・ピエリアで行われたことから、みととることができよう⁽⁶⁸⁾。ポリュビオスによれば、当初アンティオコス 3 世はセレウケイア・ピエリアの制圧後は速やかにアカイオス征討に向かうことを予定していた。しかし、プトレマイオス朝下でコイレ・シリア統治を担当していたテオドトスの手引きで当初案を変更し、コイレ・シリアの制圧に向かっている⁽⁶⁹⁾。第 3 次シリア戦争、およびこの時点でのセレウコス朝だけではなく、新王即位時の混乱は、プトレマイオス朝でも無縁ではなかったということを確認できる事例といえよう。もっとも、この事例を除けば、プトレマイオス 4 世は即位時に主要な成人王族を粛清し、またスパルタから亡命していたクレオメネス 3 世の蜂起も鎮圧しており、ラピアの決戦の頃までには後背の不安を一掃していた⁽⁷⁰⁾。敵手たるアンティ

オコス 3 世と比べて、比較的その立場は安定していたと考えられる。

第 4 次シリア戦争は、アンティオコス 3 世の側からいえば、即位後の早い時点での対処が求められていたと同時に、後背に強力なライバルを抱えたままで遂行することを強いられた、危険を伴う事業だったといえよう。ラピアの決戦でアンティオコス 3 世は敗れ、急速に後退した。ここからも、アカイオスの動向を常に意識しなければならなかったアンティオコス 3 世の困難がうかがえる。アカイオスには再度の反乱を起こす意図はなかったとする研究もあるが⁽⁷¹⁾、ポリュビオスが繰り返し指摘するように、アンティオコス 3 世が後方への注意を強いられたという点を無視すべきではないだろう。

第 4 次シリア戦争が終わった後の両国間の和平では、アカイオスの扱いに関する問題が取り沙汰された形跡は確認できない。ポリュビオスはプトレマイオス 4 世がアンティオコス 3 世を追い詰めなかったことを批判しているが、その事実は同時に、セレウコス朝とプトレマイオス朝の間に「相互保存の原則」が存在していたことを示唆するものと思われる。またこれ以降、アンティオコス 3 世はプトレマイオス 4 世の死に至るまで、シリア方面での軍事行動を起こしていない。シリア戦争が、両王朝間の代替わりごとに行われる、勢力範囲画定のための作業であることが、改めて確認できる。

IV、第 5 次シリア戦争

① 第 5 次シリア戦争梗概

前 205 年にプトレマイオス 4 世が死んで幼いプトレマイオス 5 世が即位すると、コイレ・シリアが動揺し始めたため、プトレマイオス朝はスコパスを派遣し、この地域の掌握を計った⁽⁷³⁾。一方、アジア内陸部への遠征を完了させて地中海沿岸地域に戻ってきたアンティオコス 3 世は、前 202 年にプトレマイオス朝との戦争を開始した。この場合も、過去 4 次にわたるシリア戦争の開始の図式に合致しているといつてよかろう。そしてアンティオコス 3 世は、スコパスをパニオンの会戦で撃破した後、激しい抵抗を排しつつコイレ・シリアを制圧し、ユダヤの服属を受け入れたのである⁽⁷⁴⁾。

② 第 5 次シリア戦争考察

この戦争でまず指摘できることは、第 4 次戦役と比較した際の、アンティオコス 3 世の立場の安定だろう。まず、アンティオコス 3 世は前回戦役時の最大の不安要因だった、アカイオスを既に除いていた⁽⁷⁵⁾。また、その後の東方遠征の成功により、権威を確立するこ

とに成功していた⁽⁷⁶⁾。さらには戦役開始に先立ち、アンティオコス 3 世はプトレマイオス 4 世の訃報を受けると、アンティゴノス朝のピリッポス 5 世と同盟を結び、戦役に備えた⁽⁷⁷⁾。後で検討するように、第 5 次シリア戦争の時期、ピリッポス 5 世は小アジアに進出してペルガモンのアッタロス 1 世と戦った。

これより先、アンティオコス 3 世はアカイオス征伐に当たってアッタロス 1 世と同盟して、これを挟撃した⁽⁷⁸⁾。また、反乱鎮圧後にはアカイオスの根拠地だったサルデイスに、有力廷臣のゼウクシスをおいて小アジアの掌握をはかった。アンティオコス 3 世の東方遠征中、およびその後もゼウクシスはサルデイスに駐留し続けており、その支配は安定したものだと考えられる⁽⁷⁹⁾。また、アカイオス征討時にアッタロス 1 世と結んだ同盟関係は継続しており、ペルガモンとの間に目立った紛争もなかったことから、アンティオコス 3 世はプトレマイオス 5 世との戦争に当たって後背に不安は少なかった。

一方のプトレマイオス朝側は、まずプトレマイオス 4 世即位時の粛清により、成人王族が存在しない状態だった。摂政として幼い王の政務を代行する可能性を有していたのは、プトレマイオス 4 世の妹であり王妃だったアルシノエ 3 世だが、プトレマイオス 4 世の死と前後して暗殺されていた⁽⁸⁰⁾。また、この時期は上エジプトが離反するなど、王家が動揺している時期だった。この開戦時の状況をグレインジャーは「プトレマイオス朝の崩壊」と呼んでいる⁽⁸¹⁾。幼いプトレマイオス 5 世は、開戦時には無論のこと、パニオンの開戦時にも陣頭指揮を執りうる年齢には達しておらず、この戦闘時にプトレマイオス朝軍の指揮を執ったのはスコパスだった。ポリュビオスはアンティオコス 3 世の行動を厳しく非難しているが⁽⁸²⁾、従前のシリア戦争開戦時の状況に鑑みると、プトレマイオス 4 世死去を契機としてのシリア戦争開始は、必然といえよう。後顧の憂いをなくし、実績を積んだアンティオコス 3 世にとって、内紛に揺れるプトレマイオス朝はくみしやすい相手だっただろう。

戦後の措置も興味深い。戦争終結の後、アンティオコス 3 世は小アジアからトラキアに進出し、前 196 年にリュシマケイアでローマ使節を出迎えている。その会談に際して、プトレマイオス朝領土からの撤退を求めるローマ使節に対して、アンティオコス 3 世はプトレマイオス 5 世に対する措置として、彼との間に婚姻関係を結んで友好関係を確立することは決定済み、として介入を退けている⁽⁸³⁾。また、その後前 195 年にアンティオコス 3 世は実際に娘のクレオパトラをプトレマイオス 5 世に嫁がせたが、その際に婚資としてコイレ・シリアをプトレマイオス朝に返還した⁽⁸⁴⁾。

このプトレマイオス 5 世との婚礼の後ほどなく、アンティオコス 3 世がローマとの戦争

を開始したことから、この婚姻政策を、ローマとの戦争を控えたアンティオコス 3 世によるプトレマイオス朝への懐柔策とみてとることも可能であろう。アッピアノスは、リュシマケイアでの会談によってセレウコス朝とローマの戦争が不可避になった、との立場を明快に取っている⁽⁸⁵⁾。

結果からいえば、アッピアノスの主張は妥当なものにみえる。しかし、アンティオコス 3 世のローマ使節に対する発言は、両国間に戦端が開かれるよりもかなり前のことである点に注意したい。その時点において、セレウコス朝とローマの戦争が不可避の前提としている点には無理がある。他方、戦争終結の際に婚姻関係を結ぶのは、アンティオコス 3 世以前にも、第 2 次シリア戦争の先例がある。また、第 3 章でみるバクトリアの例など、アンティオコス 3 世にとって婚姻による盟約関係の締結は常套手段とってよく、この時も、その他のときに用いた形式を踏襲したと考えるのが妥当と思われる。そして全体としては、第 5 次シリア戦争におけるアンティオコス 3 世の戦後措置は穏当とってよく、相互保存の原則はここでも確認できるものといえよう。

おわりに

本章での検討成果は、以下のようにまとめることができる。まず指摘できるのは、セレウコス朝・プトレマイオス朝間の、領土の境界線等に関する了解事項は、いずれかの王の死とともに失効し、新たな取り決めを定めるにあたっては、戦争というひとつの「手続き」を経る必要があったということである。その戦争も、敵手を滅亡させる必要がなかったことが推定された。そこには王国開祖によって獲得された領土に対する支配の正当性という論理に基づき、相互保存の原則を見出すことができよう。また、第 3 次シリア戦争の分析から、前 3 世紀半ばまでヘレニズム諸国は幼少の王を擁するほど王権が安定していなかったことが推測しうる。ヘレニズム王国の王は、軍事に携わり得る年齢に達していることが求められたことがわかる。

注目すべきは、セレウコス朝の王は第 3 次・第 4 次シリア戦争の敗北にもかかわらず、王位を維持し続けているという点である。すなわち、以上のシリア戦争をめぐる考察においては、セレウコス朝にとってプトレマイオス朝は、王権の存亡に関わる存在ではなかった、ということができる。この分析結果から、セレウコス朝の王権は、ヘレニズム国家との戦争によって左右されるものではなかったと考えられる。

こうした図式についてさらに手がかりを与えるのが、第 4 次シリア戦争で反乱を起こしたアカイオスである。次章では、この有力王族が王位獲得に失敗して滅亡していく過程を追い、セレウコス朝の王位確立に必要な条件を整理する。

- (1) Heinen (1984) 412-45.
- (2) Heinen (1984) 422-5.; Green (1990) 140.
- (3) Austin (1986) 461..
- (4) 拙稿 (2006) および (2007) 。
- (5) Grainger (2010).
- (6) Grainger (2010) 419.
- (7) Grainger (2010) 414.
- (8) Grainger (2010) 34-6.
- (9) Heinen (1984) 415-419; Ager (2003) 37-41.
- (10) Heinen (1984) 422-423.
- (11) Appian., *Syr.*65.; Grainger (2010)138.
- (12) Porphyry, *FGrH* 260 F 43; Ogden (1999) 128; Grainger (2010) 138.
- (13) Paus. 1.7.1
- (14) Paus. 1.7.3.
- (15) Justin, 26.3.3-8.
- (16) Justin.27.1.3; Gutzwiller (1992) 359-60.
- (17) *SEG* 42.994, 46.1413; Austin 2nd, 267; Grainger (2010), 149.
- (18) Justin.27.1.3; Gutzwiller (1992) 359-60
- (19) Justin,27,1; Heinen (1984) 420-421; Ager (2003) 43-44; Hölbl (2001) 49-51
- (20) Appian, *Syr.* 59-61; Plut. *Demet.*38.
- (21) Sachs&Hunger, -277; Boiy, T. (2004) 144-5.
- (22) Sachs&Hunger, -245
- (23) Boiy (2004) 148.
- (24) Ogden (1999) 129; グレインジャーの反論は、Grainger (2010)138.
- (27) Plut., *Alex.* 77; Justin, 13.2-3.

-
- (28) Justin, 16.1; Plut., *Demet.*, 36-7.
- (29) Justin, 24.2-3.
- (30) Polyb.34.1-2.
- (31) Appian., *Syr.*46; Justin, 34.3; Ogden (1999) 146.
- (32) Justin, 28.3.9-16.
- (33) Polyb.2.70.8; 4.2.5.
- (34) *Suda*, s.v. Basileia (2): Austin 2nd, 45.
- (35) Polyaeen.805.; Justin, 27.1.3-7.
- (36) *SEG* 42.994; Austin 2nd, 267; Grainger (2010) 157
- (37) Llewellyn-Jones and Winder (2011) 250-1.
- (38) Strabo 16, 2.4.
- (40) Hölbl (2001) 48-50; Grainger (2010) 156.
- (41) Hölbl (2001) 50
- (42) Heinen (1984) 420-1.
- (43) Grainger (2010) 163-4; McGing (1997) 273-7.
- (44) この都市の奪還が、第4次シリア戦争でのアンティオコス3世の最初の課題となった。
Polyb.5.58-61.2; Jähne (1974) 501-19; Grainger (2010) 169.
- (45) Justin, 27.2.4-5.
- (46) Polyb.II.71.3-6; 5.43.1-3.
- (47) Polyb.5.43. 1-3.
- (48) Polyb.5.45.
- (49) Polyb.5.49-55.
- (50) Polyb.5.57.
- (51) Polyb.5.40.1-3; 58-61.
- (52) Polyb.5.66-7.
- (53) Polyb.5.79-85.
- (54) Polyb.5.87.1-3.
- (55) Polyb.5.87.3-7; Heinen (1984) 438.
- (56) Polyb.5.45.6.

-
- (57) Polyb.5.49.3-5.
- (58) Polyb.5.49.
- (59) Polyb.5.55.3.
- (60) Polyb.5.49.3-5; 55.4-5.
- (61) Polyb.5.66-7.
- (62) Polyb. 5.67.6-10
- (63) Polyb.5.67.6-8.
- (64) Polyb.5.67.10.
- (65) Polyb.IV.48; 5.57.5-8.
- (66) cf. Schmitt, H. H. (1964) 166-7; Hölbl (2001) 129.
- (67) Polyb.5.67.12.
- (68) Polyb.5.66.
- (69) Polyb.5.61.3-10.
- (70) Polyb.5.34-39.
- (71) Ma (1999) 56-57.
- (73) Joseph., *A.J.*12.131.
- (74) Polyb.XVI.18-19; Joseph., *A.J.*12.131-3.
- (75) Polyb.8.15-20.
- (76) Polyb.11.34.15-6.
- (77) Polyb.15.20.
- (78) Polyb.5.107.4.
- (79) Ma (1999) 62-3.
- (80) Polyb.15.25.1-2.
- (81) Grainger (2010) 219.
- (82) Polyb.15.20.
- (83) Polyb.XVIII.51.10; Appian., *Syr.*3.
- (84) Appian., *Syr.*5.
- (85) Ibid

第2章 小アカイオスの反乱

—第4次シリア戦争時のセレウコス朝王族反乱—

前 220 年、セレウコス朝の小アジア方面統治を担当していた王族の小アカイオス（以下アカイオス）は、王位を宣言して東への進軍を開始した。この時、セレウコス朝の王安ティオコス 3 世は軍を率いて東方にあり、王朝の本拠であるシリア北部は空だった。アカイオスの狙いは、セレウコス朝の心臓部の奪取にあった。しかし、この企てはアカイオスが指揮する軍の反対にあって頓挫し、以後彼は、その活動を小アジアに限定することを余儀なくされた⁽¹⁾。

ウォールバンクはこの経緯を、ヘレニズム諸国の王たちの正統性が確立したことを示す象徴的な事件のひとつとして評価する⁽²⁾。しかし、この見解に対しては、簡単に首肯することはできない。それは、この 3 年前にセレウコス朝の先代当主・セレウコス 3 世が遠征中に暗殺された時、軍中にあったアカイオスが王位に推され、辞退したという事実が存在するからである⁽³⁾。この事実を考慮するならば、ウォールバンクの意見は単純に過ぎるというべきだろう。

いちど王位推戴を辞退した人物が後に王を称する、というのは異例というべき事件であり、ヘレニズム時代全体を見渡してみても、類似の事件を見出すことはできない。先行研究も、違和感を隠さない。ベヴァンはアカイオスによるセレウコス 3 世殺害を示唆するが、この見解を継承する研究は殆どない⁽⁴⁾。ウォールバンクはプトレマイオス朝の策動をその背景として推測する。シュミットやイエーネなどはウォールバンクには反対の立場を取るが、説得的な仮説の提示に成功しているとはいえない⁽⁵⁾。グラボウスキの最近の研究は、先行研究の整理にとどまっており、新たな方向性を示すには至っていない⁽⁶⁾。アカイオスの王位篡奪の意図を否定するグレインジャーの意見も、説得的とはいいがたい⁽⁷⁾。

アカイオスの王位僭称に関する諸家の見解の錯綜は、この事件に関する文献史料がポリュビオスの記述に限定される、という難点と不可分ではない。もとよりこれはヘレニズム時代史全般に共通する障害だが、この事件の描写にあたり、当初アカイオスが見せた王家嫡流への忠誠心へのポリュビオスの高い評価と、その後の反乱への厳しい批判が後世の諸研究に与える効果は、考慮されるべきである。

同時に考えるべきは、アカイオスのような王族内の実力者に強力な自由裁量権を与えて小アジアという要地に置き続け、最終的に反乱を許すに至った、セレウコス朝の統治構造

が抱えていた問題である。王族の処遇は他のヘレニズム王国にも共通した課題であり、セレウコス朝王家におけるアカイオスの位置づけの整理とともに、他のヘレニズム王国との比較検討が必要だろう。

そして、最初アカイオスを王位に推した軍が、3年後に彼の王位僭称に反対したのは何故だろうか。ヘレニズム時代の王にとって、軍からの支持が極めて重要だったことに鑑みれば、この点も重要な課題となる。王位辞退から僭称に至るまでの間に、アカイオスを取り巻く政治的な環境は、どのように変化したのだろうか。

以上の整理が示すように、アカイオスの反乱という事件は、ひとりセレウコス朝のある王族のあげた徒花として処理されるべき問題ではない。よって、本章での課題を、以下のように設定する。最初に、アカイオスの王家内での位置づけを整理し、セレウコス朝の領域支配における王族の役割を考察する。次に、セレウコス3世の暗殺から第4次シリア戦争に至るまでのアカイオスの動向を分析し、アカイオスがセレウコス朝の王位を欲するに至った時期と、その理由を検討する。これと並行してアンティオコス3世の動向にも目を配り、若き王とアカイオスの両者を巡る政治状況の変化を探る。この作業を通じて、アカイオスに対する麾下の軍の態度の変化の背景を追及する。こうした問題の検討は、アンティオコス3世の王位確立過程の分析と表裏一体を為すものである。従って、アカイオスの王位篡奪が頓挫する過程の検討を通じて、この反乱者にとどまらず、セレウコス朝の王位確立に求められた条件の見通しを提示することを目標とする。

I. アカイオスとは何者か

① アカイオス登場時のセレウコス朝情勢

アカイオスが登場した頃、セレウコス朝は苦境にあった。第3次シリア戦争以降、本拠地シリアの「テトラポリス」のひとつセレウケイア・ピエリアはプトレマイオス朝の支配下に置かれ続けていた。またこの戦争以降、王弟アンティオコス・ヒエラクスが小アジアのサルデイスに拠って王を称して自立し、セレウコス2世との間でいわゆる「兄弟戦争」が展開された。このセレウコス朝の内紛により、新興のペルガモン王国が漁夫の利を得るかたちで大きく勢力を広げていた⁽⁸⁾。これが西方の状況で、東方ではバクトリアが自立し、カスピ海東方から侵入してきたパルティアが、セレウコス朝領を蚕食しつつあった。こうした中でセレウコス2世は前225年頃に没し、後を継いだセレウコス3世は、小アジアへ遠征中の前223年に、陣中で暗殺された⁽⁹⁾。この混乱に際し、事態を收拾したのがアカイオ

スだった。

② アカイオスの出自と家系について

ポリュビオスはアカイオスについて、セレウコス朝の王族としているが、王家との血縁関係については詳らかにしていない⁽¹⁰⁾。ベロソスは、アカイオスの祖父・大アカイオスをセレウコス 1 世の子と推測し、ウォールバンクの注釈書もこれを踏襲している⁽¹¹⁾。グレインジャーは一時、アカイオスの家系をセレウコス朝の傍系ではないことを主張し、これに同調する研究者もいたが、この説は大きな支持を得ることがなかった⁽¹²⁾。後にグレインジャーは自説を撤回して、アカイオスをセレウコス朝の一族とする従来説に戻っている⁽¹³⁾。

この家系は、大アカイオスが小アジアに拠点をおいた後、小アジアとの強い関係を保持した。大アカイオスの娘であるアンティオコス 2 世妃ラオディケ 1 世は、一時的に王妃の地位を失った際、夫のアンティオコス 2 世からプリュギアに地所を与えられて小アジアのエペソスに住んだ⁽¹⁴⁾。このラオディケ 1 世の兄弟であるアレクサンドロスは「兄弟戦争」の時期にサルデイスを支配するなど、小アジアにおけるセレウコス朝支配の一翼を担った⁽¹⁵⁾。

この家系はラオディケ 1 世に加えて、セレウコス 2 世妃ラオディケ 2 世という 2 人のセレウコス朝王妃を輩出し、セレウコス朝嫡流との血縁関係を維持した。その一方で、大アカイオスの別の娘アンティオキスはペルガモンの支配者エウメネス 2 世の一族であるアッタロスに嫁ぎ、その息子アッタロス 1 世がエウメネスの後を継ぐなど、小アジアにおけるセレウコス朝の婚姻政策に役割を果たしたことが、ストラボンにより伝えられる⁽¹⁶⁾。

また、軍事指揮官としての活動も伝えられている。セレウコス 2 世の在位中、アカイオスが父アンドロマコスとともに、アンティオコス・ヒエラクスを攻撃したことが、ポリュアイノスによって記録されている⁽¹⁷⁾。

以上の事実は、アカイオスの家系がセレウコス朝の初期から小アジア統治の一部を担当し、その地に定着したことを示す。これは、シャーウィーン・ホワイトとカートがセレウコス朝の初期からの性格として指摘する、王族による統治の責務の分担の一例といえる⁽¹⁸⁾。王族による統治の分担の例として、上部諸州すなわち東方所領に王位継承者など有力王族を置いた例がよく知られているが⁽¹⁹⁾、同様の例は小アジアでもみられる。小アジアはセレウコス 1 世治世の最末期に支配下に入ったことに加え、前 270 年代のガラティア人侵入の際に土着勢力の自立を許すなど、動揺しがちなところだった。アンティオコス 1 世・2 世が

ともに小アジアで没したことにみられるように、セレウコス朝の王はしばしば小アジアに滞在した。また、セレウコス 2 世が王弟アンティオコス・ヒエラクスを置くなど、同地の安定にも常に気を配ったことがうかがえる。

しかし、アンティオコス・ヒエラクスがセレウコス 2 世に反乱を起こした事実が示すように、有力王族を配置する統治方式は、広大なセレウコス朝領土支配に必要な措置であると同時に、危険も内包するものだったといえる。この点は、プトレマイオス 4 世即位時に王夫妻を除く男女王族すべてを粛清したプトレマイオス朝と、対照をなすものといえる⁽²⁰⁾。こうした中、兄弟戦争でのセレウコス 2 世側の軍司令官としての活動にみられるように、アカイオスの家系は一貫してセレウコス朝王家に忠実な姿勢を維持した。

本節における考察を整理する。アカイオス一族は、セレウコス朝の傍系王族として小アジアに定着し、政治・軍事で役割を果たした。こうした王族を各地に置くセレウコス朝の統治方式は、広大な領地を支配するために必要なものだったが、一方でアンティオコス・ヒエラクスの反乱の事例にみられるように、王族離反の危険をはらむものだった。こうした中、アカイオス一族は一貫して、セレウコス朝当主に忠実な藩屏であり続けた。また、セレウコス朝嫡流や周辺王家との婚姻関係により、セレウコス朝内におけるアカイオスの家系の比重が高まったものと考えてよかろう。こうした事情から、アカイオスが、セレウコス 3 世の小アジア遠征に帯同したのは、ごく自然なことといえる。

このセレウコス 3 世の暗殺後、麾下の軍から王に推されたアカイオスは、その時点ではこれを辞退し、その後王位を宣言した⁽²¹⁾。アカイオスの反乱について、ポリュビオスはアンティオコス 3 世によるメディア・アトロパテネのアルタバザネスへの遠征を契機とみなしている。ここで考察すべきことは、はたしてこの時点を、アカイオスにとって王位を僭称する好機とみなしてよいかという問題である。この遠征に先立ってアンティオコス 3 世はモロンの反乱を鎮圧しており、メディアやバビロニア、そしてモロンの弟アレクサンドロスが統治していたペルシスなど、離反した地域を手許に確保した状態で、対アルタバザネス遠征に乗り出している。換言すれば、アカイオスは権力基盤を強化した若い王に対し、反乱を試みたということになる。

アカイオスは何故、軍からの推戴を受けたセレウコス 3 世暗殺時ではなく、アンティオコス 3 世がメディア・アトロパテネ遠征に出発した時点で、王位への野心を顕わにしたのだろうか。ポリュビオスが批判する、アカイオスの変心の背景には、何があったのだろうか

か。この疑問を解くためには、アカイオスがセレウコス 3 世の後継に推戴され、これを辞退した時点から分析を始めることが有効と思われる。次章では、セレウコス 3 世の暗殺から第 4 次シリア戦争に至るまでのアカイオスの動向を分析し、アカイオスがセレウコス朝の王位を欲するに至った時期と、その背景を検討する。

II 王位辞退から王位僭称までのアカイオスの動向

① セレウコス 3 世暗殺時の状況について

1. セレウコス 3 世暗殺～アンティオコス 3 世即位まで

セレウコス 2 世の死後、後を継いだセレウコス 3 世は、即位後の最初の目標をペルガモン遠征とした。父王在位中の小アジアでの失地回復を目指したものである。しかし、この作戦はセレウコス 3 世が陣中でアパトゥリオスとニカノールに暗殺されたことにより、頓挫した⁽²²⁾。その後、アカイオスが暗殺者たちを処断したのは先述の通りである。ここではアカイオスが王の親族であることをポリュビオスが強調しており⁽²³⁾、混乱收拾にあたってセレウコス王族としての立場が有効に作用したことが推測される。混乱收拾直後、アカイオスは王に推戴されるがこれを辞したため、東方の上部諸州にいた王弟アンティオコスがアンティオコス 3 世として即位することになった。

2. アカイオス推戴と、王位辞退の背景事情

ヘレニズム時代の王にとって、軍からの支持を得ることがきわめて重要だったことは、先行研究が一致するところである⁽²⁴⁾。軍からの歓呼によって王を称するというのは、アンティゴノス 1 世モノプタルモス以来、ヘレニズム時代に一貫した慣行である。この王位の歓呼を受けるために、ヘレニズム諸王国の王たちは開祖以来、非常に腐心した。その一方で、王位への推戴を辞退した例は少ない。管見の限りでは、前 270 年代初頭にヘレニズム世界にガラティア人が大挙侵入した際、マケドニア王プロトレマイオス・ケラウノスの戦死後にガラティア人の侵入を防いだマケドニアの「将軍」ソステネスの例を同様の例として挙げ得るのみである⁽²⁵⁾。

傍系だったにもかかわらず、アカイオスが推戴されたのは何故だろうか。この点については、前章で確認した、小アジアで彼の家系が蓄積した統治の実績や在地勢力とのネットワークに加え、アカイオス自身の豊富な軍事経験が支持されたためであったことが考えられる。前章でみたように、アカイオスの軍事指揮官としての活動はセレウコス 2 世の時期、

「兄弟戦争」におけるアンティオコス・ヒエラクス追撃戦で確認できる。セレウコス 3 世の軍中で占めていた重要な役割は、王暗殺時に彼が果たした主導的役割をみれば、明白なものといえる。

図 1：アカイオス肖像。右下は硬貨の反対側、「王アカイオス」の銘あり。



出典：Mørkholm, O. (1991)

Early Hellenistic Coinage from the Accession of Alexander to the Peace of Apamea (336-188 BC), Cambridge, fig. 403.

また、アカイオスの軍歴や、上掲の図 1 で示した現在に伝わる彼の肖像が示唆することは⁽²⁶⁾、彼がアンティオコス 3 世よりも年長だったことである。これは、アカイオスの王位推戴の有力な理由となったのではないだろうか。これより前、アンティオコス 3 世の父セレウコス 2 世は、その父アンティオコス 2 世の死にあたって、父王の 2 番目の妃ベレニケ・シュラ所生の王子アンティオコスと跡目を争ったが、この争いはアンティオコスの暗殺によってセレウコス 2 世に軍配が上がった⁽²⁷⁾。アンティオコスにはプトレマイオス朝という強力な後ろ盾があったが、これを退けてセレウコス 2 世が王位を継承し得たのは、アンティオコスが未だ幼年であったことが要因として考えられる。

この時期の他国でも、同様に幼少の王の即位を避けたと思われる事例が見受けられる。マケドニアのアンティゴノス朝では、デメトリオス 2 世死去の時点で世嗣ピリッポスが幼年だったため、傍系のアンティゴノス 3 世ドーソンが中継ぎとして王となっている⁽²⁸⁾。一方のアンティオコス 3 世は、アッピアノスの記述をみると成年に近い年齢であったようだ

が、ポリュビオスは「子供とってよいくらいに若かった」としており、ユスティヌスもその若さを強調している⁽²⁹⁾。これより前のこととなるが、アレクサンドロス大王も即位時に、その若さを問題視する勢力への説得を行う必要があったことは参考に値しよう⁽³⁰⁾。

また、この時点でのアンティオコス 3 世の統治実績としては、兄セレウコス 3 世即位以降に上部諸州で経験した、短期間の実務を確認し得るのみである。すなわちセレウコス 3 世死亡時に彼に付き従っていた将兵にとって、アンティオコス 3 世は遠い存在であり、実力のほども未知数な若者であった。セレウコス 3 世配下の将兵はアカイオスに、マケドニアのアンティゴノス 3 世と同様の役割を期待し、王に推戴したものと考えてよいだろう。

では、アカイオスは何故、この王位推戴を辞退したのだろうか。その時点の状況を整理すると、もっとも先王に近い近親者の王弟アンティオコス（後の 3 世）がセレウコス朝東方所領、いわゆる上部諸州に居た。このときアンティオコスが「上部諸州総督」として統治にあたっていたことは、ベングトゾン以下、先行研究の見解が一致するところである⁽³¹⁾。また、セレウコス 3 世から留守を任された宰相ヘルメイアスも健在で、アカイオスが王として立った場合には、これらの勢力との間に衝突は避けられなかっただろう。

以上のように考察すると、セレウコス 3 世暗殺時の王位推戴をアカイオスが退けたのは、セレウコス 2 世が治世を通じて苦しめられた「兄弟戦争」の再現を避けることを最優先したためと考えられる。王位継承が中継ぎとしてのものだった場合でも、王弟アンティオコスとの軋轢は不可避だったと考えられるからである。兄弟戦争でセレウコス朝の小アジア支配は大きく揺らいでいた。小アジアと深いかかわりを持ってきたアカイオスはその様子をつぶさにみており、同様の事態を避けるべく王位宣言を辞退したと思われる。

この時点でアカイオスはセレウコス朝の王座への野心を有していたか否か、未だこの段階では明白ではない。さらなる検討が必要である。

② アンティオコス 3 世即位後のアカイオスの動向

1. 事実経過

アンティオコス 3 世即位後、アカイオスは引き続き対ペルガモン戦線を担当することとなった⁽³²⁾。グレインジャーは、アカイオスがセレウコス 3 世殺害後の前 222 年にタウロス山脈を越えたとするが⁽³³⁾、ポリュビオスの記述からは引き続きタウロス山脈の北側に留まり続けたと考えた方が妥当だろう。セレウコス 3 世の軍のうち一定数は、エピゲネスがアンティオコス 3 世のもとに連れ帰っているため、引き続いてアカイオスの指揮下に残った

数は定かではない⁽³⁴⁾。ただし、その後の対ペルガモン王国戦での優位な状況は、相当な規模の部隊を手元に残していたことを示唆する。

この、おそらくは年長の親族に対して、アンティオコス 3 世は小アジア方面における大きな権限を与えている。その一方で、この若い王が絶えずアカイオスに対して注意を払っていたことが、ポリュビオスによって伝えられる。アンティオコス 3 世の即位直後にメディアの統治をゆだねたモロンが反乱を起こした際、アンティオコス 3 世は対策協議の場を、ゼウグマのセレウケイアで設けた⁽³⁵⁾。このとき、先代以来の宰相ヘルメイアスが、プトレマイオス朝からアカイオスに対して接触を試みた証拠となる書簡を、アンティオコス 3 世に提出した⁽³⁶⁾。その書簡中で、プトレマイオス朝側はアカイオスに対する反乱を教唆している。ポリュビオスはこれを捏造と断定しているが、ウォールバンクは本物である可能性も認めている⁽³⁷⁾。ただしこの時点では書簡の内容を「すっかり信じた」はずのアンティオコス 3 世は、対プトレマイオス朝戦のため、コイレ・シリア方面に向かっている⁽³⁸⁾。

コイレ・シリアに向かう前、ゼウグマのセレウケイア滞在中に、アンティオコス 3 世はポントス王ミトリダテス 2 世の娘、ラオディケ 3 世を王妃に迎えた⁽³⁹⁾。ミトリダテス 2 世はアンティオコス 2 世の娘を妻としており、これはいとこ同士の結婚ということになる。アカイオスもラオディケ 3 世の姉妹、同名のラオディケを妻としている。アカイオスがラオディケを妻としたのは前 223 年に小アジアに軍を進めるよりは後のことであるとグレインジャーは推測している⁽⁴⁰⁾。一方、前 218 年までに結婚していたことは、ポリュビオスの記述から見て明らかである⁽⁴¹⁾。

グレインジャーはアンティオコス 3 世の婚姻について、アンティオコス 3 世とアカイオスの関係を強化するものだったとしている⁽⁴²⁾。この推論については、アカイオスの婚姻の時期について判断しうる史料がなく詳細不明とするしかないが、相前後する時期だったことは間違いないだろう。この婚姻がアンティオコス 3 世の前後いずれの時期に行われたにせよ、アカイオスの王家内での威信が高まったのは間違いない。

2. 対モロン遠征以前のアカイオス反乱の真偽

ゼウグマでの御前会議の時点では、アンティオコス 3 世はアカイオスとプトレマイオス朝の通謀を、現実のものとは考えていなかったのではないだろうか。すなわち、プトレマイオス朝にはセレウコス朝の内情に介入する余地なし、と判断したのではなかろうか。後でも触れるが、アカイオスの離反が確実なものとなった際、アンティオコス 3 世とその幕

僚が最初に従事したのは、アンティオコス 3 世の父セレウコス 2 世が第 3 次シリア戦争で奪われて以来、プトレマイオス朝の支配下に置かれていたセレウケイア・ピエリアの奪還作戦だった⁽⁴³⁾。第 3 次シリア戦争では、プトレマイオス 3 世がセレウケイア・ピエリアに上陸して、セレウコス朝領深くに侵攻している⁽⁴⁴⁾。この前例から、アンティオコス 3 世がプトレマイオス朝とアカイオスの連携が成立した場合に、もっとも憂慮すべき事態は両者が連携し合っただけのセレウキス侵攻だったであろう。この事態への予防措置の欠如は、プトレマイオス朝側の積極的な攻勢を想定していなかったことのあらわれと考えられる。

この推測は、当該時点でのプトレマイオス朝の内情によって補強することが可能である。前 221 年にプトレマイオス 3 世が死去してプトレマイオス 4 世が即位した直後、有力王族が殆ど粛清され、王族で残ったのはプトレマイオス 4 世と、彼の妃となった妹のアルシノエ 3 世のみだった⁽⁴⁵⁾。こうした王位交代直後の王家の内紛のため、プトレマイオス朝には小アジアに手を伸ばす余裕はなかったとみてよい。

また、モロンに対しては派遣された軍が、アカイオスに対しては差し向けられていないことも注目されるべきである⁽⁴⁶⁾。この点からも、アンティオコス 3 世はアカイオスの動向を意識しつつも、武力行使の対象としていないと推測できる。これは、アンティオコス 3 世が対プトレマイオス朝戦を中止して、モロン討伐のために自らバビロニアに出陣した際も同様である。

以上の検討から、アンティオコス 3 世が対プトレマイオス朝作戦を中断するまでの間、アカイオスにはプトレマイオス朝の内通工作や、反逆を起こす気配はなかったものと考えられる。こうした事態は、アンティオコス 3 世が東方に軍を向けた後に変化する。

③ アカイオスの王位僭称

1. アカイオスの王位宣言とシリア侵攻の頓挫

アカイオスが王位を称したのは、アンティオコス 3 世の対アルタバザネス遠征を直接の契機としてのことである。その背景として、ポリュビオスは次のような見解を披露する。

しかし遠征が予想以上にうまく運んで、アッタロスを本拠のペルガモンに封じ込め、それ以外の地域をことごとく制圧するに至ったとき、アカイオスは自らの成功に有頂天になり、一転して常軌を逸してしまった。そして（王位を示す）ディアデマを着け、自らを王と宣言したアカイオスは、その頃にはタウロス山脈のこちら側を領する王や諸侯のうちで最大の威信と実力を備えた人物になっていた⁽⁴⁷⁾。

すなわちポリュビオスは、アカイオスが自身の軍事的成功に有頂天になり、常軌を逸して王位を宣言したとする。この軍事的功績とは、アッタロス 1 世の勢力範囲を、本来の領地であるペルガモン周辺に縮小させ、小アジアの多くの部分をセレウコス朝下に引き戻したことだろう。

アレンは、アカイオスとアッタロス 1 世は前 220 年までに、休戦に合意していたとみる。その根拠は、この年にビュザンティオンがアカイオスとアッタロス 1 世の双方に同時に申し入れた支援要請と、アカイオスの反乱である⁽⁴⁸⁾。アカイオスとアッタロス 1 世があからさまな敵対関係であった場合、ビュザンティオンが両者に同時に要請を行うとは考えにくい、というのがアレンの主張である⁽⁴⁹⁾。また、ペルガモンに背をむけてシリア方面に進軍できたのは、アッタロス 1 世との間に休戦合意が成立していたため、とアレンは考える。グレインジャーも、このアレンの指摘を踏襲している⁽⁵⁰⁾。アンティオコス 3 世のモロン討伐とほぼ機を同じくして、アカイオスも対ペルガモン戦に一段落を付けていた、とみることができよう。

その後、アカイオスはアンティオコス 3 世の不在を狙ってシリアへの侵攻を試みた。このときアカイオスは、プリュギアのラオディケイアでの王位宣言の後には、各都市に王としての命令を布告するなどした⁽⁵¹⁾。しかし、タウロス山脈に近いリュカオニア近辺で兵士たちの反対に遭い、サルデイスに引き返している⁽⁵²⁾。

2. アカイオスと将兵との不一致の背景

一度は王位を辞退したアカイオスが、なぜ、この段階に至って反旗を翻したのだろうか。そして、かつては進んでアカイオスを王に推戴した兵士たちが、この段階でアカイオスのセレウコス朝全域の王への野心に異を唱えたのはなぜだろうか。ここでは、この間にどのような変化があったのかを考察する。

アカイオスが納めた最大の成果は、軍事指揮官としての能力の証明に成功したことだろう。小アジアを全面的に任せられることにより、アカイオスの地位はセレウコス 2 世治世中、およびセレウコス 3 世殺害時と比べて飛躍的に重要性を増していた。そしてアカイオスはその地位に見合うだけの能力を示し、ポリュビオスをして「タウロス上方の王侯の中でもっとも有力」と評されるに至ったのである。

一方、アンティオコス 3 世もモロンの反乱鎮圧からメディア・アトロパテネ遠征という一連の軍事活動の中で、王としての実績を積み重ねていった。モロンとの決戦において、

モロン軍が王の姿を見ると崩れたという事実は、軍が基本的に王に忠実だったというウォールバンクの説明の根拠となっている。また、モロンの征伐に先立って粛清されたエピゲネスが、反乱の初期に王自身の出馬が鎮圧に有効であるとの見通しを示したことにも注意したい⁽⁵³⁾。モロンの反乱をめぐるこれらの事実や、セレウコス 3 世暗殺時のアカイオスによる混乱收拾は、前 3 世紀末ごろまでに、ヘレニズム諸王朝が正統性を確立したことを物語るものといえよう。しかしこの事実は、王位継承にあたり、王族内での王家嫡流の絶対的な優位の確立を意味するものではない。傍系の王族にも王位推戴の機会があったことは、アカイオスやアンティゴノス 3 世の事例が示すように、決して少ないものではなかった。

ここで、アカイオスがアンティオコス 3 世に決定的な差をつけられることになったと考えられるのが、引き続くメディア・アトロパテネ遠征である。いまいちど、ヘレニズム諸王国の第 2 世代以降の王たちが、バルバロイすなわち蛮族とされた集団との戦争によって最終的な正当性を獲得することを求められ続けた、という先行研究の指摘を確認したい⁽⁵⁴⁾。この指摘に鑑みるならば、アンティオコス 3 世はこの北方への軍事行動によって、セレウコス朝の継承者として相応しいことを示したことになる。一方、ガラティア人をはじめとするバルバロイ集団に対する軍事功績は、アカイオスの活動の中では確認することができない。そこで着目されるのが、アンティオコス 3 世のメディア・アトロパテネ遠征出発を聞いたアカイオスが、王に危害が加えられることを期待したという記述である⁽⁵⁵⁾。これは、この遠征の失敗が肉体への危害だけではなく、王としての権威が喪失することも意味したものと考えられよう。以上の点を考慮すると、アカイオスが反乱を起こしたのは、アンティオコス 3 世の王権確立前の最後の好機を狙ったものと推測し得る。

メディア・アトロパテネに対するアンティオコス 3 世の遠征は、しかしながら若い王の実績構築に大いに資するものだった。その軍事實績は、アカイオス麾下の将兵に若い王の正当性を認めさせ、彼らの将の反乱行為への反対を表明させるに足るものだった。これに対し、アカイオスは彼らに略奪行為を認め、懐柔せざるを得なかった⁽⁵⁶⁾。

同時に注意したいのは、アカイオスの将兵たちは、自分たちの指揮官が小アジアに行動を限定している限り、その行動に付き従ったと考えられることである。後に、第 4 次シリア戦争後のアンティオコス 3 世による追討戦では、アカイオスの将兵たちのうち多くの者が、アンティオコス 3 世に対する抵抗を諦めなかった領袖に対し、サルデイスでの最後の攻防戦まで従ったことは、この推測を裏付けるものといえる。

本節で検討してきたことを整理する。セレウコス 3 世の暗殺直後の混乱を收拾したアカイオスは、掌握した軍によって王位に推戴されるなど、セレウコス朝の王位を狙い得る立場を得た。しかし、アカイオスはこの時点では、セレウコス朝王家内での内紛によって周辺諸国を利することを避けるため、王弟アンティオコス 3 世に王位を譲った。しかし、王位への野心は当初から維持し続けており、その野心に相応しいことを示すため、軍事的な実績を蓄積することに専念したと考えてよからう。

アンティオコス 3 世のメディア方面、さらにはその北方への転戦に際してアカイオスが王位宣言とシリアへの軍事行動に踏み切ったのは、王位を得るための最後の機会と考えたためとみるべきだろう。しかし、対モロン戦やメディア・アトロパテネ遠征によって、アンティオコス 3 世は王としての勇気や軍事能力を有することを示していた。このため、アカイオスの麾下の軍は動揺し、指揮官の行動への不服従を示した。もっとも彼らは、アカイオスが小アジアに留まる限りにおいては、アカイオスを仰ぎ続けた。

こうしたアカイオスの行動は、アンティオコス 3 世の承認し得るところではなかった。彼はアカイオスに書簡を送って、その行動を牽制した。このアンティオコス 3 世によるアカイオスへの問責書簡には、プトレマイオス朝との通謀の告発がみられる。この点に関して、節を改めて考える。

III. アカイオスとプトレマイオス朝との連携

① アカイオスとプトレマイオス朝の連携

1. 第 4 次シリア戦争の経過

アカイオスとプトレマイオス朝は、プトレマイオス朝にとらわれていたアカイオスの父アンドロマコスの解放をめぐる接触していた。アンドロマコスがプトレマイオス朝の手中に落ちた時期は、不明である。グレインジャーは、セレウコス 3 世が自身の遠征に先立ってアンドロマコスを先発させたが、アッタロス 1 世に捕縛されてエジプトに転送されたとの仮説を立てている⁽⁵⁷⁾。この他、拉致されたとの説もあるが、詳細は不明である。

アカイオスとプトレマイオス朝の接触は、第 4 次シリア戦争の時に明白なものとなった。コイレ・シリアを順調に南下していたアンティオコス 3 世は、プトレマイオス 4 世側の休戦協定の提案を受けて一次休戦し、和平交渉を持った。この時アンティオコス 3 世は、前線から離れたセレウケイア・ピエリアに滞在して交渉を行っている⁽⁵⁸⁾。和平交渉において、プトレマイオス 4 世側は和議の条約にアカイオスも加えることを主張した。しかしアンテ

イオコス 3 世はこれを拒否し、和平交渉は決裂した。

戦役の再開後、アンティオコス 3 世の進撃はなおも続くが、前 217 年のラピアの会戦でプトレマイオス 4 世に敗れるとシリアのアンティオケイアに急速に後退し、プトレマイオス 4 世との和議を急いだ。この時も、アンティオコス 3 世はアカイオスの攻撃を懸念したとポリュビオスは伝える⁽⁵⁹⁾。この和議呼びかけをプトレマイオス 4 世は受け入れ、両者は和議を結んだ。

2. 第 4 次シリア戦争でのアカイオスの動向

第 4 次シリア戦争で注意したいのは、戦役序盤のアンティオコス 3 世の軍事行動の展開と、この戦争の間のアカイオスの動向である。

即位直後のプトレマイオス朝に対する軍事行動に際し、アンティオコス 3 世はセレウケイア・ピエリアを差し置いて南下し、レバノン山脈とアンティレバノン山脈に挟まれたマルシュアスの地溝帯に侵入した⁽⁶⁰⁾。それに対して前 219 年の際には、セレウケイア・ピエリアの回復を最優先している⁽⁶¹⁾。先にヘルメイアスが「偽造」したアカイオスのプトレマイオス朝宛書簡に接した時との対応の違いは、アカイオスの離反とプトレマイオス朝の通謀が決定的になったことによるものと考えられる。やはり、先のゼウグマにおける会議の時点のアンティオコス 3 世とその宮廷のとった行動は、プトレマイオス朝とアカイオスの通謀を否定する見方が多数派を占めたことを示すものと考えてよからう。

この戦争の間、アカイオスは小アジアで活発に軍事行動を行っているが、シリアをうかがう姿勢は見せていない。マによれば、「王アカイオス」と称して発送された書簡は確認されていない⁽⁶²⁾。こうした事実は、アカイオスの王位への野心を否定するグレインジャーの主張を裏書きするもの、という見方も可能であるかもしれない。

しかし、ポリュビオスの記述にあらわれる同時代人の行動は、グレインジャーの見方を否定する。前 218 年、ピシディア地方に派遣されたアカイオスの部将ガルシュエリスは周辺都市に助力を要請した。これに対し、シデという都市はアンティオコス 3 世への忠誠から、要請を退けた⁽⁶³⁾。アカイオスが依然として、アンティオコス 3 世に対する反乱者としてみられていたことの証拠といえよう。また、7 頁の図 1 で示したように、ディアデーマを頭に帯びたアカイオスの像が刻まれた貨幣の存在から、アカイオスが王位への野心を取り下げたとは考えにくい⁽⁶⁴⁾。

こうした事情があればこそ、プトレマイオス 4 世もアカイオスを和議に加えることを主

張して、アンティオコス 3 世に揺さぶりをかけたのであろう。プトレマイオス 4 世側には和議を締結する意図は希薄であり、この和平交渉を時間稼ぎだったとするポリュビオスの評価は、至極妥当なものといえる⁽⁶⁵⁾。後背への不安は、ラピア会戦後のアンティオコス 3 世の急速な後退と、迅速な和平申し入れからもみてとることができる。

② 第 4 次シリア戦争後のアカイオスの動向

1. 第 4 次シリア戦争後の事態の推移

戦役後の和議締結の際のアカイオスの扱いについて、ポリュビオスは一切語っていない。サルデイスに包囲されたアカイオスの救出を試みているところから、プトレマイオス 4 世がアカイオスとの連絡が途絶えたわけではないと思われる⁽⁶⁶⁾。しかし、救援のために派遣されたボリスは密かにアンティオコス 3 世に通じ、アカイオスをアンティオコス 3 世に引き渡したため、反乱は終結した⁽⁶⁷⁾。アンティオコス 3 世がプトレマイオス朝の水面下での動きを批判した様子は、少なくともポリュビオスからはうかがえない。アンティオコス 3 世は、父の代の兄弟戦争の轍を踏むことなく、アカイオスを降すことに成功した。彼は有力な幕友のゼウクシスをアカイオスの後釜に据え、小アジアの掌握を図った。その後、彼自身は東方への遠征に乗り出すこととなった。

2. アカイオスに対する対処の分析

アンティオコス 3 世とプトレマイオス 4 世の間に結ばれた和議の条件には、アカイオスの庇護が含まれなかったと考えてよい。これは、翌年からのアンティオコス 3 世によるアカイオス征討戦の経過から明らかである。この間、プトレマイオス 4 世は表だってアカイオスを援護する姿勢をみせていない。

ポリュビオスは、第 4 次シリア戦争後にプトレマイオス 4 世が生来の怠惰な生活に回帰したこと⁽⁶⁸⁾、およびラピアの会戦の直後からエジプトで反乱が発生したと伝えており⁽⁶⁹⁾、プトレマイオス朝側には積極的な軍事行動に出る余裕や意思がなかったとの観測も可能かもしれない。しかし波部雄一郎はプトレマイオス 4 世の治世が平穩のうちに推移したことを指摘しており⁽⁷⁰⁾、セレウコス朝に対する軍事行動に乗り出す程度の余裕は、持ち合わせていたと思われる。

この点に関して、以前の研究で指摘したことを再度確認したい。それは、セレウコス朝とプトレマイオス朝が各シリア戦争後に交わした盟約は、両者いずれかの当主が死亡する

までは継続し、不可侵が守られるのが常だったということである⁽⁷¹⁾。これは、シリア方面のみならず小アジアでも同様のことと考えられる。従って、プトレマイオス 4 世はこの時、シリアと併せて小アジアのプトレマイオス朝領土の確保を優先し、アカイオスの扱いに触れずに和議に応じたものと考えてよかろう。その後のプトレマイオス 4 世による小アジア情勢の静観とアカイオスへの軍事援助の不在は、ポリュビオスが主張するような、プトレマイオス 4 世自身の無気力によるものではなく、アンティオコス 3 世との和議を遵守したためと考えるのが妥当である。

サルデイスに包囲されたアカイオスの救出を試みているところから、プトレマイオス 4 世がアカイオスとの関係を完全に絶ったわけではないと思われる⁽⁷²⁾。しかし、ボリスによる救出作戦は、軍を率いてのものではなく、単身での行動だった。戦争の当事者いずれかの死に至るまで和平協定が維持されるというシリア戦争での原則は、ここでも確認できる。

③ アカイオスは、セレウコス朝の王位を欲したか

アカイオスは、果たしてセレウコス朝全体の王位を欲していたのか。最後に、この点を整理しておきたい。

第 4 次シリア戦争で、アカイオスはアンティオコス 3 世不在のセレウキスを狙う姿勢を見せなかった。しかし、アンティオコス 3 世に対する最初の反乱の時にみせたシリア侵攻の姿勢は、アカイオスがセレウコス朝全体の君主の地位を目指していたことを示す。また、第 4 次シリア戦争後には、ペルガモンのアッタロス 1 世と挟撃する体勢をとったアンティオコス 3 世の攻勢に対し、最後まで抵抗をあきらめなかった。根拠地であるサルデイスでの攻防戦では、アカイオスはアンティオコス 3 世に包囲されながらも、プトレマイオス朝の手引きで包囲を脱出し、シリアを狙う姿勢をみせている⁽⁷³⁾。すなわち、アカイオスは最後まで、セレウコス朝全体の王位への野心を失うことはなかったと考えられる。したがって、アカイオスが小アジアで満足し、アンティオコス 3 世の王位を転覆させることをめざしていなかったとするグレインジャーの評価には、従いがたいといわざるを得ない。

以上、アカイオスとプトレマイオス朝との連携関係を検討してきた。ここから伺えるのは、アカイオスとプトレマイオス 4 世の通謀により、アンティオコス 3 世は第 4 次シリア戦争でシリア戦線への専念を妨げられたということである。プトレマイオス朝との和平交渉が前線から離れたセレウケイア・ピエリアで行われたことや、第 4 次シリア戦争の決戦

であるラピアの会戦の後、アンティオコス 3 世が急速に後退して和議を提案したことに、その不安をみることができる。

しかし、こうしたシリアを挟撃する構図は、第 4 次シリア戦争の終結で終わることとなった。プトレマイオス 4 世は、アカイオスを見捨てる形で和議を承諾した。この結果、アカイオスはプトレマイオス朝からの救援を得られぬままに、アンティオコス 3 世の攻撃に臨むこととなり、敗死することとなったのである。ポリュビオスが記述するように、アカイオスは最期まで王位への野望を持ち続けたが、その挑戦はここに終わりを告げることとなったのである。

おわりに

最後に、本章での検討の結果をまとめる。

アンティオコス・ヒエラクスやアカイオスのような、小アジアにおける有力王族の反乱は、王族各員による統治の分担という、セレウコス朝の統治手法の欠点を露呈するものだったといえる。いずれの事例においても、セレウコス朝の当主は対処のために長期間、力を注がざるを得なかった。アカイオスのような傍系の王族であっても、小アジアに長期間定着した一族の勢力は、侮りがたいものに成長する危険性を持っていた。

アカイオスは、その軍事能力をセレウコス 2 世支配の時期から発揮し、そのためセレウコス 3 世暗殺時には、将兵から王としての推戴を受けるほどだった。しかし、アカイオスはこれを辞退した。その原因は、ポリュビオスが主張し、他の研究者も同調するようなセレウコス朝嫡流への忠誠心からではなかった。小アジアで長く活動を続けていたアカイオスは、将兵からの王位申し出を受諾することによってセレウコス朝内部での内紛を引き起こし、小アジアでの敵対勢力を利する事態を恐れたため、王位を辞退したのである。

彼のその後の行動は、むしろアカイオスが当初から王位を欲していたことを物語る。小アジアでのペルガモンとの戦争による戦果は、彼がその野心を実現させるための実績を蓄積させるものだったといえよう。ペルガモンとの戦争を有利に進め、アッタロス 1 世の勢力をその本領にまで縮小させたのは、その能力の証明として十分なはずだった。こうした軍事的実績を背景に、アカイオスは王位を宣言した。しかし、アカイオスの積み重ねた実績は、アンティオコス 3 世との地位を逆転させるには不十分だった。アンティオコス 3 世がモロン征討の余勢を駆って行ったメディア・アトロパテネ遠征によって得た権威と実績

は、かつてアカイオスを王位に推戴した、アカイオス指揮下の兵たちの姿勢を変えるに足るものだった。この事態に接し、アカイオスはセレウコス朝王位への野心を断念せざるを得なかった。

アカイオスの反乱鎮圧後、アンティオコス 3 世は王族や血縁関係のある者ではなく、有力な幕友のゼウクシスを小アジアに置いた。これ以降、王族の離反という事態は、彼の治世では再発することはなかった。有力幕友の配置という措置は、小アジアにおけるセレウコス朝統治の再編と同時に、この地に赴任した王族が力をつけることを防ぎ、東方遠征中の王の後背を脅かすことはなかった。

ポリュビオスは、アカイオスをして、当該時期の小アジアの王侯の中でも最大の威信と実力を持った存在と評した。しかし「王アカイオス」とは記述していない。王としては、欠ける要素があったのである。嫡流・傍流という点以外に、アンティオコス 3 世の後塵を最終的に拝することになった要素として、本章ではバルバロイに対する戦勝の存在を想定した。ヘレニズム世界の人々は、どのような存在をバルバロイとしたのだろうか。次章では、ポリュビオスの記述の考察から、この点を明らかにする。

(1) Polyb.5.57.

(2) ウォールバンク『ヘレニズム世界』106 頁。

(3) Polyb.4.48.

(4) Bevan (1902) vol.1, 300.

(5) Schmitt (1964) 164; Jähne (1997) 127; Hölbl (2001) 127-8.

(6) Grabowski (2011) 117.

(7) Grainger (2010) 195.

(8) Polyb.4.48.7.

(9) Polyb.4.48.6-9; Sachs and Wiseman (1954) 202-11; Austin 2nd, 158.

(10) Polyb.4.48.5.

(11) Beloch (1925-27) IV.2.202-6; Walbank, *HCP* 1, 501.

(12) Grainger (1997) 5; Hoover (2007) 35.

(13) Grainger (2010) 68, n.30.セレウコス朝の系譜については、本文最終頁の系図を参照のこと。

(14) *OGIS* 173; RC 18-20; Austin 2nd, 173;

-
- (15) Bengtson (1944) 93-105.
- (16) Strabo 13.4.2.
- (17) Polyaeus.4.17.
- (18) Sherwin-White and Kuhrt (1993) 25-6.
- (19) セレウコス 1 世による「共治王」アンティオコス 1 世の東方派遣 : Appian, *Syr.*61。
および, セレウコス 3 世治世期のアンティオコス 3 世 : Polyb.5.40.5.
- (20) Polyb.5.34.1-2.
- (21) Polyb.5.57.
- (22) Polyb.4.48.7-8.
- (23) Polyb.48.9.
- (24) Walbank, F.W. (1984a) 62-100 ; Austin (1986) 450-66.など。
- (25) D.S.22.4; Justin, 24.5 ; Bengtson (1960) 392; Green (1990) 134.
- (26) Mørkholm (1991) fig. 403; Jähne (1997) abb.3, および本文中の図 1 参照。
- (27) Justin.27.1.3; Polyaeus.8.50; Gutzwiller (1992) 359-60,および本稿第 1 章 I 参照。
- (28) Justin, 28.3.
- (29) Polyb.5.34.2; Justin, 29.1.ウォールバンクは, 前 191 年にアンティオコス 3 世が 50 歳
だったとするポリュビオスの記述から, この王の生年を前 242 年か 241 年としている。
Polyb.20.8.1, Walbank, *HCPI*, 450.
- (30) D.S.17.2.2.
- (31) Bengtson (1944) 84-5 ; Boiy (2004) 153; Grainger (2010) 184. シュミットは, 即位前
のアンティオコス 3 世がティグリス河畔のセレウケイアに居住していたと推測している。
Schmitt (1964) 3.
- (32) Polyb.4.48.5-10.
- (33) Grainger (2010) 183.
- (34) Polyb.5.41.4.
- (35) Polyb.5.43.1.
- (36) Polyb.5.42.7.
- (37) Walbank, *HCPI*, 573.
- (38) Polyb. 5. 42.9.

-
- (39) Polyb.5.43.1-5.
- (40) Grainger 1997, 49.
- (41) Polyb.5.74.4-6.
- (42) Grainger (2010) 186.
- (43) Polyb.5.58-60.
- (44) Justin 27.1; Polyaen.8.50.
- (45) Polyb.5.34.1, 15.25.1-2; Plut. *Cleom.* 33.3.
- (46) Polyb.5.42.5.
- (47) Polyb.4.48.11.訳文は城江良和訳より，以下同。
- (48) Polyb.4.48.1-4; 12-13.; Allen (1983) 37.
- (49) Allen (1983) 37.
- (50) Grainger (2010) 188.
- (51) Polyb.5.57.5.
- (52) Polyb.5.57.
- (53) Polyb.41.7-9.
- (54) Cf. Mitchell (2003) 280-293
- (55) Polyb.5.57.3.
- (56) Polyb.5.57.7-8.
- (57) Grainger (2010) 181-2.
- (58) Polyb.5.66.6-68.1.
- (59) Polyb.5.87.2.
- (60) Polyb.5.59.2.
- (61) Polyb.5.58-61.2.
- (62) Ma (1999) 57.
- (63) Polyb.5.73.4.
- (64) Mørkholm (1991) fig. 40; Jähne (1997) abb.3, および図 1 参照。
- (65) Polyb.5.63.2-6.
- (66) Polyb.8.15.2-8.
- (67) Polyb.8.15-21.

(68) Polyb.5.87.3.

(69) Polyb.5.107.1-3.

(70) 波部雄一郎 (2014) 267。

(71) 拙稿 (2006) および (2007) 55-60 頁。

(72) Polyb.8.15.2-8.

(73) Grainger (2010) 195.

第3章 「バルバロイ」観と王権

—古典期からポリュビオスまで—

ヘレニズム世界の人々が、他者＝「バルバロイ」と認識したのは、どのような集団だったのだろうか。そして、バルバロイをどのような集団と認識していたのだろうか。これに関して、前章までにいくつかの手がかりを見いだすことが出来た。例えば第1章 III 説で確認した、アンティオコス 3 世が北方のバルバロイへの遠征を敢行した際のヘルメイアスの反対からは、ヘレニズム世界の人々がバルバロイ集団を危険な存在とみなしていたことがうかがい知ることができる⁽¹⁾。

アースキンは、アリストテレスの著作から、ギリシア人たちが自分たちをバルバロイとされる集団より優れた存在と意識しており、ペルシア戦争の勝利の記憶が、ギリシア人たちのバルバロイに対する優越感に寄与したことを指摘する⁽²⁾。この点に関してアテナイの弁論作家イソクラテスは、民主政的な枠組みが、バルバロイに勝利をおさめるに足る教育を自身の先祖たちにもたらしたことを主張した⁽³⁾。ホール、カートリッジ、ハリソン、L. ミッチェルらは概ね、アースキンと同じ立場を取る⁽⁴⁾。同時に、ペルシア戦争というバルバロイとの戦争は、ギリシア人たちの結合、すなわちパン・ヘレニズム＝「汎ギリシア主義」をもたらしたとフラワーと L. ミッチェルは指摘する⁽⁵⁾。またアースキンは、この「ギリシアの優越」の概念は、ペルシア帝国の征服によって、ヘレニズム時代に入ってより強調されたと論じる⁽⁶⁾。

本章では、このバルバロイ観の変遷という問題を最初に考察する。そして、セレウコス朝のアンティオコス 3 世による東方への遠征を例にとり、ポリュビオスを通して見るヘレニズム時代のバルバロイ観について考察する。

I、古典期のバルバロイ観

ギリシアの優越性とバルバロイの劣等性という観念が、アリストテレスの著作においてあらわれるということは、既に確認したとおりである。彼は、蛮族たちの統治能力の欠如と奴隸的本質を根拠として、ギリシア人たちがバルバロイを支配することが妥当であると主張した⁽⁸⁾。この哲学者はアレクサンドロス大王の師父として広く知られており⁽⁹⁾、その活動時期から考えて、アリストテレスの主張は古典期末期ギリシアのバルバロイに対する

見方を我々に伝えるものといつてよかろう。すなわち、バルバロイへの蔑視と、ギリシア人によるペルシア帝国の支配を正当化するための主張である。

古典期、ことに前 5 世紀は、アテナイが最盛期を迎えた時期として知られる。アテナイがデロス同盟の金庫をアテナイに移設する際、当時のアテナイの指導者ペリクレスは、蛮族の侵入の危険を理由として反対意見をねじ伏せた⁽¹⁰⁾。本来デロス同盟はペルシア戦争後にペルシア帝国の再侵攻を防ぐ軍事同盟として創設されたことから、ペリクレスの主張には一定の説得力があったとみてよかろう。同時に、ペルシアによるギリシア侵攻への警戒心は、この時代にも説得力を持っていたことがみてとられる。

さらに別の例を、ヘロドトスの記述に見ることが出来る。ペルシア戦争の時、マケドニア王アレクサンドロス 1 世は、ギリシア側とペルシアの間の講和条約を取り持とうとした。しかし、これはスパルタの使節がマケドニア王を信用しないようアテナイに助言したことで、実を結ばなかった。スパルタの見方では、アレクサンドロス 1 世は「自身が僭主であり、ゆえに自然なこととして僭主のために働く」存在だったのである⁽¹¹⁾。さらにスパルタ使節は、「バルバロイを信用すべきではなく、名誉を与えるべきでもない」と主張する⁽¹²⁾。バルバロイとは信用できる存在ではないこと、そしてバルバロイからの侵入に備えるためにギリシア人たちが連合することの重要性を高らかに宣言している箇所とみる事ができるだろう。

以上の議論から、ペルシア帝国が古典期ギリシアにとって代表的なバルバロイであったことが見て取れる。しかし、ホールが「パン=ヘレニズムと、その結果としてあらわれる全ての非ギリシア人は集合的屬性であるとの認識はアテナイに特殊な要素であって、まずデロス同盟、すなわちペルシアとの戦争後にこの大帝国に対抗するためにつくられた同盟を支える観念として、そしてひいてはアテナイ帝国を支える観念となった」とするように、ギリシア人とバルバロイの二項対立の構図は、ペルシア戦争後の特殊政治的状況において生み出されたものである⁽¹⁴⁾。この文脈に従うならば、彼らの議論がペルシア帝国への対策に集中したことは自然なことであり、かつまたバルバロイへの議論がアテナイの都合によって左右される恣意的なものであったことは、当然といえる。

その一方で、ギリシア人たちはバルバロイの侵入を防ぐことのみを議論していたのではない。フラワーが指摘するように、ペルシアへの侵攻すら議論していたのである⁽¹⁵⁾。トゥキュディデスが伝えるところでは、ペルシア帝国の侵入を撃退した後、彼らは続けざまにペルシアに攻め入ろうとしている⁽¹⁶⁾。このような攻撃的思考は、前 4 世紀に入ってさらに

強まることとなった。ペルシアへの攻撃的思想の論者としてよく知られているのがイソクラテスであろう。このアテナイの弁論作家はペルシアの懦弱さを指摘し、ピリッポス 2 世にギリシア連合軍を率いてペルシア帝国への遠征を促した⁽¹⁷⁾。アリストテレスは、イソクラテスの主張を継承して、ペルシアへの攻撃的政策を正当化したと考えられよう。それは、アリストテレスもまた、アジアのバルバロイの「怯懦で享乐的な」傾向を論じていることによる。この怯懦という主張もまた、東方への侵攻を根拠づけるものだったといえよう。

以上にみてきたように、ギリシアの連合、およびギリシアとバルバロイの二項対立を支えする証拠は多く見出されるが、注意すべきはこの概念が恒常的なものでも、ましてや古典期ギリシア諸国の意志決定過程に決定的影響を与えるものでもなかったということであろう。ペルシア戦争の時点において、この大国の侵攻に立ち向かったポリスの数が僅かしか記録されていないという事実は、このことを裏付けるものといえよう⁽¹⁸⁾。この戦争の間ですら、テルモピュライの戦いの直後にテーバイがギリシア連合軍から離脱してペルシアに降ったことが伝えられている⁽¹⁹⁾。

別の事例として、トゥキュディデスがあげられる。チャンピオンは、この歴史家の筆致からはギリシアとバルバロイの対抗概念がほとんどみられないことを指摘する。その理由としてチャンピオンは、トゥキュディデスの主たる関心はアテナイとスパルタの対立であって、蛮族ペルシアとの対立には注意を払わなかったためだとする⁽²⁰⁾。この事実は「ギリシア全体にたいするバルバロイの脅威」の恣意的な使用を雄弁に物語るものといえよう。

最後に、アレクサンドロス大王の東方遠征の時期におけるギリシアの政治状況も、この課題の考察において有効である。すなわち、スパルタ王アギスは、アレクサンドロスの留守を狙い、ペルシアの資金援助を受けて大王の留守居役であるアンティパトロスと戦った⁽²¹⁾。こうした事実は、古典期にギリシアとバルバロイの二項対立の観念の存在を示す証拠が数多く存在する一方で、この概念が実際の政策決定に際し、限定的な効果しか与えなかったことを物語っている。

バルバロイのイメージについてまず確認すべきことは、古典期のバルバロイの代表的存在がペルシア帝国だったということだろう。このバルバロイの「代表選手」からの脅威という観念は、前 5 世紀には普遍的だった。このバルバロイの「頹廢」という主張は、前 4 世紀にしばしば語られるようになった。バルバロイへの攻撃という主張は、アレクサンドロス大王によるペルシア帝国征服で実現した。しかし、アレクサンドロスの後継諸王国もまたこのバルバロイへの言説を、アケメネス朝崩壊以降も引き継ぐのである。ヘレニズム

世界は、この言説をどのように引き継いだのだろうか。

II、アンティオコス 3 世の東方遠征

「ヘレネス」と「バルバロイ」は、ヘレニズム時代にはどういう基準で分けられていたのだろうか。この基準は民族的な出自よりも理性の有無を重視するものであり、例えばポリュビオスは、理性的ではないと見なした者たちは、たとえギリシア内の都市であっても「バルバロイ」と呼ぶ場合があった、とチャンピオンは指摘する。例えば、衆愚性に陥っていたポリスなどは、それにあたる。一方でローマは理性的な政治システムをもっており、ポリュビオスは無条件で「バルバロイ」と呼び得る存在としてはみななかった、というのである⁽²²⁾。「ヘレネス」と「バルバロイ」の差異を理性の有無に求めるというヘレニズム時代の特徴については高島純夫も指摘している⁽²³⁾。すなわち、従来の諸説は「ヘレネス」と「バルバロイ」は、ヘレニズム時代には必ずしも地理的な区分概念ではない、としてきたという傾向が見える。

このような傾向は、ポリュビオスによる東方についての記述を読み進めていくと、疑問をおぼえる部分が多い。ポリュビオスが東方においてバルバロイとした存在は、どのような集団だったのだろうか。具体的な事例として、アンティオコス 3 世の東方遠征から、当時の理解を検討を試みる。

① アンティオコス 3 世のメディア・アトロパテネ遠征

第 3 章で検討したように、アンティオコス 3 世は、即位直後に企図した対プトレマイオス朝戦を一時中止してモロンの反乱を鎮圧し、さらに余勢を駆ってメディア・アトロパテネの君主アルタバザネスへの遠征を行った⁽²⁴⁾。この時にヘルメイアスが王に対して反対したことは既に述べたが、この際のヘルメイアスの態度は検討に値する。ヘルメイアスの主張は、次のようなものである。

ヘルメイアスはその時に、北の地に軍を進めることを危険さのゆえにおそれ、プトレマイオスへの当初からの（予定通りの）出発を提案し続けた⁽²⁵⁾。

セレウコス朝の新王にとっての最初の課題はプトレマイオス朝との領土画定であるというヘルメイアスの主張はここでも一貫しているが、さらに注目されるのは、ヘルメイアスが「危険さのゆえに」アルタバザネスへの遠征に反対したことである。事実、この時点ま

でのプトレマイオス朝との 3 次におたるシリア戦争では、王同士が直接に干戈を交える事態とはならなかった。セレウコス朝が領内深くまで侵入された第 3 次戦役においても、これは同様である。ここから、プトレマイオス朝との戦争では王の生命に危険が及ぶことはない、とヘルメイアスが認識していた可能性を推測できる。

その一方で、アルタバザネスのような「バルバロイ」は危険な相手である、という認識を読み取ることができる。メディア・アトロパテネはアレクサンドロス大王以前からイラン系の土着王朝下にあり、アレクサンドロス大王の死後には摂政ペルディッカスによって、アトロパテネの支配地として割り当てられた⁽²⁶⁾。その後アトロパテネが自立したこと、がストラボンによって伝えられる⁽²⁷⁾。ヘルメイアスの主張から、この地もまたバルバロイの地とみられていたことを、読み取ることができる。

最終的には、アンティオコス 3 世に王子が誕生したとの報に接したヘルメイアスは王の遠征に賛成し、アンティオコス 3 世はアルタバザネスを服属させた⁽²⁸⁾。これによって権力を確立したアンティオコス 3 世は、他の廷臣たちの助力を得て、ヘルメイアスの排除に成功した⁽²⁹⁾。この戦果によって確立したアンティオコス 3 世の王権が確固たるものだったことは、アンティオコス 3 世の不在を狙ってシリアを突こうとしたアカイオスの企みが失敗したこと、その後の第 4 次シリア戦争中にアカイオスがシリア侵攻を果たせなかったことから伺うことができる⁽³⁰⁾。

② アンティオコス 3 世のバルティア遠征

アンティオコス 3 世は、第 4 次シリア戦争の後、ペルガモンのアッタロス 1 世と手を結び、アカイオスを滅ぼして小アジアを安定させると、東方のバルティアに向けて遠征を開始した⁽³¹⁾。前 250 年頃に自立したバルティアは、セレウコス 2 世との戦争に勝って、その勢力を確固たるものにしていた⁽³²⁾。地中海沿岸の領土を確保したアンティオコス 3 世にとっては、放置できない敵手だったと考えられる。

シリアからメディアのエクバタナを経由してきたアンティオコス 3 世の軍に対し、バルティア側は戦わずして退いた⁽³³⁾。アンティオコス 3 世はバルティアの首都というべきヘカトンピュロス⁽³⁴⁾を占拠し、さらにヒュルカニアへと侵攻していった⁽³⁴⁾。この地に入って以降、アンティオコス 3 世の軍は、「バルバロイ」たちの激しい抵抗を排しながら進軍した⁽³⁵⁾。ここでいう「バルバロイ」は、前後関係からみて、バルティアのことを指すと考えて間違いなからう。

ポリュビオスはこの箇所では「バルバロイ」たちが勇敢に戦う姿を描いており、何らかの価値判断を読み取り得る部分はない。しかし続く記述で、シリュンクスという都市に追い詰められた「バルバロイ」たちが、市内のギリシア人たちを皆殺しにして金品を奪い、逃走したことを描写している⁽³⁶⁾。ここには、「ギリシア人」たちに害をなす野蛮かつ危険な存在としての「バルバロイ」の姿が、明確に描き出されている。これは前節で指摘した、ヘルメイアスの主張にあらわれる「バルバロイ」のイメージとも繋がるものである。

また、この事件に先立ち、「バルバロイ」たちは大勢力を集めたにもかかわらず、アンティオコス 3 世の策によって「恐怖に駆り立てられて」敗走し、シリュンクスに追い詰められている⁽³⁷⁾。ここでポリュビオスによって描かれているのは、「バルバロイ」とは、怯懦であると同時に、「ギリシア人」にとっては危険で脅威を与える存在であるという、二律背反的な姿である。

では、この「バルバロイ」に対して、ヘレニズム諸国の王たちは、どのように対応することが求められたのだろうか。この点についての手がかりを与えるのが、次に挙げるセレウコス朝とバクトリアの交渉である。

③ アンティオコス 3 世とバクトリア遠征

アンティオコス 3 世はパルティア遠征の後、ヒュルカニアからバクトリアに入った⁽³⁸⁾。この地を支配していたのは、小アジアのマグネシア出身のエウテュデモスで、それ以前に同地を支配していたディオドトス父子を倒して、その地位を奪っていた⁽³⁹⁾。アンティオコス 3 世のバクトリアへの軍事行動は、エウテュデモスへの懲罰行為という意味があったのかもしれない。というのは、セレウコス 2 世の時、セレウコス朝の王女がディオドトスのもとに嫁いでいたからである⁽⁴⁰⁾。

バクトリアでの戦闘は激しく、長期にわたったが、アンティオコス 3 世はエウテュデモスを滅ぼすことは考えていなかったようである⁽⁴¹⁾。そのことを察知したエウテュデモスは和平を打診するが、エウテュデモスが和平の条件として要求したのは「王の名と長の地位」であり⁽⁴²⁾、領内への侵攻を受けている側としては、相当に強気の姿勢といってよいだろう。この和平交渉の際に彼が強調したのは、自身にはアンティオコス 3 世に対する反意がないことと、バルバロイの脅威という 2 点である。

もし彼（エウテュデモス）が求めることに王が同意しないならば、両者のどちらも起こる危機を避け得ない。少なからぬ遊牧民の大群が近づいており、彼らは自分たち両

方を危険な状態にし、明らかに国をバルバロイ化するであろう、と⁽⁴³⁾。

恫喝混じりとすら思える調子であるが、アンティオコス 3 世はこの和平提案を受け入れている。しかもアンティオコス 3 世は、自身の王女をエウテュデモスの息子デメトリオスに嫁がせることを約束した上で、この父子が王号を称することを認めている⁽⁴⁴⁾。

この和約は、しかしながら、アンティオコス 3 世の権威を落とすことにはならなかった。次の一節は、バクトリアの主張を容れたことが、アンティオコス 3 世の権威喪失につながらなかったことを物語っている。

アンティオコスの内陸への遠征の達成は、(中略) その成功を通じて内陸の諸サトラップの従属を我がものとしたのみならず、沿岸の諸都市とタウロス上方の領主たちを(従え)、短くいえば王国を確保し、勇気と勤勉によって全ての従う者たちを仰天させたのである⁽⁴⁵⁾。

エウテュデモスという、一度はアンティオコス 3 世と干戈を交えた人物に対する王号承認という譲歩をしつつも、逆にアンティオコス 3 世の遠征は成功とみなされ、権威は確立をみたのである。その背景は、先にみたエウテュデモスの発言中の「国をバルバロイ化」する外敵の存在ということができよう。パルティアの例のように、「バルバロイ」と考えられている勢力を後退させたり、周辺の諸国との関係を安定させて王国内への「バルバロイ」の侵入を防ぐことこそが望まれたのであり、そのためにはヘレニズム世界内部の敵対勢力を滅亡させる必要は、必ずしもなかったのである。

以上の検討から、ヘレニズム時代にも「バルバロイ」は地理的要素を含む概念であったとみることが妥当であるように思われる。では、その区分の基準はどこにあったのだろうか。

III、ヘレニズム時代のバルバロイ観

すでにみたように、ペルシア帝国崩壊後の「バルバロイ」の代表的存在の役割は、ガラティア人によって担われた。ポリュビオスは、デルポイに対するペルシア人とガラティア人の攻撃を語り継ぐことは歴史家の義務である、と主張した⁽⁴⁶⁾。ポリュビオスが前 5 世紀初頭のペルシア戦争と、前 270 年代のガラティア人によるデルポイ襲撃をバルバロイによる攻撃として同列に扱っている事実は、古典期以来のバルバロイ観の継承を我々に印象づける。同時に、代表的なバルバロイがペルシアからガリア人へと移ったということを物語

る箇所である。この記述と関連して、前 278 年にコスで出された、デルポイへのガリア人侵入撃退に対する感謝決議を記した碑文は、代表的なバルバロイの新旧交代の契機を伝えるものとして、重要な史料である⁽⁴⁷⁾。

バルバロイの中でも、セレウコス朝が東方において境を接していたバルバロイ集団と、ギリシアやマケドニアの北方のバルバロイでは違いがあるはずだが、ポリュビオスは顧慮していない。これは、このヘレニズム時代の歴史家がバルバロイの脅威への警鐘を鳴らすことに重きを置き、その内部の区分に意識を払わなかったことを示す。

ここで、バルバロイの分類の意識の有無を考察したい。アースキンは、アリストテレスがアジアとヨーロッパのバルバロイの特質を比較していたことを指摘する。その著『政治学』において、この哲学者は「部族的」で「戦争を好み、賢明ではない」ヨーロッパの蛮族と、「退廃的」なアジアのバルバロイを対比しているのである⁽⁴⁸⁾。この図式がヘレニズム時代にも存在したことをうかがわせるのが、次に掲げるポリュビオスの一節である。

クセノポンに率いられた（中略）兵士たちは敵地であるアジア全土を通り抜けたにもかかわらず、バルバロイのだれひとりとして彼らの目の前に現れる勇気が無かった⁽⁴⁹⁾。

ポリュビオスは、クセノポンの『アナバシス』とスパルタ王アゲシラオスによる小アジア攻撃が、ペルシア人たちの臆病さを証明するものとしている。彼によれば、これらふたつの事件こそがピリッポス 2 世によるペルシア侵攻計画を促したものである、というのである⁽⁵⁰⁾。この一節もまた、ポリュビオスがペルシア人たちの脆弱さを認めていたことの証左といえよう。

しかしながら、本節の最初に述べたように、ポリュビオスは古典期以来の否定的なバルバロイ観を有していた一方で、バルバロイに普遍的な特質を描き出すことに主たる関心があった、ということを再度確認すべきであろう。この問題について、チャンピオンは、ポリュビオスがバルバロイを規定する際に、彼らの理性の欠如を条件として重視していたことを論じた⁽⁵¹⁾。彼はさらに、この非理性的な側面こそバルバロイが「文明的」であるギリシア人たちに悪い影響を与えるものであり、その点でバルバロイは同じく非理性的である「大衆や若者たち、そして女性たち」と共通しているのだと指摘する⁽⁵²⁾。ポリュビオスは、明らかにアリストテレスの偏見を継承しているとみて良からう。しかし、その継承の過程で、彼はアリストテレスの記述には存在したヨーロッパとアジアのバルバロイの対照を捨象し、その共通性の描写に重心を置いたのである。

バルバロイの特質として、ポリュビオスはその軍事的成功を長く維持できないことをあげている⁽⁵³⁾。加えて、本章 II-②でみたシリュクスでの事例はバルバロイの、特に苦況にあるときの怯懦を証明するものとして考えられていたといえよう。その一方で、チャンピオンが指摘するように、バルバロイはその非理性的本質ゆえに、理性的なギリシアの仕組みを破壊する脅威とみなされていたのである⁽⁵⁴⁾。この点に、ポリュビオスがバルバロイとされる集団それぞれの特色に注意を払わず、もっぱら共通する要素の描写に関心を集中させた理由を見て取ることができる。

ヘレニズム諸王国はバルバロイをどのように特定し、そしてそれらとの戦争における勝利をどのように利用したのだろうか。古典期とヘレニズム時代の最大の差異は、いうまでもなくアケメネス朝帝国の存在の有無であろう。セレウコス朝はまさしくペルシア帝国の旧領を大きく支配していたが、ポリュビオスはセレウコス朝支配期の同地域については、バルバロイと称していない。この点をふまえて、オースティンは「古典期の、ギリシアと『アジアの野蛮人』たちの対立という構図は、特にセレウコス朝にとって、意味を為さない」と主張する。その一方でオースティンは、セレウコス朝領域外からの蛮族の侵入からの防衛という主張は有効だった、とする⁽⁵⁵⁾。

この点に関して、本章 II-③で見たエウテュデモスの言葉は参考に値する。このバクトリアの支配者が、アンティオコス 3 世とエウテュデモスの争いに乗じて遊牧民が侵入した場合、ふたつのヘレニズム勢力が危機にさらされてしまい、双方の支配領域がバルバロイ化すると主張したことをポリュビオスは伝える⁽⁵⁶⁾。この記述の差別化、すなわち旧ペルシア領についてバルバロイと称するか否かという問題の判断基準は、アレクサンドロス大王がメディアの防御のために、多くの都市を建設したとするポリュビオスの記述の中に見いだすことができる⁽⁵⁷⁾。

また、アンティオコス 3 世が盛んに行った婚姻外政策をみると、彼は自身の妹をアルメニア王クセルクセスに、娘をバクトリア王エウテュデモスの子であるデメトリオスに、それぞれ和約の締結に際して嫁がせた⁽⁵⁸⁾。その一方で、メディア・アトロパテネの君主アルタバザネスとパルティアに対しては、同様の措置はみられない。この点に関して、ポリュビオスがアルタバザネスとパルティアを「バルバロイ」としていることが注目される。

アンティオコス 3 世自身はポントス王ミトリダテス 2 世の娘であり、従姉妹でもあるラオディケと結婚した⁽⁵⁹⁾。興味深いことに、ポントス王家は自身の祖先を、ペルシア王ダレイオス 1 世とともに「王位篡奪者」バルディヤに対するクーデターを企てた 7 人の貴族の

一人に求めている⁽⁶⁰⁾。それにもかかわらず、ポリュビオスはミトリダテス 2 世をバルバロイとは呼んでいない。メディア・アトロパテネについては、この地域がアレクサンドロス大王の征服地域の外にあって、大王の死後に摂政ペルディッカスが岳父アトロパテスに割り当てたことをピロウズが指摘している⁽⁶¹⁾。パルティアは、北方からの遊牧民パルニ族の進出によって建設された国家だった⁽⁶²⁾。これらの点が示唆していることは、ヘレニズム世界とバルバロイの間は、アレクサンドロス大王の征服に基づいて区分されていたということであろう。ヘレニズム時代の人々はこの枠組みを踏襲し、そしてアレクサンドロス大王の後継者諸王はその基準に従ってバルバロイ、すなわち「化外の民」とされた集団と戦うことによって正当性を確立し続けた、ということが想定されるのである。

同時にポリュビオスの記述から、ヘレニズム時代の人々が想定するバルバロイの特徴は、アリストテレスがヨーロッパのバルバロイの特徴としたものだった、という可能性を推測できる。ポリュビオスはアジアのバルバロイについて言及する際、アリストテレスがアジアのバルバロイの特質とした頽廢について、触れていない。アレクサンドロス大王の遠征によってアジアの、すなわち南方の「バルバロイ」の超大国は消滅し、ヘレニズム世界に接収されてしまった。残ったのは、ヨーロッパ側と同じく北方に位置する、部族割拠状態の諸部族だった⁽⁶³⁾。エウテュデモスがアンティオコス 3 世に対して自分の存在意義を主張し得たのも、この文脈に沿ったためと推測しうる。

こうしたことから、ポリュビオスの想定するバルバロイはアリストテレスの記述では北方のものとして分類されたもの、すなわちヘレニズム世界に脅威を与える粗野な者たちという像に統合されたのである。

おわりに

本章での分析をまとめる。ヘレニズム時代以前の古典期ギリシアでは、「バルバロイ」への差別感情が、ペルシア戦争におけるギリシア側の勝利とともに成立したことを確認した。しかし、この「ヘレネス」と「バルバロイ」を区別する感情が、ペルシア帝国の滅亡したヘレニズム時代にあっても継続したことが、ポリュビオスの記述から確認された。ペルシア帝国が減んだ後、ヘレニズム諸王国はバルバロイを区別する際に、アレクサンドロス大王の勢力下に入った地域か、あるいはアレクサンドロスの後継者に連なる者が支配した地域であるか否かという基準を採用した、との仮説に達した。

その一方で、古典期には主敵とされたペルシア敵国滅亡の結果、ギリシアの北側にあった勢力の特質として強調された粗野さが、バルバロイの主たる性格として重視されるに至ったことを読み取った。この側面は、ヘレニズム諸国の第 2 世代の王たちが、北方から侵入してきたガラティア人を撃退することによって王権を確立したことによって、ヘレニズム世界において広く取られるようになったと考えられる。

- (1) Polyb.5.55.3-4.
- (2) Erskine 2000, 166-7.
- (3) Isocrates 16.26-27; Crawford and Whitehead, 80 (B).
- (4) Hall (1989) 1-17; Cartledge (1993) 13; Harrison (2002) 1-8.
- (5) Flower (2000) 65; Mitchell, L. (2007) XX.
- (6) Aristotle, *Politics* (I) 1252a 25- 1252b; Crawford and Whitehead, 7; Erskine (2000) 167.
- (8) Aristotle, *Politics* (I) 1252a 25- 1252b; Crawford and Whitehead, 7.
- (9) Plut., *Alex.* 7.2.-8.5.
- (10) Plutarch, *Perikles*, 12. 1-2; Crawford and Whitehead, 138.
- (11) Hdt.8.142.3-5; Crawford and Whitehead, 25A.
- (12) Ibid.
- (14) Hall (1989) 1-2.
- (15) Flower (2000) 65-6.
- (16) Thucydides, 1.96; Flower (2000) 69
- (17) Isocrates 16.26-27; Crawford and Whitehead, 80(B).
- (18) Meiggs and Lewis, no.27; Crawford and Whitehead, 115 (B).
- (19) Hdt. 7.233; Polyb. 4.31.5.
- (20) Champion (2004) 34.
- (21) Arrian, 2.13; Brunt (1965) 205-14 (in Worthington, I. (ed.) (2003) 45-53).
- (22) Champion (2004) 68-92.
- (23) 高島純夫 (1988) 313-20。
- (24) Polyb.5.40-55.
- (25) Polyb.5.55.3.

-
- (26) Strabo. 11.13.1; Sherwin-White and Kuhrt (1993) 77; Billows (2002) 299-31.
- (27) Strabo 11.13.1.
- (28) Polyb.5.55.4-10.
- (29) Polyb.5.56.
- (30) Polyb.5.57.3-8; 59-87.
- (31) Polyb.5.107; 7.15-18; 8.15-23.
- (32) Justin 41.3.
- (33) Polyb.10.27-29.1.
- (34) Polyb.10.29.2.
- (35) Polyb.10.29-30.
- (36) Polyb.10.31.5-12.
- (37) Polyb.10.31.3-6.
- (38) Polyb.10.48.
- (39) 前田耕作 (1992) 101~107。
- (40) 同上。
- (41) Polyb.11.39.1.
- (42) Polyb.11.39.4.
- (43) Polyb.11.39.5.
- (44) Polyb.11.39.9.
- (45) Polyb.11.39.14-16; 大戸 (1993) 133。
- (46) Polyb.2.35.5-7.
- (47) *Syll*^B 398; Austin 2nd,60.
- (48) Aristot. *Pol.* 7.1327b, 23-33; Hippoc. *Aer.* 16-18; Erskine (2000) 169.
- (49) Polyb.3.6.10.
- (50) Polyb. 3.6.10-12.
- (51) Champion (2004) 7; 98.
- (52) Champion (2004) 71.
- (53) Polyb.2.35.5-7.
- (54) Chapman (2004) 68-92.

-
- (55) Austin (2003) 126.
- (56) Polyb.11.39.5.
- (57) Polyb.10.27.3.
- (58) Polyb.8.23; 11.34.9.
- (59) Polyb.5.443.1-4.
- (60) Polyb.5.43.2.
- (61) Billows (2000), 299-301.
- (62) Justin, 41.3.
- (63) Marvin (2002) 212.

小括

第 1 部では、ヘレニズム王国の戦争と王権の関係の分析から、この時代の国際関係の構造について、セレウコス朝の動向を軸に分析してきた。この作業にあたり、ヘレニズム王国同士の戦争と、バルバロイとされた集団に対する戦争の性質の違いを想定し、それぞれに分析を行った。

第 1 章と第 2 章は、ヘレニズム国家との戦争が、セレウコス朝の王権に与えた意味について論じた。ヘレニズム国家同士の戦争が示したことは、その頻度から受ける印象に反して、効果が限定的であることだった。ヘレニズム大国同士の対戦であるシリア戦争は、当事者双方の王の正当性にとって、影響が少なかった。すなわち第 3 次シリア戦争の敗者であるセレウコス 2 世、第 4 次シリア戦争の敗者であるアンティオコス 3 世、第 5 次シリア戦争の敗者であるプトレマイオス 5 世はいずれも玉座の主であり続けた。第 2 章で検討したアカイオスの事例は、この推論を補強するものである。彼の登場まで、小アジアのセレウコス朝領はペルガモンに大きく蚕食されていた。このペルガモンの拡大を食い止め、勢力を後退させたアカイオスの軍事實績は、しかし、彼にセレウコス朝の王位はおろか、小アジアでの独立政権を築くことすら可能にするものではなかった。その効果が限定的だったことは、明白といえよう。

それに対して、ヘレニズム世界の外側と見なされた領域の集団、すなわちバルバロイ集団との戦闘によって利益を得るところ大であったことは、アンティオコス 3 世の東方への 2 度にわたる遠征が示す通りである。治世最初期の対メディア・アトロパテネ遠征はアカイオスのシリア侵攻計画を牽制するに足り、前 212 年に始まる「アナバシス」は、彼に「大王」の呼称を許し、西方に対しても威を示すことを可能にするものだった。

モロンの反乱の失敗は、王朝ごとの正統性が生まれてきたことを示した。この失敗も、アンティオコス 3 世が陣頭に立つことに、その理由を求められるものだった。王であることと戦士であることは、王朝の維持者として相応しいことを誇示する、不可欠の要素として分かちがたく結びついていた。軍事行動においても、ヘレニズム王国同士での戦争は勢力範囲の確定などの限定されたレベルにとどまるものであり、それ以外の蛮族集団に対する戦争で正当性を得ることが、王権の確立には重要だった。すなわち、ヘレニズム王権は、自他認識の枠組みに大きく依存して成立していたといっても過言ではない。そして、こうした図式は、アレクサンドロス大王の業績の上に成立するものだった。

このアレクサンドロス、ヘレニズム時代にはどのような存在として想定されていたのだろうか。第 4 章では、ヘレニズム時代の人々が描いていたアレクサンドロス大王のイメージを、ポリュビオスの記述からたどっていく。

第2部

ヘレニズム時代のアレクサンドロス大王像

第4章 ヘレニズム時代のアレクサンドロス大王像

：ポリュビオス『歴史』を手がかりに

アレクサンドロス大王による東方遠征とアケメネス朝ペルシア帝国征服をもって新たな時代の幕開けとみなし、これに引き続く時代を「ヘレニズム時代」と名付けて、その世界的意義を強調したのは、19世紀プロイセンの歴史家ドロイゼンである。以来、この時代区分は定着して現代に至っているが、アレクサンドロスを新時代の画期とみたのは、ひとりドロイゼンに代表される、後世の研究者たちにとどまるものではない。アレクサンドロスの事績を現代の我々に伝える伝記、いわゆる「大王伝」諸伝においても見出しうるものである。アレクサンドロスについては、「御用史家」カッリステネスの手になる著作をはじめ、生前から多くの公式・非公式の伝記が書かれたことが知られている。日本では研究者の層が薄い、欧米ではアレクサンドロスに関する膨大な先行研究が存在する。

しかし、これらの先行研究が拠っている諸「大王伝」がアレクサンドロスの同時代の文献ではなく、大王よりも後の時代のものであるという、当該時期を専門とする研究者にとっての周知の事実は、広範な認識を得ているとはいえない。すなわち、アレクサンドロスと同時代の記述は時を経るうちに消滅してしまい、後代の伝記、とりわけ帝政期ローマのアッリアノスに代表される5つの「大王伝」に拠って研究が為されてきたのである。

これらの「大王伝」がいずれも、アレクサンドロスから少なくとも300年後の、ローマ帝政期に書かれた著作であるという問題については認識されてきたものの、アレクサンドロスに関する最古の文献史料は、集中的な分析の対象とされることなく、現在に至っている。それが、ポリュビオスの『歴史』である。本章の目的とするところは、ポリュビオスの記述の検討を通じて、ヘレニズム時代の人々がアレクサンドロスに対して抱いていたイメージを探ることである。筆者の見解では、アレクサンドロスに関するポリュビオスの論点は、以下の二点にまとめられる。ひとつめの論点は、テーバイの破壊に関する記述である。ポリュビオスは、アレクサンドロスによるテーバイの破壊をどのように評価していたのか。テュロスやガザなど、彼の東方遠征での都市の破壊についての記述をあわせて検討し、アレクサンドロスの暴力的な部分に対するポリュビオスの考えを考察したい。第二の課題は、アレクサンドロスと後代の王との比較を通じて見だし得る、ポリュビオスにとっての理想の王の姿である。最初に、先行研究を整理して、上記ふたつの論点の提示の意義付けを行う。

I、問題の所在：アレクサンドロス像とポリュビオス

① 史料状況と先行研究の傾向

現在に伝わるアレクサンドロス大王の主要な伝記は、5つである。最初に挙げられるのは、2世紀にローマ五賢帝期の人アッリアノスによって書かれた『アレクサンドロス大王東征記』である。次に、プルタルコス『アレクサンドロス伝』が挙げられる。三番目は、前1世紀に書かれたディオドロスの『歴史集成』である。四番目は、クルティウス・ルフスの『アレクサンドロス大王伝』で、正確な執筆年代は不明であるが、ローマ帝政期の著作と推定されている。そして最後に、ユスティヌスによる『ピリッポス史』抄録が挙げられる。これはローマ初代皇帝アウグストゥスの時代にポンペイウス・トログスが書いた『ピリッポス史』という歴史書を、3世紀にユスティヌスが抄録したとされるものである⁽¹⁾。

以上に挙げた5点のうち、先行研究ではアッリアノスの著作が「正史」とされ、残る4者は「俗伝」と扱われてきた。また、この5つの伝記はいずれも大王の同時代人による歴史書に依拠したとされているが、「正伝」の著者であるアッリアノスは、プトレマイオス朝初代のプトレマイオス1世、およびアリストブロスの著作に依拠していることを自著の中で述べている⁽²⁾。一方、他の4者はヘレニズム時代に最も人気があった、クレイタルコスの『アレクサンドロス史』に主に依拠したとされてきた。原典の多様さ、そしてそれに拠って書かれた諸「大王伝」の著者の多様さのために、アレクサンドロスは「さながらカメレオンのごとく」多様なイメージをもって現代に語り継がれている⁽³⁾。

現存する「大王伝」はいずれも、ローマ帝政期に入ってから著されたものである。よって、これら現代に伝わる「大王伝」に立脚する研究には、ローマ帝政期の大王像が強く反映されているということが、容易に想像されるであろう。この史料的制約については、先行研究でも注意が払われてきた。近年のアレクサンドロス研究の出発点とされるステュアートの研究においても、この史料的限界が言及されている⁽⁴⁾。また、森谷公俊も、現存する大王の伝記が全てローマ時代のものであるため、現代に伝えられる大王のイメージにはローマの影響が色濃く反映されているという問題を認める。その上で森谷は、諸「大王伝」の記述は大王の同時代人のイメージを継承しているため、そこからヘレニズム時代の大王へのイメージを読み取ることは可能とする⁽⁵⁾。

この森谷の姿勢が、アレクサンドロス研究者たちに共通する基本的な姿勢といってよいだろう。すなわち先行する諸研究は、現存するアレクサンドロスの伝記に投影された、ロ

ローマ帝政期の大王に対するイメージに注意を払う一方、そのイメージを取り去ることによって彼の素顔に肉薄し、その個性や政策を検討することを主たる目的としてきた。従って、主たる関心は実際のアレクサンドロスの姿にあって、史料の背景にある後世のイメージの検討という課題は、研究者たちの問題意識の核心となつてこなかったと考えられる。とりわけ、東地中海がローマの支配下に入る以前に、ヘレニズム時代の人々が彼に対して抱いていたイメージを検討する必要性は、考慮されることは少なかったのである。

ヘレニズム時代のアレクサンドロスの語られ方を、同時代文献に即して検討する意味はどこにあるのだろうか。この点に関して最初に参考となるのは、ヘレニズム時代の王権は、アレクサンドロスに範を求めるものだったとする諸研究である⁽⁶⁾。また、大戸千之はセレウコス朝史の立場から、アレクサンドロスの名声や威信への憧憬が、同朝中興の王とされるアンティオコス3世を東方のインドまで遠征させたのだと説く⁽⁷⁾。グレインジャーは、アンティオコス3世の対プトレマイオス朝戦争について、もし彼がエジプト征服を成し遂げた場合、彼はアレクサンドロスと同等の地位を持つものとなったであろう、とする⁽⁸⁾。

以上の整理をふまえ、アレクサンドロスがヘレニズム時代にはいかなる存在として認識されていたのかという問いと、この問題を読み解くための同時代史料の検討という作業の必要性が浮上する。

しかしこの課題については、ヘレニズム時代の同時代史料に基づいての研究はほとんどなく、主に「大王伝」諸伝や図像史料に基づいたアレクサンドロス像を、ヘレニズム時代についても踏襲・展開しているのが現状である。注意すべきことは、アレクサンドロス像の継承および変容という問題である。アレクサンドロスと、現存する諸「大王伝」の書かれた時代は遠く隔たっており、ローマ時代に諸「大王伝」が著された際に、ヘレニズム時代の人々のアレクサンドロス観から受けた影響は、検討される必要がある。

これらの問題を考察するにあたり、唯一現存するヘレニズム時代の同時代文献史料である、ポリュビオスの『歴史』の検討は、不可避の課題と考えられる。この史書はヘレニズム世界の大王像の検討、ひいてはヘレニズム世界の世界観を考察する上で重要だが、分厚いアレクサンドロス研究の中で、ポリュビオスに依拠した研究は非常に少ない。それは何故だろうか。ポリュビオスの記述するアレクサンドロス像の全体的分析を試みた研究は、管見の限りではエリントンとピロウズを挙げ得るのみであり⁽⁹⁾、この両者の研究を整理しつつ、ポリュビオスを用いたアレクサンドロス研究の意義を探る。

② ポリュビオスのアレクサンドロス像検討の意義

上記ふたつの研究のうち、先行するエリントンの研究から検討する。彼は史料的問題について、ポリュビオスのアレクサンドロス大王に関する記述は、アリストテレスの甥で大王の従軍史家だったカッリステネスの著作に基づく想定した⁽¹⁰⁾。その上でエリントンは、ポリュビオスによるアレクサンドロスに関する記述は少ない上に具体性に乏しく、さらにアレクサンドロスに言及するのは限定された事件についてのみであるため、彼の『歴史』に基づいて全般的な議論を行うのは不可能である、とその困難さを指摘した⁽¹¹⁾。他の歴史学者たちもエリントンと同様に、他の「大王伝」諸伝に比べて、ポリュビオスを扱いづらい史料とみなしてきたと推測される。

このような見方に異を唱えたのがピロウズである。彼は、ポリュビオスの著作が現存する唯一のヘレニズム時代の文献史料であること、すなわちローマ時代以前のアレクサンドロスの像を直接に伝えているという点を重視する⁽¹²⁾。

そしてピロウズは、ポリュビオスの著作におけるアレクサンドロスについての記述を、5つの主題に分けている。最初に、アレクサンドロスの即位当初にコリントス同盟から離反したテーバイの破壊があげられ、ポリュビオスはこの行為に対して、同市の神域の保護という点を除いては弁護の余地がない蛮行としている、とピロウズは述べる⁽¹³⁾。次に、アレクサンドロスと他の王たちの比較があげられる。上でみたように、ヘレニズム期の王権はその淵源をアレクサンドロスに持っていたことから、ヘレニズム諸王国の王たちは常に彼を意識し、比較の対象とすることで王位の正当性を主張してきた。ポリュビオスも、同時代の王たちとアレクサンドロスを比較することによって、その王たちの資質を評価してきたとピロウズは指摘する⁽¹⁴⁾。三番目にあげられるのは、アレクサンドロスの性格と、彼の指揮官としての能力に関する評価である。ヘレニズム時代のギリシア哲学者たちの間では、王は救世主、すなわちソーテール (σωτήρ) としての役割が期待されていたのに対し、アレクサンドロスの支配は力による強圧的なものであったと批判しているのだとする⁽¹⁵⁾。続いて、アレクサンドロスの下で活躍した幕僚たちに関する記述について、他のアレクサンドロスの伝記では軍事的成功をすべて彼の功績に帰するかのごとく叙述しているのに対して、ポリュビオスは彼の配下、とりわけアレクサンドロスの父王ピリッポス 2 世から引き継いだヘタイロイ (幕友) 諸将の活躍によるところへの評価が高いと述べる⁽¹⁶⁾。最後の主題はアレクサンドロスの幸運に関する記述で、彼の活躍はその力量による部分よりも、幸運による部分が大きいとする。

以上の5つの主題から、ポリュビオスは「全体史」としての体裁を強く意識したために、アレクサンドロスの功績に関心が偏りがちな諸「大王伝」に比べて、麾下の部将たちの功績に対しても高く評価していることがうかがえる。またテーバイの破壊のような「蛮行」に対しては、たとえば「正伝」であるアッリアノスのような弁護をアレクサンドロスに対して与えることなく、厳しく批判していることが指摘される。以上のようにしてビロウズは、ポリュビオスがアレクサンドロスについて語るときには、バランスがとれた記述をしていることを指摘する⁽¹⁷⁾。

さらにビロウズは、ポリュビオスの拠った史料はエリントンの主張するカッリステネスではなく、カルデアのヒエロニューモスの著作に依拠しているとする⁽¹⁸⁾。エリントンがポリュビオスの典拠としているカッリステネス、あるいは他の「大王伝」が拠っているアレクサンドロスの個人的伝記とヒエロニューモスとの差異は、ヒエロニューモスの著作がギリシアの歴史叙述のスタンダードである「全体史」的な記述である、ということに求められる⁽¹⁹⁾。そして、ポリュビオスがアレクサンドロスに対してバランスのとれた見方を有している理由は、原典として用いたヒエロニューモスの記述を引き継いでいることに起因する、というのがビロウズの主張するところである。

ここまでビロウズの研究について詳しく紹介したのは、彼の主張に参照すべきところが多くみられるからだが、その研究は全体的な見取り図の提示に留まっており、不十分なものと評し得よう。特に大きな問題は、前節で整理した、ヘレニズム時代の王権と軍事的功績の間の関係性を論じた諸研究と比較した際の、大王に対する評価の差異である。他の先行研究では、とりわけミッチェルに顕著にみられるように、ヘレニズム諸国の王たちはアレクサンドロスに倣った軍事的功績の獲得、特にヘレニズム世界に共通の外敵たる蛮族／バルバロイの脅威の排除という実績によって支持を獲得し、王権を確立していったとする。一方、ビロウズの所説では、ポリュビオスはテーバイの破壊などにみられるアレクサンドロスの支配の暴力的側面が、ヘレニズム時代の君主の理想像たるソーテールから外れるものとして批判している、とする。

本章冒頭で、ポリュビオスの著作に現れるアレクサンドロス関連の記事をふたつに分けた理由は、この点に求められる。すなわちビロウズの研究は、ポリュビオスがアレクサンドロスについて、

- ・ アレクサンドロスは、テーバイの破壊に代表される暴力的側面のゆえにソーテールの基準から外れているため、理想的な王ではない

- ・ 従ってアレクサンドロスが功業をなし得た理由は、彼自身の力よりも、側近の幕友集団の有能さや父親ピリッポス 2 世の築いた素地、そして幸運に求められる

以上のように考えていた、と要約できる。そのため、最初に必要となる作業は、テーバイの破壊に対するポリュビオスの見方の検討である。この考察によって、ビロウズがポリュビオスのアレクサンドロス観の根幹をなすと考える部分が妥当であるのか、判断が可能となる。

II、テーバイの破壊に対する評価

① スパルタでの使節の議論にみられるふたつの見解

アレクサンドロス大王は即位直後、コリントス同盟から離反したテーバイを討ち、徹底的に破壊した。『歴史』中でもアレクサンドロスによるテーバイ破壊についての言及の頻度は多く、全体に遍在していることから、ポリュビオスの関心の大きさがうかがい知れる。まず、ポリュビオスが『歴史』中で描写した同時代人の見解として、前 209 年、スパルタでアイトリアとアカルナニアの使節たちが交わした議論から、アレクサンドロスに対する当時の賛否双方のイメージを検討したい。

最初にこの時期のスパルタをめぐる状況について整理する。ローマがハンニバルとの戦争、いわゆる第 2 次ポエニ戦争を行っていたのと同じ頃、マケドニアのピリッポス 5 世はハンニバルと同盟を結び、ローマに対する戦争をしかけた（第 1 次マケドニア戦争）。ローマはマケドニアに対して軍を派遣する一方、アイトリアと同盟してピリッポス 5 世を牽制した。このときスパルタはアイトリア寄りの立場をとっていたが、そのスパルタに、アカイアと敵対関係にあったアカルナニア連邦が使節を派遣した⁽²⁰⁾。時を同じくしてアイトリアもスパルタに使節を派遣しており、両者はスパルタで論戦を展開した。

最初に紹介するのは、アイトリア使節クライネアスの主張である。

ラケダイモン（スパルタ）の人々よ、私はギリシアの奴隷状態の起源がマケドニアの諸王によるものであることを敢えて否定する者はいないと考えるが、その問題を次のように考える。（中略）彼（ピリッポス 2 世）から国家を引き継いだのはアレクサンドロス（大王）であった。彼は、テーバイ人のポリスに残されていた僅かなギリシアの光を完全に破壊したが、それはあなたたち全てが知っていることだと考える⁽²¹⁾。

ここでクライネアスは、アレクサンドロスによるテーバイの破壊が、ギリシアの栄光を完全に消し去るものであり、その後引き続き、マケドニアへの隷属状態の出発点となっ

た、という否定的見解をきわめて明快に述べている。これに対して、アカルナニア使節のリュキスコスは、次のように反論する。

クライネアスはアレクサンドロスが、悪事をしたと判断に従ってテーバイ人のポリスを罰したとの理由で、そのことを厳しく非難したが、彼がペルシア人による全てのギリシア人への暴力の故に罰を与えたことを、あなたは触れていないし、また次のことにも触れていない。すなわち、最悪なことから我ら全てを自由にするために、彼はバルバロイを奴隷にして彼らの富—その富によって彼らはギリシアを破滅させ、ある時にはアテナイ人の年長者たちを集め、またある時にはテーバイ人を集めたのだが—を減らし、アジアをギリシア人に従属させたのである⁽²²⁾。

リュキスコスは、アレクサンドロスがテーバイに対して行った破壊行為の是非の問題については深く追求していない。その一方で、アレクサンドロスがペルシアへの遠征および征服によってペルシアに罰を与え、その脅威を排除した功績を高く評価すべきであると主張し、クライネアスによるアレクサンドロスへの非難に反論しているのである。リュキスコスの議論には、アレクサンドロスによる破壊行為に対する否定的な姿勢はみられない。

ここで興味深いのは、アレクサンドロスのテーバイ破壊についての評価の是非をめぐる議論が、スパルタで行われているということである。前 5 世紀のペルシア戦争で、スパルタはアテナイとともに、ペルシアの侵攻を撃退する中核的役割を果たした。その一方で、アレクサンドロスの東征時にはペルシアと結び、アレクサンドロスの背後を脅かしている。この時には、国王アギス 4 世率いるスパルタ軍が、マケドニアの留守を預かっていたアンティパトロスにより一敗地にまみれる結果に終わっている⁽²³⁾。また、後でも見るように、ピリッポス 5 世の即位直前の時期には、スパルタはクレオメネス 3 世のもとで勢力伸長を図ったが、アカイア連邦のアラトスの要請を受けたアンティゴノス 3 世ドーソンの介入によってクレオメネス 3 世が放逐され、一時王が不在という事態に陥っている⁽²⁴⁾。

以上の点から、アレクサンドロスやその出身地マケドニアを継いだアンティゴノス朝に対して、スパルタが好意的であったとは考えられない。従って、スパルタの人々にとっては、クライネアスの議論の方がより受け入れやすかったであろう。しかし、リュキスコスは敢えて、アレクサンドロスを擁護する議論を展開した。そこには、ペルシア帝国を滅ぼしたアレクサンドロスの功績は無視しうるものではなく、テーバイの破壊のみを根拠とするアレクサンドロスの功績の全否定に対して、批判的認識があったことを確認することができる。

ここで検討した箇所からは、テーバイの破壊という行為に対する同時代人の評価には、否定・肯定いずれか一方に偏った見方が支配的ではなかったことが確認できる。では、この両論を伝えるポリュビオス自身の見解は、どのようなものであったのだろうか。節を改めて検討したい。

② テーバイの破壊に対するポリュビオスの評価

ビロウズは、ポリュビオスがテーバイの破壊という事件に対して極めて批判的で、肯定できるのは神々への敬意のみであるとするが⁽²⁵⁾、その見解を裏付ける根拠としたのは次に挙げる一節である。

テーバイ人は、アレクサンドロスがアジアへ進撃するときに、テーバイの罪を罰し、その破壊の恐怖によってギリシア人を監視するという目的のために、祖国を追い出された。しかしその時、全ての人々がテーバイ人を不正な、そして恐ろしい惨禍を被ったと哀れみ、アレクサンドロスの行為の正当さを保証した者はいなかった⁽²⁶⁾。

この記述を見る限りでは、テーバイの破壊という事件についてポリュビオスが「極めて批判的」であるとするビロウズの見解は⁽²⁷⁾、ごく妥当なものであるように思われる。しかし、果たしてテーバイ破壊という事件は、本当に「不正な」恐ろしい惨禍である、と見なされていたのだろうか。この点を考える上で、ポリュビオスがテーバイに対して好意的ではなかったことを示す記述が見出されることが注目される。

かつてペルシア軍侵攻のとき、テーバイ人たちは戦争の恐怖から、危機のさなかのギリシアを捨ててペルシアの味方に付いたが、だからといって私たちはテーバイ人を信用しない（後略）⁽²⁸⁾。

上記引用箇所から明らかなように、ポリュビオスのテーバイに対する非好意の根拠は、ペルシア戦争でテーバイが他のギリシア諸都市を裏切って、アケメネス朝ペルシア帝国に与したことに求められる。この点を踏まえて、アレクサンドロスのテーバイ破壊に対するポリュビオスの見方をさらに追求すると、次の一節が注目される。

アレクサンドロスはテーバイに対してあまりにも怒りが大きかったのでその住民を奴隷に売って都市を基盤から破壊してしまったが、都市への攻撃の際も神々への信仰を軽視せず、むしろ非常な洞察力をもって偶発的な失敗を神殿や神域全体に対して行うことはなかった。そして、アジアへ渡ってペルシア人たちのギリシアでの瀆神を罰した時には、人間たちの行動の罰を与える一方で、神々に属する全てのものには手を付

けなかったが、それこそまさしくペルシア人がギリシア各地で間違いを犯したことであった⁽²⁹⁾。

ここでポリュビオスが指摘するのは、アレクサンドロスがテーバイを攻撃する際にも神域の不可侵を厳守したこと、そして神域への不可侵という姿勢はギリシア諸国に対してのみならず、ペルシア帝国を征服する際にも貫かれたということである。神域を侵すことへの批判はポリュビオスの記述の中にしばしば現れるものであり、アレクサンドロスが戦時にも神域への侵犯を避けたことに対する、ポリュビオスの積極的評価をみることができる。すでに指摘したように、ポリュビオスはペルシア戦争の故事からテーバイには批判的な立場であり、この点に関して、先にみた「神々への敬意以外にアレクサンドロスへの弁護をポリュビオスは行っていない」とするビロウズの見方は、消極的にすぎるだろう。

しかしながら、テーバイの破壊という行為がアレクサンドロスに対する有効な批判材料であるとの認識は、ポリュビオスも持っていた。その意識をうかがい知ることができるのが、ガザ征服についての記述である。アレクサンドロスは東方遠征の初期、前 333 年のイッソスの戦いの後にシリア・エジプトを征服して東地中海沿岸を押さえ、ペルシア艦隊による補給路妨害の動きを断った。その際に抵抗した都市としては、7ヶ月に及ぶマケドニア軍の攻囲に耐えた末に陥落、破壊されたテュロスがもっとも名高いが、同じくパレスティナ地方にある都市ガザも、アレクサンドロスへの激しい抵抗の末に同様の運命をたどった。ポリュビオスはこのガザについて次のように述べている。

（ガザに）住む人々は、戦争行為についての勇氣においてコイレ・シリアの人々には及ばないが、連携と多くの信義を守り続け、大胆さを押さえられない。（中略）アレクサンドロスの時には、他の降伏した人々だけではなく、テュロスの人々もまた力づくで奴隷に売り、アレクサンドロスの暴力と力に対抗した者については殆ど希望がもてなかったが、シリアの人々のみが立ち向かってあらゆる希望を試したのである。⁽³⁰⁾

ビロウズは、ポリュビオスはこの箇所、アレクサンドロスによる力づくのガザ征服がヘレニズム時代の王の理想型たるソーテール、すなわち救世主としての姿勢に相応しくないと批判していると論じる。この主張をするにあたって、ビロウズはポリュビオスの背景に、ヘレニズム時代に有力だったストア派の影響があったことを推測している。しかし、ビロウズ自身が「議論を飛躍させれば」と留保をつけているように⁽³¹⁾、ストア派との直接的関連性は見いだし得ない。また、ヘレニズム諸王国でストア派が影響力を行使したとしてきた説に対しては、同派が実際の政治の場で及ぼした影響が不鮮明である、という

指摘に注意する必要があるだろう⁽³²⁾。したがって、テーバイなどの破壊を根拠として、ポリュビオスがアレクサンドロスを「理想の王」たるソーテールの像から外れるとの評価を下したというピロウズの説には、賛同しがたい。

筆者は、アレクサンドロスがガザやテーバイ征服に際して見せた強硬姿勢に対して、ポリュビオスが否定的な感情を持っていたというピロウズの評価には賛同する。しかしそれは、都市への破壊を蛮行として嫌うポリュビオスの感情に由来するとみる。この意識が背後にあったために、ポリュビオスの中にはアレクサンドロスの行為への擁護と、相反する大王への批判的感情が同時に存在していたと見るべきではないだろうか。そこでポリュビオスは、テーバイの破壊に関する言説を取りあげる際には、批判的な言説と併せて、テーバイへの批判や破壊に際してアレクサンドロスが示した節度を指摘することによって、バランスを取ることを試みたと判断できる。

アレクサンドロスに対する賛否両論の均衡を意識するという記述姿勢が、本節冒頭で挙げたガザの破壊に関する記述では崩れているのは何故であろうか。これは、ポリュビオスの執筆時期が関係していると思われる。ポリュビオスの『歴史』は当初、前 220 年から前 168 年までを取り扱う予定であったことが知られているが、最終的にはこの範囲を超えたところについても叙述しており、前 168 年以降を扱った第 30 巻から第 39 巻は「拡大十巻」と称されている。『歴史』の執筆時期についてウォールバンクやチャンピオンは、第 15 巻以前は前 146 年以前に執筆されたものとしており、ポリュビオスの姿勢にカルタゴ滅亡の前後で変化があることを示唆している⁽³³⁾。また藤井崇は、この「拡大十巻」の執筆にあたって、ポリュビオスのローマに対する姿勢が批判的なものに転じたとの見解を示している⁽³⁴⁾。本節第 2 項冒頭でみたテーバイ破壊への全面的な批判は『歴史』の 38 巻に当たる箇所です。それまでテーバイの破壊について抑制的もしくは中立的な立場を維持してくることに腐心してきたポリュビオスの、筆致の変化が確認できる箇所であると考えて良いだろう。しかし基本的には、ポリュビオスはアレクサンドロスのテーバイ破壊を中立的な立場から伝えようとし、批判ないしは擁護の一方に偏ることがないように、注意を払っていたと筆者は考える。

都市の破壊、なかでもテーバイの破壊という事件を扱うにあたり、諸「大王伝」は、ピロウズが指摘するように、アレクサンドロスを擁護する傾向を、さらに明確に示している。例えばディオドロスの記述には、テーバイ破壊の原因をテーバイ自身に帰そうとする意図が明白に見て取ることができる⁽³⁵⁾。その破壊の責任については、一方ではテーバイに対し

て敵意を持つ人々の提案によるものとし、また他方ではテーバイがペルシア戦争の時にペルシア側に付いたことに求めるべきだとしており、特に後者についてはポリュビオスとも共通する認識を持っていることを読み取ることができる⁽³⁶⁾。また、テーバイ破壊に関してもっとも顕著にアレクサンドロスを擁護しているのは、諸「大王伝」のなかでも「正伝」とされるアッリアノスである。この「正伝」ではテーバイがペルシア戦争で取った立場への批判と、東征中にアレクサンドロスがテーバイに対して見せた憐憫の情を記述するなど、大王を擁護する姿勢が強く現れる⁽³⁷⁾。同様の記述はプルタルコスにもあらわれており⁽³⁸⁾、ペルシア戦争の記憶によってテーバイを批判し、アレクサンドロスの破壊行為を擁護する傾向は、ヘレニズム時代を経由してローマ帝政期に継承されたことがうかがえる。

ビロウズがいうように、テーバイの破壊に代表される都市の破壊に対して、ポリュビオスが批判的な心情を持っていたのは確かだろう。しかし、この事件に対してポリュビオスが擁護を行っているという側面は軽視できない。この点を深く追求することなく、ポリュビオスのアレクサンドロスに対する否定的側面を強調して「ソーテール」論を組み立てているビロウズの論には従いがたい。

以上の点から、アレクサンドロスの側近集団の活躍の強調という点についても、ビロウズとは別の観点から評価されなければならないだろう。その作業に移る前に、純粹にアレクサンドロスの行為を肯定的なものとする考え方の存在を確認しておきたい。ヘレニズム諸王の側からの、この事件に対する見方である。

③ ヘレニズム王権の側からみるテーバイ破壊

テーバイ破壊に関してアレクサンドロスに対する評価が、この事件について物語る人間の立場によって異なっていたという事態は、ピリッポス 5 世即位直後の、スパルタを巡るマケドニア王側近の発言からも見てとることが出来る。

既にみたように、スパルタはクレオメネス戦争でクレオメネス 3 世が亡命した後は王の不在が続き⁽³⁹⁾、ピリッポス 5 世の即位時期には国政が混乱して、監督官のひとりアデイマントスが殺害される事態に発展していた⁽⁴⁰⁾。即位したばかりのピリッポス 5 世はアカイア連邦長官アラトスの要請を受け、ギリシアに介入してヘラス同盟全体の会議を招集するが、スパルタは出席を拒否した。この事態を受けてピリッポス 5 世は廷臣たちにスパルタへの介入の是非を諮るが、その場でひとりの廷臣が、スパルタの破壊を提案した。

その後御前会議の出席者ひとりひとりが発言したが、意見は分かれた。ある者たちは

スパルタ人の性向の下劣さを思い起こし、アデイマンロスたちはマケドニアとの親交を唱えたがゆえに殺されたこと、そしてラケダイモン人はアイトリアと行動を共にしようという腹づもりに違いないことを確信していたので、ピリッポスに忠告して、ラケダイモンを他国への見せしめにするべきである、アレクサンドロスが王位を受け継いだ直後にテーバイに対して行ったのと同じことを、ラケダイモンに対して行うべきだと主張した。⁽⁴¹⁾

発言者の意図は明快であろう。アレクサンドロスによるテーバイ破壊を、ギリシア諸邦リスへの見せしめの模範例として考えているのである。すなわちマケドニア王権の側からは、テーバイの破壊は禁忌とすべき性質のものではなく、積極的に肯定されうる政策であったことを示している。しかし、ピリッポス 5 世はこの提案を退け、事態を静観する姿勢を取った。ポリュビオスはこのピリッポス 5 世の判断を賢明なものであるとし、その決定の背後にはアラトスの助言があったと推測している⁽⁴²⁾。

ピリッポス 5 世がスパルタを破壊しなかったことをポリュビオスが肯定的に評価した背景には、この王がアカイア連邦を救援したことへの好意があると考えることができる。また、テーバイ破壊に関するポリュビオスの記述の分析からは、アレクサンドロスの事績は後世の王にとって、参考にすべき先例とする意識の存在がうかがえる。他方、どの部分を倣うべきとするかという点に関しては、アレクサンドロスの名を引き合いに出す人物の立場によって異なっているということが、テーバイの破壊という事例からもうかがうことができる。

ポリュビオスは、アレクサンドロスの先例のいかなる部分が、後世の王たちの範とすべきところであるとみなしていたのだろうか。次節では、アレクサンドロスの名が、テーバイの破壊に関連する箇所以外で用いられている文脈の中で見出される、アレクサンドロスとディアドコイ諸国の王など他の王たちとの比較から、アレクサンドロスに対するポリュビオスの評価を見定めたい。

III、ポリュビオスのアレクサンドロス大王像とその影響

① アレクサンドロス大王と後世の王たちとの比較

1. セレウコス朝のアンティオコス 3 世との比較

アレクサンドロスと後世の王たちとの比較の事例として、アレクサンドロスの後継者たちの直系の子孫であるヘレニズム三大王国との対比を考察する。そのうちセレウコス朝を、

最初の検討対象とする。アレクサンドロスの征服領域の最大領域を継承したセレウコス朝とアレクサンドロスの関連性は第 3 章で詳しく検討しており、ここでは本稿の考察に必要な限り、第 3 章で得た検討結果を提示する。

まず確認できることは、アレクサンドロスとセレウコス朝については、次に検討するアンティゴノス朝に見られるような、直接的関連性や連続性に関する言及はみあたらないということである。また、アレクサンドロスに関する記述も少ない。この前提を踏まえた上で、前稿では、セレウコス朝が「バルバロイ」すなわち蛮族集団と境を接し、相争っているところでアレクサンドロスの名が言及されていることを指摘した。すなわち、東方に広大な領土を持っているセレウコス朝と「バルバロイ」を分ける基準は、アレクサンドロスによって征服され、その後に大王の流れをくむ支配者に服属した地域であるか否か、ということによっているのである⁽⁴³⁾。そしてヘレニズム諸国の王、とりわけセレウコス朝の王は、これら「バルバロイ」諸集団の侵入を防ぐことによって、王権の正当性を確立することができた、ということが推測できる⁽⁴⁴⁾。

この検討結果から、アレクサンドロスは、アケメネス朝ペルシア帝国の滅亡以降、「ヘレネス」と「バルバロイ」の区分を認識する際概念装置としての役割を持った、ということが指摘できる。そのため、アレクサンドロスの名は、セレウコス朝との直接的な関係性を印象づける形では現れない。しかし、アンティオコス 3 世の王権確立の過程でアレクサンドロスの名が見出されることには、見逃すことができない意味があるものと思われる。すなわち、アンティオコス 3 世は、アレクサンドロスの系譜からは外れた存在であるメディア・アトロパテネのアルタバザネスを「バルバロイ」として屈服させることで、自身の王位を安定させたということが示されている⁽⁴⁵⁾。こうした即位当初の「バルバロイ」に対する軍事的成功のゆえに、ポリュビオスはアンティオコス 3 世に好意的であったとピロウズは指摘しており⁽⁴⁶⁾、その指摘に筆者も同意する。

しかし、ここで重要なことは、アレクサンドロスの存在を抜きにしては、ここにみられるアンティオコス 3 世に対する好意的評価は成立し得ないということであり、その点に関する注意がピロウズにはない。すなわち、先行する諸研究、とりわけミッチェルの研究では、ヘレニズム諸国の王たちは外敵たる「バルバロイ」諸集団の侵入を追い払うことによって「ソーテール」たることを自ら証明して王位を確実なものとしたとされる⁽⁴⁷⁾。アンティオコス 3 世の王位確立の過程でも、この説はよく合致する。この「バルバロイ」との境界は、アレクサンドロスの征服地、もしくは彼の後継者の系譜を引く者の統治領域に帰属

するか否かで分かれたというのが第 III 章での検討結果であって、そこではビロウズが論ずるような、ストア派による「ソーテール」論を組み込む必要性はみうけられない。

以上のようなことから、アレクサンドロスの故地であるマケドニアを遠く離れたところにおいても、彼の存在が、王位確立という過程において重要な要素であったことを読み取ることができる。それでは、アレクサンドロスの出身地であるマケドニアを受け継いだアンティゴノス朝では、事情はどうだったのだろうか。

2. アンティゴノス朝のピリッポス 5 世との比較

アレクサンドロスの出身地であるマケドニアを領有していたアンティゴノス朝については、セレウコス朝の例とは違って、アレクサンドロスとの直接的な連続性を明確に示す記述がある。ピリッポス 5 世はアイトリア連邦との戦争のなかで、テルモスというポリスを攻略した際に、都市域のみならず神域にまで火を放ち、略奪を行った⁽⁴⁸⁾。この事件について、ポリュビオスは次のように批判している。

だからピリッポス (5 世) もこの時、以上のような前例をしっかりと心に留めて、自分がこれらの先王から継承し遺贈されたのは権力だけでなく、むしろ行動の指針であり度量の大きさであることを見せてやるべきだった。彼は一方ではアレクサンドロス (大王) とピリッポス (2 世) の一族であることを証明するために、人生全体を通じて大きく熱心だったのに、他方では見習うことには、まったく関心を持たなかった⁽⁴⁹⁾。

周知のように、アレクサンドロスの家系は次の代、すなわち異母兄であるピリッポス 3 世アッリダイオス、正妻のひとりロクサネが産んだアレクサンドロス 4 世、および愛人バルシネが産んだ庶子ヘラクレスをもって絶えており、「後継者」の一人であるアンティゴノス 1 世モノプタルモスを開祖とするアンティゴノス朝には、大王との直接的血縁関係はない。しかしウォールバンクも指摘しているように、ポリュビオスはピリッポス 5 世をアレクサンドロスの王統を継ぐ者、連なる者として認識している⁽⁵⁰⁾。また、ピリッポス 5 世もアレクサンドロス、さらにはその父ピリッポス 2 世を先祖として強く意識し、その系譜を受け継ぐ者であることを示すために努力していたことがうかがい知れる。

その一方で、ポリュビオスはピリッポス 5 世が、模範とすべきアレクサンドロス、さらにはその父ピリッポス 2 世の先例に従わなかったことを批判している。このことから明らかなのは、ポリュビオスはピリッポス 2 世とアレクサンドロスの 2 代の治世を後世の王たちが模範とすべき先例とみていたこと、それに対してピリッポス 5 世の王としてのあり方

が、この両者の良き例に反すると考えていたことである。

ここまでの事例の検討を整理すると、まずセレウコス朝の事例では、アレクサンドロスの名は「ヘレネス」と「バルバロイ」を分ける際の基準であったこと、そしてアレクサンドロスの名によって規定された「バルバロイ」との戦いが新王即位時に大きな意味を持ったことから、アレクサンドロスの存在は、故地たるマケドニアを遠く離れたところでも強く意識されたことが指摘できる。続くアンティゴノス朝の例からは、アレクサンドロス本貫の地であるマケドニアを支配したこの王朝では、アレクサンドロスとの繋がりがより明確な形で、国王の周囲と、ポリュビオスのようにヘレニズム諸王国とは距離を置いていた人々の双方で意識されていたことが、確認できよう。先に見た、第1次マケドニア戦争時のスパルタにおけるアイトリア使節とアカルナニア使節の議論は、アンティゴノス朝をアレクサンドロスの後継とみる意識の存在を補強するものである⁽⁵¹⁾。そして、ピリッポス5世に対してポリュビオスが行った、ピリッポス2世やアレクサンドロスの先例を踏襲しなかったとの批判からは、彼がアレクサンドロスを王としての理想型として認識していたことが見て取られる。

ポリュビオスにとって、王の理想型たるアレクサンドロスから同時代の王たちが手本とすべき先例とは、どのようなものだったのか。まず本章II-2項でも検討したように、ポリュビオスが神域の保護ということに寄せた関心の大きさを確認することができる。その他に、アレクサンドロスの事績のどのような点が、後世の王たちの手本とすべき点であるとポリュビオスは考えたのだろうか。さらに考察を進めたい。

② アレクサンドロス大王と配下の将軍たちへの評価

アレクサンドロスに関するポリュビオスの記述でもっとも多くを占めるのは『歴史』の第12巻、歴史家ティマイオスを批判した、いわゆる「ティマイオス批判」の巻である。この巻はアレクサンドロスの軍事行動の実態を詳細に分析して、先行する歴史家たちの軍事に関する記述の未熟さ、あるいは不正確さを批判している巻である。それが端的に伺えるのは、次に挙げる箇所であろう。

アレクサンドロスについて、その合意されている奇妙なこと、すなわち彼の戦争の経験と子供の頃からの鍛錬について得られたことに対して批判しなければならない。彼について描写している人々の多くは、軍事に関する未熟さの故に有能ではないし、またエポロスとカッリステネスによって、我々に伝えられることについては、それらに

について明確に区別することが出来ない。⁽⁵²⁾

上にあげたように、ポリュビオスの記述は婉曲的であり、アレクサンドロスに対する直接的な評価は少ない。しかし、他の歴史家たちによる大王の評価と、それに対するポリュビオスの批評から、彼のアレクサンドロスに対する見方を推測することができる。

もしカッリステネスがおそらく死をもって罰するに値するとしたら、それはティマイオスに対しても及ぼすべきではないだろうか。彼はカッリステネスよりも、それによって神を憤慨させ、より厳しい裁きを受けたであろう。カッリステネスはアレクサンドロスを神にしようと望んだが、ティマイオスはティモレオンを明らかに神にしようとしたのだから。それにカッリステネスはアレクサンドロスを、全ての人が他者より高貴な魂を持つと同意しているとするのに、ティマイオスはティモレオンについて、偉大なことを行おうと考えたことがなかったのみならず、そのようなことに着手することすらなく、ただひとつの動き、すなわち母国からシュラクサイ（シラクサ）への奪取のための移動を行ったのみであり、文明世界の偉大さに何の意味も持たなかったとするのだから。⁽⁵³⁾

ここでポリュビオスが名を挙げているティモレオンは、アレクサンドロスとほぼ同時代に、シチリアのシュラクサイを僭主として統治していた人物である⁽⁵⁴⁾。プルタルコス『対比列伝』によれば、ティモレオンの活動はシチリアを出るものではなかった。従って、その他の地域に影響を与えるようなものではなかった。それに対して、アレクサンドロスは卓越した人物であると万人が認めた人物であり、ティモレオンとは比較の対象となり得ない、とポリュビオスは述べている。ポリュビオスによるアレクサンドロスへの高い評価をよく示しており、その背景に東方遠征による征服活動があることは、ティモレオンとの対比によって、いっそう明確に示されている。

同時に見落とすことができないのは、先行する歴史家たちが、特定の個人を功績のゆえに神格化していることへの批判である。ポリュビオスはティマイオスによるティモレオンの神格化を批判しているが、カッリステネスによるアレクサンドロスの生前神格化に対しても「死をもって罰するに値する」との評価を完全には退けていない。ここでみられるような、同時代の英雄たちを神として祀り上げることへの批判姿勢の、拠って立つところはどこにあるのだろうか。それを看取しうるのが、次に挙げる箇所である。

ピリッポスと彼の友たちについて意識されるべきことは（中略）彼らは明らかに自身の勤勉さと大胆さによって、非常に小さな王国から名誉ある大きな王国へ、マケドニ

ア人の国家を発展させたのである。ピリッポスの治世の後に、アレクサンドロスとともに実現した偉業が、ピリッポスの友人たちの美德に異論の余地のない評価を与えて後世に伝えている。若かったにもかかわらず、完全な指導者としてアレクサンドロスが選ばれたので、偉業の大きな部分が彼に帰することを認めなければならないが、いずれにせよ、私は彼を援けた友人たちについても過小に評価するつもりはない、(中略)彼らがピリッポスとアレクサンドロスとともに一緒に名を残したのは、言うなれば王らしさと魂の偉大さと自制心と勇気と大胆さによるのである⁽⁵⁵⁾。

この記述からは、ポリュビオスがアレクサンドロスの偉業を評価すると同時に、その偉業の土台を築いたピリッポス 2 世、さらにはこの両者を支えた幕友たち(フィロイ)の功績をも、併せて高く評価していることが伺える。本章 II・③のアラトスの例にみられるように、ポリュビオスは王を取り巻く側近集団や幕友たちの役割を重視している。ここではアレクサンドロスの偉業が父王ピリッポス 2 世の築いた基礎、そして父から引き継いだ幕友集団の協力によって成し遂げられたものであると強調することによって、大王ですら個人の力のみで功業を築き上げたのではない、と主張する。

ヘレニズム時代の王権の特質という問題を検討するならば、このポリュビオスの主張は無視できない重要性を持つといえよう。先述のように、ヘレニズム時代には軍事的功績は王に還元され、それによって王権が正当化されていた⁽⁵⁶⁾。ヘレニズム時代の国王崇拜⁽⁵⁷⁾もまた、この傾向の中に置かれるべきであろう。想起すべきは、このふたつがアレクサンドロスにその起源を有するということである⁽⁵⁸⁾。アレクサンドロスの王権を縁の下で支えた二つの要素である、ピリッポス 2 世によって作られた土台と、彼がアレクサンドロスに残した幕友たちの存在の強調、そしてアレクサンドロスが功業を成し遂げる際の、父から引き継いだ幕友たちの活躍への注意喚起と高い評価は、同時にアレクサンドロスに賞賛が集中することへの批判につながる。

ビロウズはこの箇所について、ピリッポス 2 世への賞賛は、アレクサンドロスへの批判的評価の裏返しであるとみるが、首肯しがたい。筆者は、父から子への成果の継承に対してポリュビオスが与えた高い評価があらわれた箇所と考える。ポリュビオスは、アレクサンドロスは自己の力のみを頼りに独走したのではなく、父からの遺産を継承し、引き継いだ幕友たちの協力を得て偉大な功績を成し遂げたと指摘する。その一方で、幕友たちも名を残すという栄誉をともに享受し得たと主張する。

このような姿勢は、大戸千之が指摘しているように、個人の功績がテュケー、すなわち

運命によって左右されるものとするポリュビオスの考え方と、密接に関わり合うものといえよう⁽⁵⁹⁾。個人の力はテュケーという偶発的な要素によって左右されやすい。また、アレクサンドロスの功業にしても、テュケーによるところが大きい。しかし、アレクサンドロスは、ひとりテュケーのみによるのではなく、幕友たちの力に支えられることによって、独りの力に頼る際に遭遇しがちな偶発的危険性を避け、大いなる功績を成し遂げた。アレクサンドロスに対するポリュビオスの見方からは、そのような考え方を読み取ることができる。ここからは、アレクサンドロスへの高い評価の一方で、過度の理想化を避けるという、ポリュビオスの著述に特有の、バランスの取り方がうかがえる。

ピリッポス 5 世に対する評価が徐々に厳しくなっていった理由も、このような姿勢に起因するものと筆者には思われる。王としての優れた資質に恵まれながらも、アトスに代表される有能な幕僚たちを切り捨てて独裁への傾向を強めていったピリッポス 5 世は、アレクサンドロスの系譜を継ぐ王として相応しからざる者である、とポリュビオスの目には映ったのである⁽⁶⁰⁾。

それでは、ポリュビオスの分析から描き出されたアレクサンドロス大王像は、どのようにして後世、ことにローマ時代に受け継がれていったのだろうか。

③ ポリュビオスの記述と後世との関連性

まず、ポリュビオスの立場について確認しておきたい。ポリュビオスはメガロポリス出身で、このポリスが属するアカイア連邦で騎兵長官の要職を務めた後、ローマに人質として送られて長く滞在した。ヘレニズム諸王国の下に仕官したことがないポリュビオスは、ヘレニズム王権からは距離を置く人間だったことは明らかである。

続いて整理しておくべきは、ポリュビオスによるアレクサンドロス像が、アレクサンドロス観全体の中でどのように位置づけられるか、という問題である。本章 III-1、あるいは第 3 章で指摘したように、ヘレニズム諸王国では、新たに即位した王の王権が安定するにあたってバルバロイとの戦争で王が能力を示す必要があり、そして「バルバロイとヘレネスを分ける枠組みが、アレクサンドロスの東征によって創出されたものだった。

この枠組みが確立していく過程で、テーバイをめぐる言説は重要な手がかりを我々に与える。すでに検討したように、ペルシア戦争時にテーバイがアケメネス朝に与したという事実は、このポリスに対する不信や批判の大きな要因となっていた。中井義明は、ペルシ

ア戦争が全ギリシア的な「自由のための戦い」であったという一般的理解が実態からかけ離れていることを指摘したが⁽⁶¹⁾、アレクサンドロスの東征からヘレニズム時代へと移行していく中で、ペルシア戦争が古典期に比べて重要性を増していた様子を、特に本章 II・②でみたポリュビオスの記述から、みてとることができる。その背景には「バルバロイ」との戦争が持つ意味の変容があると考えられる。コリントス同盟に参加せず、さらにはアレクサンドロスの東征中にアケメネス朝と結んで、国王が不在のマケドニアを脅かしたスパルタの例や、東征に従軍したギリシア兵へのアレクサンドロスの冷遇などからみても、「バルバロイとの戦い」という理念が果たした、アレクサンドロスの東方遠征に際してギリシア諸国を統合する論理としての有効性は、疑わしいといわざるを得ない⁽⁶³⁾。しかしポリュビオスが著述を行った頃までには、この大義名分が重要なものとして位置づけられるものに変容していたと推測できる。

アレクサンドロスの征服範囲を指標として成立する「ヘレネス」と「バルバロイ」の差異は、アレクサンドロスの「後継者」たるヘレニズム諸国が、建国あるいは王位継承の際にバルバロイとの戦勝を必要とし続けたことによって、ヘレニズム時代にはさらなる強化をみたのである。その中でアレクサンドロスは、ヘレニズム世界に共有される王としての祖型、ないし理想型として重要度を増していったと考えられる。アレクサンドロスがヘレニズム時代の王権の理想型とみられていたということは先行研究でもいわれてきたことであるが、主としてポリュビオスを考察の中心に置くことで、アレクサンドロスの存在が重要度を増していく過程を読み取ることができる。

その一方で、アレクサンドロスのいかなる側面をより重視するかという点において、ヘレニズム諸王国の側とポリュビオスの見方の間に差異がみうけられる。ポリュビオスがアレクサンドロスに見いだした王としての理想型とは、優れた資質を持ちつつも、決してそれのみを頼りに独走することなく、一方では神々への敬意を忘れることなく、他方では周囲の幕友たちの力を巧みに活用し、大きな仕事を成し遂げるといったものだったと考えることができる。かたや、ヘレニズム諸王国の側では、その点に注意を払ったようには思われない。むしろ本章 II - ③でみたように、ポリュビオスの目には批判されるべきこととして映ったテーバイの破壊をも積極的に評価するなど、アレクサンドロスの行為は全体として無条件に肯定され、基準とされるべきものであったと推測されるのである。

ポリュビオスのどの部分が、後世の「大王伝」諸伝につながるところとみなすことができるのだろうか。まず、アレクサンドロスの暴力的側面に対する批判を含ながらも、同時

にその行為を擁護する議論を伝えるポリュビオスの姿勢は、ディオドロス⁽⁶⁴⁾やアッリアノス⁽⁶⁵⁾にみられるように、後世の「大王伝」諸伝にも継承されていった。

他方、ポリュビオスが強調したアレクサンドロスの側近たちの重要性について、諸「大王伝」ではアレクサンドロスの活躍を重点的に述べることによって、側近集団の存在感を弱め、アレクサンドロスの英雄イメージは一層強化された、と考えられる。ローマ元首政期の歴史家リウィウスのように、アレクサンドロスの独裁的側面を批判的に捉える歴史家も存在した⁽⁶⁶⁾が、総じてアレクサンドロスの英雄としての像は、ローマ期に入っても維持・強化されていったと考えられる。

おわりに

本章では、従来参照されることが少なかったポリュビオスを検討対象として、ヘレニズム時代の同時代史料からの考察も可能であることを示した。最後に、これまでの検討を整理して、アレクサンドロス大王に対するポリュビオスの見方を整理する。

まず、ポリュビオスがアレクサンドロスについて語ることが最も多い、テーバイの破壊という事件に対する言説を分析し、この事件での大王の行動に対するポリュビオスの印象を検討した。そこから、ポリュビオスはテーバイの破壊に対して批判的な姿勢を持つ一方で、テーバイへの批判や神域の保護への言及などを通じて、アレクサンドロスを擁護する論も提示していることを示し、記述の調和を取ることに腐心していることを指摘した。神域の保護や幕友たちの活躍への言及の検討は、ポリュビオスがアレクサンドロス、及びその父ピリッポス 2 世にみた、王としての理想型を我々に教える。それは優れた資質と神々への敬意を併せ持ち、幕友たちに支えられて偉業を成す、というものだった。そして、「理想型」たるアレクサンドロスと比較することで、ヘレニズム諸国の王たちへの批判を行っていた様子を示した。

テーバイに関する記述の分析は同時に、この時代にペルシア戦争に対する積極的評価と、バルバロイの否定的な認識がより一層の確立をみたこと、そしてアレクサンドロスはこの過程を定める道標であることを我々に教える。すなわち、従来は自明視されてきた、ペルシア戦争に対するギリシア人の肯定的感情は、ヘレニズム時代に諸王国の王権の確立過程に組み込まれることによって強化され、ローマを経て後世に伝えられたのであり、その分水嶺がアレクサンドロスであったことを指摘できるのである。

ポリュビオスの記述を、ただちにヘレニズム時代の、ヘレニズム諸王国の側に身を置かない人間にとってのアレクサンドロス観の代表例と考えることは危険かもしれないが、テーパー破壊への擁護という要素が諸「大王伝」に受け継がれていることから、必ずしも特例として片付けられるものではないと考える。そして、彼の記述からは、大きく分けてヘレニズム諸王国の側と、そこから離れたところにあるポリュビオスとの間に評価の差はあるものの、アレクサンドロスを軸とする「ヘレネス」ないしは「ヘレニズム世界」観の共有というべきものが存在したことを指摘できるのである。

こうした「ヘレニズム世界」の枠の外側に位置していたのがローマである。この新参者がバルバロイとされたのであるならば、彼らによるヘレニズム諸王国への勝利は、これらの諸王の正当性に打撃を与えるものだったはずである。ローマの進出に対して、ヘレニズム諸国はどのように対処したのだろうか。第3部において、この問題を検討する。

-
- (1) 以上の整理は、森谷公俊（2007）26-39頁、および Stewart（1993）9-21 に大きく拠っている。
 - (2) Arrian, 1.preface,1-5.
 - (3) 森谷（2007）13-24；Stewart（1993）1-6.
 - (4) Stewart（1993）10.
 - (5) 森谷（2000）および（2007）。
 - (6) 本稿序章の諸研究を参照。
 - (7) 大戸（1993）133頁。
 - (8) Grainger（2002）28.
 - (9) なお、マケドニアのアンティゴノス朝については、Walbank（1993）が非常に参考になるが、この研究については後に詳しく触れたい。
 - (10) Errington（1976）177-8.
 - (11) Errington（1976）176-7.
 - (12) Billows（2002）288.
 - (13) Billows（2002）290.
 - (14) Billows（2002）291.
 - (15) Billows（2002）292-3.

-
- (16) Billows (2002) 293-5.
- (17) Billows (2002) 295.
- (18) Billows (2002) 301.
- (19) Ibid.
- (20) Walbank, *HCP2*, 162-3.
- (21) Polyb.9.28.1-29.1
- (22) Polyb.9.34.1-3
- (23) 森谷公俊 (2000) 153-173 ; 同 (2007) 138-9。
- (24) いわゆるクレオメネス戦争。Polyb. 2.45-70
- (25) Billows (2002) 290.
- (26) Polyb.38.2.13-14.
- (27) Billows (2002) 290.
- (28) Polyb.4.31.5.
- (29) Polyb.5.10.6-10.
- (30) Polyb,16.22a.
- (31) Billows (2002) 293.
- (32) 大戸千之 (1997) 141-165。
- (33) Walbak (1972) 30; Champion (2004) 10.
- (34) 藤井崇 (2003) 1-35。
- (35) D.S.17.6.5.
- (36) D.S.17.14.2-3.
- (37) Arrian, *Anab.* 1.9.7.
- (38) Plutarch., *Alexandros*, 11.
- (39) Polyb.2.70.
- (40) Polyb.4.22.5-12.
- (41) Polyb.4.23.7-8.
- (42) Polyb.4.24.2-4.
- (43) 前掲拙稿 (2007) 65。
- (44) 前掲拙稿、65-66 頁。

-
- (45) Polyb,5.55.
- (46) Billows (2002) 290-291.
- (47) Mitchell (2003) 283-4.
- (48) Polyb.5.9.
- (49) Polyb.5.10.9-10
- (50) Walbank (1993) 127-136.
- (51) 本章 II-1。
- (52) Polyb.12.22.5-6.
- (53) Polyb.12. 23.3-4
- (54) Plutarch., *Timoleon*.
- (55) Polyb.8.10.5-10.
- (56) 本稿序章。
- (57) 詳細は Ma, J. (2003).
- (58) この点に関して、ワーシントンは、国王の生前崇拝がピリッポス 2 世に始まるとの従来説を退け、ピリッポス 2 世には自身の生前神格化の意図はなく、アレクサンドロスが父王との対抗感情から始めた慣習であるとしている。Worthington (2008) 200-201.
- (59) 大戸千之 (1977) 381-396。
- (60) Polyb., 8.12.
- (61) 中井義明 (2005) 74-97。
- (62) 森谷公俊 (2007) 109-142。
- (63) 本章 II- 2、および註 42・43。
- (64) 本章 II-2、および註 44。
- (65) 本章 II-2、および註 44。
- (66) Ligeti (2008) 247-251.

第3部

ローマの進出とヘレニズム世界への衝撃

第5章 ヘレニズム諸王国とローマの戦争

—マケドニア・セレウコス朝とローマの抗争—

ローマとヘレニズム諸国との間の優劣関係を決定づけたのは、アンティゴノス朝のピリッポス 5 世やセレウコス朝のアンティオコス 3 世と、ローマとの間の戦争である。ローマはこれらの戦役における勝利によって、ヘレニズム世界に対する優位を決定づけることになった。

敗者の側にとって、この敗戦は如何なる意味を持ったのだろうか。ピリッポス 5 世も、セレウコス朝についても、その後に活発な活動を続けていることから、敗戦の影響を小さく見積もる研究が多い⁽¹⁾。グルーエンは、ヘレニズム諸国は敗者として、勝者に従うべしという原則に従った、と端的に述べている⁽²⁾。しかし、前章までの検討で、ヘレニズム諸国にとっての自己と他者との境界が、アレクサンドロス大王に求められることを明らかにした。この点に照らし合わせるならば、ヘレニズム諸国にとって外の存在というべきローマに対する敗北を、グルーエンが指摘するような図式で単純に割り切ることには、慎重にならざるを得ない。

実態としてみると、ピリッポス 5 世は敗戦後も長く王位を維持したが、アンティオコス 3 世は敗戦後程なくして世を去ったという違いがある。その一方、アンティゴノス朝はピリッポス 5 世の死後ほどなくして滅亡したが、セレウコス朝は長く王朝を維持し得た。それぞれに程度の違いこそあれ、ローマに対する敗北から受けた衝撃を想定することができる。従ってこの問題の検討を通じ、ローマという新参加者に対するヘレニズム諸国側の見方を考察することが可能になる。

本章では、この問題を取り扱うことにする。なお、マケドニアに関しては、ローマに対する言説を次章でまとめて考察しているため、分量としてやや少なくなることをお断りしておきたい。

I、マケドニアのピリッポス 5 世とローマの戦争について

ピリッポス 5 世とローマの二度にわたる戦争、いわゆる第 1 次・第 2 次マケドニア戦争のうち、第 1 次戦役では決定的な勝敗は定まらず、最終的な勝者が決したのは第 2 次戦役の方であった。本節においては全体の戦争の経過と、この結果がピリッポス 5 世にもたら

した意味を考察する。

① 第1次マケドニア戦争

ピリッポス 5 世は即位当初から始まった同盟市戦争を前 217 年のナウパクトスの和議で終結させ、前 215 年にはローマとの戦争状態に入った。このときローマはカルタゴの将軍ハンニバルとの戦争に苦しんでおり、ピリッポス 5 世はトラシメヌス湖畔でのローマの惨敗の報に接して、対ローマ開戦を決意した⁽³⁾。ピリッポス 5 世はハンニバルと同盟して、イリュリア方面に進出してきたローマを叩くことを狙ったのである⁽⁴⁾。これに対してローマはプラエトルのラエウィヌスを派遣して、マケドニアの動きを牽制した⁽⁵⁾。

この時点でのピリッポス 5 世は、先代アンティゴノス 3 世ドーソンが遺したヘラス同盟という強力な勢力基盤をギリシアに持ち、アカイア連邦の指導者であるシキュオンのアラトスが、若きマケドニア王の忠実な同盟者としてこの同盟を支えていた⁽⁶⁾。このような状況下で、前 212/1 年に、ローマはその直前の時期にピリッポス 5 世と敵対していたアイトリアと手を結んだ⁽⁷⁾。この同盟は当初はうまくいっていたが、その成功は長続きしなかった⁽⁸⁾。そうしたなかで、アイトリアに対して周辺諸国がマケドニアとの戦争収束を仲介したため、アイトリアはマケドニアと前 206 年に和議を結び、次いでローマもマケドニアとの間に前 205 年にポエニケの和約を締結、第 1 次マケドニア戦争は終結することとなった⁽⁹⁾。

しかし、ポリュビオスはこの和議が、マケドニアとローマの戦争を終息させるものともみなしていなかったとデロウは指摘する⁽¹⁰⁾。彼によれば、ポリュビオスはポエニケの和約によって、ローマとマケドニアの戦争は一時的に休止したにすぎず、実際にはキュノスケパライの決戦まで戦争状態はずっと継続していたと考えていたのである。グルーエンは、この和平条約はローマの元老院にとっては満足からほど遠いものであったとする⁽¹¹⁾。この第 1 次マケドニア戦争において、ローマは事実上の敗者だったとする見解の存在は、ローマの劣勢を示したものとさえよう⁽¹²⁾。これはピリッポス 5 世と、ローマの主敵であるカルタゴとの連携を断ち切り、全力をハンニバルに集中することを目的にしたものと考えられる⁽¹³⁾。すなわち、カルタゴに城下の盟を誓わせた後は、ローマとピリッポス 5 世の間に戦争が再開することを妨げる要因は、皆無となったのである。

② 「第2次」マケドニア戦争

ピリッポス 5 世とローマが戦争を再開する契機となった、ピリッポス 5 世による前 200

年のアビュドス包囲戦について、検討を試みる。すでに見たように、このアビュドスでのローマ使節との協議において、ローマ側のレピドゥスの要求は、ピリッポス 5 世がギリシア人の誰とも戦争をしないこと、そしてプトレマイオス 5 世の元にあるものに手を出さないことだった。そして、これに反した場合には戦争を再開する、というローマ元老院の意向をピリッポス 5 世に伝えたのである⁽¹⁴⁾。これに対してピリッポス 5 世は、ポエニケの和約の継続遵守をローマ側に求めた⁽¹⁵⁾。

ここで問題とすべきは、両者の主張のうちいずれが、当該時点において妥当なものであったのかということだろう。伊藤雅之は、ローマ側の主張が、ポエニケの和約に一切依拠も言及もしていないことを指摘する。すなわち、この戦争においてローマが主張した、ギリシア人への不戦やプトレマイオス 5 世の領域への不可侵などは、この戦争に際してローマが新たに作り出した論理であるとする⁽¹⁶⁾。それに対して、ピリッポス 5 世側の行動は、ポエニケの和約の遵守をローマに求めているように、第 1 次マケドニア戦争によって策定された枠組みに沿うものだったといえよう。

また、両者の論調をみると、先に他方への軍事力行使をほのめかして挑発的な態度をとっているのはレピドゥスである。ピリッポス 5 世の側には能動的な武力行使を意図した発言はみられず、あくまでも武力行使を受けた際には武力でもって返す、という姿勢を維持していた。すなわちピリッポス 5 世はポエニケの和約以降、ローマとの全面的な軍事衝突を避けるという方針を一貫して維持していたといえよう。

ピリッポス 5 世の基本的な姿勢として、ポエニケの和約で獲得した有利な情勢を保持しつつ、ローマ側に戦争再開の口実を与える行動は努めて控え、その介入を避けるべく注意を払っていた様子が見られる。しかし、彼の対処は実ることなく、最終的にはローマとの戦闘を再開することとなった。この戦争で、ローマはアイトリア・アカイアという両連邦国家を味方につけることに成功した。第 1 次マケドニア戦争においてローマが陥った外交的孤立という状況に、今度はマケドニアが追い込まれたことになる。

しかし、ギリシア諸勢力は、必ずしも反マケドニア一辺倒ではなかった。すでに述べたように、アカイア連邦はこの戦役に際し、年来の同盟者ピリッポス 5 世を棄ててローマ側についたが、連邦内部の意思を統一しきれず、離反者を出した。たとえば、同連邦の有力ポリスであるアルゴスがこれに反対して連邦を離脱し、単独でマケドニアとの同盟関係を維持したことをロイが指摘している⁽¹⁷⁾。当時、ギリシア本土での大勢力として成長を遂げた連邦国家が、思わぬ脆さを露呈した事件といえる。

こういった事件はありつつも、大勢としてはローマ有利な状況となり、ピリッポス 5 世は小アジアからギリシア方面に撤退を余儀なくされ、そしてキュノスケパライにおける敗北となった。この敗戦は、ピリッポス 5 世の王権にいかなる影響をもたらしたのだろうか。項をあらためて検討する。

③ 対ローマ戦敗北後のピリッポス 5 世

キュノスケパライの会戦後、ピリッポス 5 世はローマに和を求め、ローマ側はこれを受けて同盟諸国と協議、講和条約を結んで戦争は終結した。先にも見たように、この講和締結にあたって、ことにアイトリアから強硬な措置を求める意見が出されたことを、ポリュビオスは伝える⁽¹⁸⁾。しかしローマ司令官フラミニヌスはこれらの意見を押しさえ、総額 1,000 タラントンの賠償金支払いと、海軍の放棄、そして人質として息子デメトリオスをローマに差し出すことなどを条件に和平を結んだ⁽¹⁹⁾。

賠償金の額の多寡については、これと前後してローマと争ったカルタゴとセレウコス朝の例と比較可能である。第 2 次ポエニ戦争後、ローマがカルタゴに貸した賠償金は 10,000 タラントンを 50 年賦で⁽²⁰⁾、また対アンティオコス戦争での賠償金は 12,000 タラントンを 12 年賦で支払うよう求めるものだった⁽²¹⁾。一方、ピリッポス 5 世に課されたのは 1,000 タラントンであり、半額を即時に、残りを 10 年賦で支払うことを求めるというものだった。ローマ側の対マケドニア措置は、比較的穏健だったと評価してよいだろう。また、ピリッポス 5 世は海軍の放棄を求められた一方で、陸軍の制限については記述がみられない。この穏健な措置の背景として、ポリュビオスはローマ側がアンティオコス 3 世のヨーロッパへの進出を警戒しており、マケドニアとの停戦を急いでいたと伝える⁽²²⁾。

第 2 次マケドニア戦争終結後、ピリッポス 5 世はローマの同盟者であり続けた。後にみるローマとアンティオコス 3 世の戦争に際して、ピリッポス 5 世は麾下の軍に、ローマ軍がトラキアを通過する際の道案内をさせるなどした⁽²³⁾。その見返りとして、ローマは王子デメトリオスの身柄をマケドニアに返還した。ローマとアンティオコス 3 世の戦争が終結した後、アンティゴノス朝では内紛が発生した。戦争終結後にピリッポス 5 世がギリシア諸都市から非難を受けた際、彼はデメトリオスを代理としてローマに派遣して弁解に努め、ローマはこの若き王子の言葉をききいれた⁽²⁴⁾。アッピアノスは、ローマによる対セレウコス朝の戦後措置についてピリッポス 5 世が不満を持ち、ついにローマとの再戦を決意するに至ったと伝える⁽²⁵⁾。その過程でマケドニア王は、別の王子ペルセウスの讒言に従ってデ

メトリオスに謀反の嫌疑をかけ、これを殺害した⁽²⁶⁾。

ここで注目すべきは、この事件以前には、アンティゴノス朝では王位継承をめぐる内紛が伝えられていないということである。他の主要なヘレニズム王国、たとえばセレウコス朝やプトレマイオス朝ではしばしばお家騒動がみられるが、同様の事例はアンティゴノス朝では確認できない。その時点までに 2 例、アンティゴノス朝王家内に複数の成年男子が存在した事実を確認できる。すなわち、アンティゴノス 2 世ゴナタスの腹違いの弟であるデメトリオス美王、およびその子アンティゴノス 3 世ドーソンである。前者は前 250 年ごろにキュレネ王マガスが死んだ後に同地に招かれ、相続をめぐる内紛の中で客死したが⁽²⁷⁾、兄王との反目を示唆する証拠は確認できない。アンティゴノス 3 世についていえば、彼のマケドニア王即位は内紛の結果とはいえない。デメトリオス 2 世死去の際、後継者であるピリッポス 5 世は未だ幼かったため、王族であるアンティゴノスを後見役に立てた。その後、アンティゴノスはピリッポス 5 世の母后と結婚して、王として立ったのである⁽²⁸⁾。アンティゴノス 3 世は娘を若いピリッポス 5 世と婚約させており、ピリッポス 5 世がその後を承けて王となった際にも、特段の内紛は確認されない。アンティゴノス 3 世は北方からの蛮族侵入への対処に際して陣没したが、その直前までギリシアでのクレオメネス戦争に関与しており、相次ぐ戦争に対処を迫られ続けたアンティゴノス朝には、幼王をいただくだけの余裕はなかったとみてよい⁽²⁹⁾。こうした事情からみて、アンティゴノス 3 世の登極の背後に、王家内の権力抗争の存在を読み取ることはできない。他方、ピリッポス 5 世の治世末期に発生したデメトリオス粛清、そしてピリッポス 5 世の後継者であるペルセウス即位直後にも王族粛清が伝えられるなど⁽³⁰⁾、ローマとの敗戦によってピリッポス 5 世の王権が動揺し、アンティゴノス朝の王家内紛が誘発されたことが推測できよう。

対ローマ戦敗北後、ピリッポス 5 世は引き続き玉座にあり続け、その年数が比較的長期にわたったことから、敗戦による衝撃は表面上見当たらない。しかしここでの検討から、ローマとの戦争の衝撃は、王室内の内紛というかたちで表面化した可能性を推測できる。その結果、ペルセウスが親ローマのデメトリオスを追い落とし、その後ほどなく没したピリッポス 5 世のあとを継いでマケドニア王となった。ローマはこの王位継承を喜ばず、最終的に第 3 次マケドニア戦争によって、アンティゴノス朝は滅亡したのである。その道筋は、ピリッポス 5 世がローマに敗北したところから敷かれていた、と考えることができる。

以上のように、ローマとの敗戦がピリッポス 5 世に与えた影響として、治世晩年の王家内の紛争の存在があることを推測した。さて、ヘレニズム諸国には、彼と同時期にロー

マに敗北した強力な王がいた。セレウコス朝のアンティオコス 3 世である。次節では、ローマとの敗戦がアンティオコス 3 世に与えた影響を考察する。

II、セレウコス朝のアンティオコス 3 世とローマの戦争について

セレウコス朝のアンティオコス 3 世とローマの戦争は、地中海地域におけるローマの覇者としての地位を決定づけるものだった。この戦争に関する史料は、第 2 次マケドニア戦争終結後、両者が開戦にいたるまでに数次にわたり協議を行ったことを我々に伝える。これらの史料はまた、アンティオコス 3 世に対するローマの戦後措置が、ピリッポス 5 世に対するそれよりも厳格であったことを伝える。

第 1 部で見たように、アンティオコス 3 世は、主に東方の蛮族に対する戦績を積み重ねることによって王権を確立・強化してきた。とりわけラピア戦後の軍事的功績の蓄積によって、彼は「大王」と呼ばれるほどの権威を獲得した。しかしながら、マグネシアの会戦による対ローマ戦敗北の結果、彼は心血を注いでその回復に努めてきた小アジアの領土を、ほとんど喪失することとなった。こうした戦役の結果は、彼の権威に如何なる衝撃を与えるものだったのか。

本節は、こうした問題について、時系列順に検討していく。最初に、リュシマケイアでの、双方の最初の会談を取り上げる。引き続いて、会談後の開戦にいたるまでの状況を検討する。開戦にいたるまでの、アンティオコス 3 世とローマの数次にわたる協議から、我々はセレウコス朝側が相手に対して抱いていた像を考察することが可能となる。引き続いて、この両者の戦争を概観する。そして、戦争によってアンティオコス 3 世側が被った影響を最後に考察する。

① リュシマケイアにおける最初の殺生

アンティオコス 3 世とローマの最初の協議は、ピリッポス 5 世とローマの戦争が終わった直後の前 196 年にリュシマケイアで行われた。これより前、アンティオコス 3 世は前 203 / 2 年にピリッポス 5 世との間に密約を結んだとされ、そののち第 5 次シリア戦争に乗り出した⁽³²⁾。前 202 年、同戦争の決戦であるパニオンの会戦でプトレマイオス 5 世に対して勝利した後⁽³³⁾、アンティオコス 3 世は小アジアの平定に乗り出した⁽³⁴⁾。その後、彼はアビュドスからヘレスポントス海峡を渡り、ピリッポス 5 世がローマとの戦争に際して放棄した

リュシマケイアの再建に乗り出した⁽³⁵⁾。

アンティオコス 3 世とローマ使節の協議は、ポリュビオスとアッピアノスによって我々に伝えられる。ローマ使節の主要な論点は、以下のようなものだった。まず、アンティオコス 3 世は、ピリッポス 5 世とプトレマイオス 5 世に以前属していた都市から退くべきであること。次に、アンティオコス 3 世は自治権を持つ都市や、プトレマイオス 5 世の領有する地域への進出を控えるのが賢明であること。そして最後にローマ使節は、アンティオコス 3 世がヨーロッパに進出してきた理由について、ローマへの進出を計画しているためではないかとの疑念を表明した⁽³⁶⁾。

これに対してアンティオコス 3 世が最初に述べたのは、ローマが何の権利もなく小アジアの都市の扱いについて介入してきたことへの驚きであった。続いて彼は、自身がリュシマケイアに進出してきた理由について説明した。アンティオコス 3 世は、この都市を掌握した正当性を王朝開祖のセレウコス 1 世がリュシマコスに対しておさめた、コリュペディオンでの戦勝に求めた。あわせて彼は、リュシマケイアを自分の次子セレウコスの居所とする計画を伝え、ローマを攻めるための拠点とするためではないことを表明した。最後にこのセレウコス朝の王は、ローマによる小アジアや旧プトレマイオス朝領の諸都市への介入を拒絶した。そして、ことにプトレマイオス 5 世に関しては、自身の娘クレオパトラ（後のプトレマイオス 5 世王妃クレオパトラ 1 世）を嫁がせる計画をローマ使節に対して示したのである⁽³⁷⁾。協議は結論を見出すことができないまま、ローマ側使節はその場を去った。もちろんアンティオコス 3 世は陣を払うことなく、引き続いてリュシマケイアに残ることとなった。

ポリュビオスは、ローマ側がセレウコス朝の軍の進出を繰り返し懸念してきたことを、繰り返し伝えている⁽³⁸⁾。またアッピアノスは明快に、アンティオコス 3 世のリュシマケイア占領こそがセレウコス朝とローマの間に敵意を生む原因であったと主張する⁽³⁹⁾。しかしグレインジャーはこのアッピアノスの見方に疑問を抱く。ローマの使節の主張はアンティオコス 3 世のトラキアにおける行動の牽制を意図したものだが、この王の行動についての実質的な妨害活動は確認されない、というのである⁽⁴⁰⁾。アンティオコス 3 世の側としては、むしろローマとの間に条約をとり結ぶことを考えていた、というのがグレインジャーの主張するところである⁽⁴¹⁾。管見の限りでは、グレインジャーと同様の議論を、グルーエンがヘレニズム世界へのローマの進出について包括的に扱った、大部の著作に見出すことができる。グルーエンによれば、前 3～2 世紀におけるローマとセレウコス朝の関係は、概して

「公的で、友好的で、そして遠い」ものだった⁽⁴²⁾。

アンティオコス 3 世は領土支配に関する正当性について、これより前にも同様の主張をしている。それは、第 4 次シリア戦争に際して、プトレマイオス 4 世との間に交わした議論である。この議論において、セレウコス朝側とプトレマイオス朝側は、双方ともにシリア支配の正当性を、双方それぞれの王朝創始者に依拠して主張した⁽⁴³⁾。序章でみたウォールバンクとオースティンの議論を考慮すると、このような父祖伝来の領土という論点が、ヘレニズム諸王国の領土に関する最大の正当性だったと考えることができよう⁽⁴⁴⁾。この正当性の観点から見て、リュシマケイアの治安維持は、アンティオコス 3 世にとって自明の責務だったとみてよい。

一方、ローマ側がアンティオコス 3 世の行動を非難する際に用いた議論は、「ギリシア人」が「自治権を持つ都市」に変わっただけで、論旨としては第 2 次マケドニア戦争でピリッポス 5 世に対して用いた論理の流用とみてよい。しかし、レピドゥスの主張がアビュドスでマケドニア王を牽制する論理として全く役に立たなかったように、このときもローマ使節の主張は、アンティオコス 3 世に対しては全く効力を発揮しなかった。

このリュシマケイア会談について、ポリュビオスとアッピアノスが見解を異にする点に注意したい。ポリュビオスもアッピアノスと同様に、リュシマケイアでの激しいやりとりを我々に伝えているが、アンティオコス 3 世とローマの開戦理由については別の指摘をしている。彼はアイトリアのローマへの怒りを両大国の戦争を引き起こした原因とし、また戦争の口火を切ったアンティオコス 3 世のデメトリアス上陸についても言及しているが、アンティオコス 3 世のリュシマケイア占領については、何もふれていない⁽⁴⁵⁾。これは、ポリュビオスがアンティオコス 3 世のリュシマケイア占領、および同地でのローマとの協議を、戦争の直接的な原因として考えていなかったことを示唆するものと筆者は考える。ポリュビオスの記述がヘレニズム時代の一般的な見方を反映したものか、という点には注意を払う必要があるが、彼がヘレニズム時代の同時代史家だったという点は重要であろう。ポリュビオスの親ローマ的傾向については議論が多々あるが、この戦争の原因に関して、ローマ帝政期のアッピアノスとの違いは歴然としている。

リュシマケイア会談がセレウコス朝とローマの戦争の直接の契機となったか否かは、にわかには判断しがたい。グレインジャーは、ポリュビオスらが伝えるリュシマケイア会談の内容は実際の会談とは違うものであり、後の対アンティオコス 3 世戦争の時期にローマが用いたプロパガンダだったと主張する⁽⁴⁶⁾が、彼の説の正否は判じがたい。ここでは、従

前の論理を踏襲するアンティオコス 3 世の立場と、ピリッポス 5 世との戦争再開時の論理を流用したローマの主張は相容れるものではなかった、という点を確認するにとどめたい。

② リュシマケイア会談から開戦前夜まで

アンティオコス 3 世は、リュシマケイアの会談後にプトレマイオス 5 世、ビテュニアのアリアラテス 4 世との縁談を成立させ、ペルガモンのエウメネス 2 世にも縁談を持ちかけたが、これは断られた⁽⁴⁷⁾。リュシマケイア会談によってアンティオコス 3 世がローマに敵意を持つにいたったとの立場を取るアッピアノスは、彼が行った婚姻政策について、対ローマ戦の準備を目的としたものだったとする⁽⁴⁸⁾。しかし、この意見は首肯しがたい。というのは、アンティオコス 3 世の外交政策では、婚姻政策はいわば常套手段だったからである。すなわち、統治の早い段階で妹アンティオキスをアルメニアのクセルクセスに嫁がせ、またバクトリアのエウテュデモスと和した際には、娘をエウテュデモスの子デメトリオスと婚約させた⁽⁴⁹⁾。また、すでにみたように第 5 次シリア戦争後には、プトレマイオス 5 世とクレオパトラの婚約を成立させている。

これらの例で興味深いのは、アンティオコス 3 世は婚姻同盟にあたり、必ず相手の臣従を容れた上で合意したということである。オグデンはこのアンティオコス 3 世の同盟戦略について、この措置がアケメネス朝の、自身に臣従する王から娘を娶ることによって、自身の優越性を確認したという慣習を踏襲するものだったと指摘する⁽⁵⁰⁾。アンティオコス 3 世が長子であり共治王としたアンティオコスと実の妹ラオディケを結婚させたのも、この文脈に沿ったものといえる⁽⁵¹⁾。

エウメネス 2 世への婚姻申し入れについては、別の文脈を考慮する必要がある。アンティオコス 3 世がトラキアでの活動を開始したのとほぼ同時期に、ペルガモンのアッタロス 1 世が死去した。このため、セレウコス朝とペルガモン王国の間で、外交関係を更新する必要が生じたと推測できる。アッタロス 1 世は、アンティオコス 3 世によるアカイオス追討以来、セレウコス朝とは同盟関係にあった⁽⁵²⁾。しかしシリア戦争について検討した箇所でも触れたように、ヘレニズム世界での外交関係は、王の死とともに失効し、新たに構築し直す必要があったと考えてよい。こうした要素を考慮に入れるならば、アンティオコス 3 世によるペルガモンの新王への婚姻申し入れは、両国の同盟関係更新という文脈で理解できる。したがって、アッピアノスが主張するような、ローマへの敵対意志という背景を認める必要性は、必ずしもない。

ここで問題となるのは、オグデンとグレインジャーに従うならば、エウメネス 2 世がアンティオコス 3 世との婚姻同盟を受け入れた場合、アンティオコス 3 世の上位性を認めるおそれがあったということである⁽⁵³⁾。それでも、エウメネス 2 世がセレウコス朝からの婚儀申し入れを断った時、ペルガモン王の弟であるアッタロスとピレタイロスは兄王の翻意を試みた。しかし、エウメネス 2 世は弟たちの説得を退けた。グレインジャーは、エウメネス 2 世の決断が、アンティオコス 3 世とローマの関係に関して決定的な意味を持ったと論じる⁽⁵⁴⁾。エウメネス 2 世は、セレウコス朝の藩属君主となるよりも、ローマの側に附くことを選択したのである。

アッピアノスは、セレウコス朝とローマがその後、使節を派遣しあったことを我々に伝える。まず、アンティオコス 3 世が前 195 年頃にローマ元老院にリュシ阿斯、ヘゲシアナクス、メニッポスからなる使節を派遣した⁽⁵⁵⁾。対するローマ側は前 193 年頃にスキピオ・アフリカヌスを含む使節団をセレウコス朝に派遣した⁽⁵⁶⁾。前者では、セレウコス朝使節はローマ側に同盟の締結と、セレウコス朝の父祖伝来の領地であるトラキアと、小アジアの領有承認を要請した。しかしながら、ローマ元老院はセレウコス朝使節団に対して、ヨーロッパへの進出断念と小アジアの諸都市の自由を認めることを要求した⁽⁵⁷⁾。この事例におけるローマ側の主張は、リュシマケイアでの要求とほとんど同じである⁽⁵⁸⁾。一方で後者の事例においては、アンティオコス 3 世側使節はローマ側の提案を、彼と同盟関係を結ぶという条件で、一部受け入れることを表明した⁽⁵⁹⁾。しかしイオニアの諸都市を自由にすることについては、これら諸都市がアジアの「蛮族の王たち」に従属することに慣れていることを理由に、ローマの要求を拒否した。

以上みてきたように、アンティオコス 3 世とローマの交渉は、合意に達することはなかった。しかしグレインジャーは、この両者が数次にわたって交渉の場を持ち、同盟関係の樹立を求めたという点を重視する。会談の推移をみると、ローマ側の主張が一貫・不変であるのに対して、譲歩の姿勢を見せているのはアンティオコス 3 世の側であるといえよう。この点に筆者は、ピリッポス 5 世の場合と同様、ローマ側よりもアンティオコス 3 世の側に、同盟関係成立への熱意を見て取ることができると考える。しかし、こうした外交努力は実らず、両者は軍事衝突にいたるのである。

③ アンティオコス 3 世とローマの戦争

ローマとの最後の交渉が不首尾に終わった後、アンティオコス 3 世はエウボイアに 1 万

の兵を率いて上陸した⁽⁶⁰⁾。アッピアノスは、この行動がアイトリア連邦の要請を受けてのものであったとする⁽⁶¹⁾。アンティオコス 3 世がエウボイア島を掌握した後、彼の部将ミキユティオがアポロンの聖域であるデリオンを攻撃して同地にいたローマ人部隊の一部を殺害、残りを捕虜としたことを、同じくアッピアノスが伝える⁽⁶²⁾。リウィウスによれば、ローマ部隊の損失は軽微なものだった⁽⁶³⁾。いずれにせよ、この軍事衝突は、アンティオコス 3 世に対する開戦をローマ元老院に決定させる、格好の口実となった。

グレインジャーは、アンティオコス 3 世がローマ側を刺激しないように、細心の注意を払っていたと主張する⁽⁶⁴⁾。彼の議論の根拠は、アンティオコス 3 世がギリシアに引き具した部隊の数である。大戸千之もグレインジャーと同様に、このときのセレウコス朝の部隊規模について「ローマ侵攻はもとより、ギリシアを確保するにも足りない」とする、リウィウスの記述に注目する⁽⁶⁵⁾。ここで、第 4 次シリア戦争の決戦となったラピアの会戦や後のマグネシアの会戦との兵数の比較が有効であろう。このときアンティオコス 3 世自身が率いた軍の規模は、大戸やバルーコクバが詳細に検討しているように、7 万をやや下回る程度の兵数を持っていた⁽⁶⁶⁾。また、この対ローマ戦争での最終決戦となったマグネシアの会戦に際しても、アンティオコス 3 世が 7 万を上回る程度の軍を率いて戦ったことが伝えられる⁽⁶⁷⁾。この 2 例に比して、アンティオコス 3 世がギリシアに率いて渡った軍勢の数は、あまりに少数である。こうした例をみても、アンティオコス 3 世が対ローマ開戦に消極的であったとする説は、首肯に足るものである。

一方で、ローマは即座に、アンティオコス 3 世の軍に倍する軍勢を派遣した⁽⁶⁸⁾。そしてローマ軍は、セレウコス朝の軍をテルモピュライで撃退し、アンティオコス 3 世は自領へと敗走した⁽⁶⁹⁾。その後アンティオコス 3 世は、攻め寄せるローマ軍を迎え撃つ準備を整えた。その一方で彼はローマ軍に使節を派遣し、軍中にあったスキピオ・アフリカヌスに対して非公式に、ついでローマ軍首脳陣全体と公式の会談を持った⁽⁷⁰⁾。しかし、ローマ側の強硬姿勢の前に、この協議が実を結ぶことはなかったのである。両者の決戦は前 189 年、小アジアのマイアンドロス河畔にあるマグネシアにて行われ、アンティオコス 3 世の敗北に終わった⁽⁷¹⁾。

アッピアノスは、マグネシア会戦後にアンティオコス 3 世が、ローマに対する戦略を幕友たちによって批判されたと伝える⁽⁷²⁾。すなわち会戦後、アンティオコス 3 世の幕友たちは王に対して、ケルソネソスやリュシマケイア、ヘレスポントス海峡域を武力的抵抗もないうまに放棄した戦略を批判したのである。アンティオコス 3 世に対する幕友たちの批判

は、治世当初の宰相ヘルメイアスによる王への強硬な態度を除けば、とりわけヘルメイアスを除いた後では、他に見当たらない。アッピアノスが伝えるこのセレウコス朝陣営の一幕は、敗戦によるアンティオコス 3 世の権威低下を、我々に印象づけるものといつてよからう。

ここまで検討してきた中で、アンティオコス 3 世がローマとの直接対決を避けるべく腐心していたことがうかがえる。しかし、アッピアノス是对ローマ敗戦後、「王アンティオコス、かつて大王と呼ばれた王」という流言が広まったと伝える⁽⁷³⁾。こうした権威低下は、少なくともこの王が同規模の軍を展開して敗北した、第 4 次シリア戦争ではみられなかったものである。

④ アパメイアの和約以降

マグネシアの会戦後の前 188 年、アンティオコス 3 世はローマとの間に和約を結んだ。締結場所の名を取って、アパメイアの和約と呼ばれる。この和約でアンティオコス 3 世は、12,000 タラントンの賠償金を 12 年賦で支払うことが求められた⁽⁷⁴⁾。加えてセレウコス朝は、タウロス山脈以北の領土を全て喪失した⁽⁷⁵⁾。まさしく城下の盟というにふさわしい条約であり、カルタゴやピリッポス 5 世に対するものよりも厳しい条件での敗戦条約であったことが確認できる。

この戦役終結に関してグレインジャーは、アンティオコス 3 世はなお戦役を続行するだけの余力があったとし、同時に小アジアの喪失はセレウコス朝にとって、決定的な打撃ではなかったと論じる⁽⁷⁶⁾。ローマとの関係については、このアパメイアの和約によってセレウコス朝とローマは勢力範囲を確定させることとなり、両国関係は安定したと指摘する⁽⁷⁷⁾。

セレウコス朝にとっての小アジア喪失の意義付けに関して、我々は同様の議論をシャーウィーン・ホワイトとカートの研究に見出すことができる。彼女たちの研究も、マグネシアの敗戦によってセレウコス朝が失ったものの大きさを小さく見積もる傾向がみられる⁽⁷⁸⁾。その根拠となっているのが、彼の第 3 子であり、また次々代の王であるアンティオコス 4 世エピパネスが治世中に行った、いくつかの行動である。彼は前 170 年にプトレマイオス朝との間に第 6 次シリア戦争を引き起こし⁽⁷⁹⁾、戦後の前 166 年にはダプネでの祭礼において壮麗な祭礼行列を催した⁽⁸⁰⁾。対ローマ敗戦の衝撃を少なく見積もる研究者たちは、アンティオコス 4 世の治世に行われたこれらの軍事的行動を、セレウコス朝の国力が後退しなかった根拠として重視するのである。

しかしここでは、王朝の国力と王の権威を、切り離して考えるべきではないだろうか。この点に関して、アパメイアの和約から程なくして、アンティオコス 3 世が軍事行動で失敗して死んでいるという事実が注目される。すなわち、アパメイアの和約の翌年、アンティオコス 3 世は軍を率いてスーサのベル神殿の財宝の略奪を試みて失敗し、王自身が命を失うという事態を招いた⁽⁸¹⁾。ここで注意すべきは、アンティオコス 3 世がこれより前、東方遠征に際して同様の行動を成功させているということである。すなわちアンティオコス 3 世は、アナバシス序盤の前 211 年頃に、エクバタナのアナーヒター神殿の財産を接收して軍資金とした⁽⁸²⁾。第 2 章で検討したように、アンティオコス 3 世はアナバシスに先立ち、小アジアでの小アカイオスの反乱を鎮圧している。同じく神殿財産の接收による財源の確保を目的としながらも、アナバシスに際しては成功し、対ローマ戦敗北後は失敗している。事実は、軍事行動での失敗がアンティオコス 3 世の行動の成否に影を落としていたことを物語るものといえるだろう。

敗戦による権威失墜の例として参考になるのが、アンティオコス 3 世の父であるセレウコス 2 世である。ユスティヌスの記述では、この王は「王国を失い、落馬して死んだ」とある⁽⁸³⁾。しかし、彼が失ったのは王国全体や自身の王位でなく、バクトリアやパルティアなどの東方領域と小アジアに限定される。ユスティヌスの記述では、第 3 次シリア戦争よりも、セレウコス 2 世の治世末期の軍事的失敗が強調されていることに注意したい。とりわけ、その死の少し前にパルティアの浸透撃退に失敗したという要因は、大きかったと考えてよいだろう⁽⁸⁴⁾。バルバロイへの戦敗と小アジアの喪失という二重の軍事的失敗が、セレウコス 2 世の権威失墜に繋がったと考えられる。

おわりに

本章での分析をまとめる。バルバロイに対する勝利を蓄積することで、王の権威を確立する作業を積み重ねてきたヘレニズム諸国の王たちは、ローマに対する敗戦により、その権威を大きく傷つけられたことが指摘できる。王権の動揺は、マケドニア王ピリッポス 5 世については、ローマでの人質経験を持つデメトリオス王子の処断をはじめとする、王家内での内紛につながるという結果を招いた。セレウコス朝のアンティオコス 3 世の場合、自身の落命につながった。こうした敗戦後の状況からうかがい知れることは、ローマに対する敗戦は、バルバロイに対するそれとみなされた、ということである。従って、勝者は

敗者に従うべしという単純な図式では、片付けられなかったということができよう。

では、ローマに対するヘレニズム世界側の、この時期の反応はどのようなものだったのだろうか。次章では、ローマ進出期のヘレニズム諸国側が、この新参の大国をどう評価していたか、そしてこうした評価がポリュビオスの記述にどのような形であらわれるか、という点を精査したい。

-
- (1) 比佐篤 (2006) 154-5.
 - (2) Gruen (1984) 331.
 - (3) Polyb.5.101.6-102.1.
 - (4) Polyb.7.9; Austin 2nd, 76
 - (5) Livy 23.38.10-11; Gruen (1984), 377; Errington (1989) 97.
 - (6) Walbank (1984b) 446-81.
 - (7) Livy 26.24.7-15; *IG* 9 2nd.1.241; *Staatsv.* III.536; Austin 2nd, 77.
 - (8) Errington (1989), 102-3; Derow (2003) 57.
 - (9) Appian, *Mac.* 4.
 - (10) Derow (2003), 58-9
 - (11) Gruen (1984) 373-81.
 - (12) Walbank (1967) 104.
 - (13) Austin 2nd, 80, n.3.
 - (14) Polyb.16.34.3-5.
 - (15) Polyb.16.34.7.
 - (16) 伊藤雅之 (2010) 22。
 - (17) Roy (2003) 86.
 - (18) Polyb.18.36.7.
 - (19) Polyb.18.44.7; Appian, *Mac.*9.3.
 - (20) Polyb.15.18.7.
 - (21) Polyb.21.43.19.
 - (22) Polyb.18.39.4.
 - (23) Appian, *Mac.* 9.5.

-
- (24) Appian, *Mac.*9.6.
- (25) Appian, *Mac.*9.6.
- (26) Livy, 40.24; Derow (1989) 295.
- (27) Justin, 26.3.3-8.
- (28) Justin, 28.3.9-16.
- (29) Polyb.2.51-70; Green (1990) 259-62.
- (30) Livy, 54.4-58.8.
- (32) Polyb.15.20.
- (33) Polyb.16.18-20; Austin 2nd, 196.
- (34) Polyb.16.22a; Appian, *Syr.* 1; *SEG* 29. 1613; Austin 2nd, 193.
- (35) Polyb.18.3.11.
- (36) Polyb.18.50.5-9; Austin 2nd, 196.
- (37) Polyb.18.51.
- (38) Polyb.18.39.4; 45.10.
- (39) Appian, *Syr.*1.2.
- (40) Grainger (2002) 96.
- (41) Grainger (2002) 98-119.
- (42) Gruen (1984) 670.
- (43) Polyb.5.66.6-9 ; 本論第 1 章 III—①。
- (44) Walbank (1984a) 66; Austin (1986) 456.
- (45) Polyb.3.7.1-3.
- (46) Grainger (2002) 94.
- (47) Appian, *Syr.*5.
- (48) Ibid.
- (49) Polyb.8.23.
- (50) Ogden (1999) 135.
- (51) Appian, *Syr.*5; Ogden (1999) 134-8.
- (52) Polyb.5.107.4.
- (53) Ogden (1999) 135; Grainger (2002) 109.

-
- (54) Grainger (2002) 116.
- (55) Appian, *Syr.*6.
- (56) Appian, *Syr.*9-12.
- (57) Appian, *Syr.*6.
- (58) Polyb.18.50.7.
- (59) Appian, *Syr.*12.
- (60) Appian, *Syr.*12.
- (61) Ibid.
- (62) Ibid.
- (63) Livy, 41.1-5.
- (64) Grainger (2002) 191.
- (65) Livy 35.43.6; 大戸 (1993) 151。
- (66) 大戸 (1993) 149; Bar-Kochva (1976) 163-173; Sherwin-White and Kuhrt (1993) 54.
- (67) Appian, *Syr.*32-36.
- (68) Appian, *Syr.*17.
- (69) Appian, *Syr.*17-21.
- (70) Polyb.21.15; Appian, *Syr.*29-30.
- (71) Appian, *Syr.*,33-6.
- (72) Appian, *Syr.*37.
- (73) Ibid.
- (74) Polyb.21.43; Austin 2nd, 205; Appian, *Syr.*38.
- (75) Ibid.
- (76) Grainger (2002) 350, 356.
- (77) Grainger (2002) 356.
- (78) Sherwin-White and Kuhrt (1993) 217-223
- (79) Polyb.28.18-22, 29.23-27, 30; D.S.30.14-18, 31.1-2.
- (80) Polyb.30.35-6; D.S.31.16.1; Austin 2nd, 213 (a) (b).
- (81) D.S.29.15.1; Strabo, 16.1.18.
- (82) Polyb.10.27.12.

(83) Justin, 27.3.12

(84) Justin.41.5.1-5.

第6章 「バルバロイ」ローマをめぐる議論

前章では、ローマに対する敗北が、ピリッポス5世やアンティオコス3世の権力の動揺につながったことを指摘した。この事実は、ヘレニズム世界側にとってローマに敗れることは他のヘレニズム王国に対するそれと同列に扱われるものでなく、バルバロイに対する屈服としてみられていたことをうかがわせる。すなわち、ローマはヘレニズム世界側からバルバロイとして扱われていたと考えられる。

しかし、ヘレニズム世界側のこうした見方は、明確なかたちで確認することが難しい。チャンピオンが、ローマは「名誉ギリシア人」として扱われていたとしているように⁽¹⁾、東方の夷狄やガラティア人に比べて、ローマに対するヘレニズム世界の扱いは、非常に恣意的なものであったといっておくべきであろう。こうしたローマに対するヘレニズム世界側の曖昧な態度は、とりわけポリュビオスの記述に強くあらわれる。ポリュビオスはなぜ、この点に関して曖昧な記述を行ったのだろうか。本章では、ポリュビオスの記述に登場するヘレニズム世界の人々がローマをバルバロイと見たのか、そしてポリュビオスはこの点についてどのように考えていたのか、という問題を追及する。

I、ローマは「バルバロイ」か

ポリュビオスの記述の中で、ローマをバルバロイとする言説は使節や兵士など、『歴史』に現れる人物の発言として示される。これは、ローマ進出期のヘレニズム世界の人々が、ローマをバルバロイと考えていたことを伝えるものであるが、こうした事実を記録したポリュビオス自身は、果たしてローマをバルバロイと考えていたのか、否か。後者の立場を取るのがウォールバンクである。彼は『歴史』の注釈書中で、ポリュビオスはローマ人をバルバロイではないと考えていたとする見解を示し、この点で逆の立場をとる研究者たちを批判する⁽²⁾。これに対し、アースキンとチャンピオンは、ポリュビオスはローマをバルバロイと認識し、その点において他の同時代人と変わることがなかった、と説く⁽³⁾。しかしアースキンは、こうしたローマの蛮族的側面は、ポリュビオスの記述の中での扱いが大きくないことも指摘している⁽⁴⁾。

ローマに対するポリュビオスの視座を扱った研究から見えることは、この歴史家のローマに対する扱いの不明瞭さである。本稿の第1部から第2部では東方のバルバロイを定義

する際の基準を検討してきたが、目を転じて西方に関するポリュビオスの記述では、バルバロイの判断基準はより曖昧なものとなり、とりわけローマに対する姿勢は明確さを欠く。そのため、この西方の大国をバルバロイと考えていたか否か、俄かには判断し難い。

この困難は、ポリュビオスの記述の問題に拠るところが大きい。ポリュビオスの記述では、ヘレニズム世界の側がローマをバルバロイと明言した箇所はほとんど見あたらず、曖昧な記述が大半を占める。ローマをバルバロイとしていたことが推測しうるのは、演説などポリュビオスが他者の発言を記録したものが大半を占める。

それでは、『歴史』が描写する他者の発言や演説は、どの程度まで事実を伝えるものだったのだろうか。近代の研究者たちは、この問題への対処に苦慮してきた。ウォールバンクはこの問題について、ポリュビオスが

歴史家というのは、…むしろ現実に行われたことと言われたことを、例えそれがどんなにありふれた事柄であっても、そのまま記録するのを第一の務めとすべきである。⁽⁵⁾

と主張することを重視し、これらの演説はポリュビオスの創作によるものではない、と主張する⁽⁶⁾。この事実にも忠実であるべき、とする点は近年の大戸千之の研究においても、指摘されるところである⁽⁷⁾。

研究者たちの苦心の原因は、ポリュビオスの記述にあらわれる演説などが、話者の使用した語句をそのまま正確に写し取ったものか否かという、単純な二者択一の問題にしてきたことにあると指摘するのが、チャンピオンである⁽⁸⁾。チャンピオンも基本的にはウォールバンクらの意見に同調するが、彼はポリュビオス自身が演説の記述に際しては「演説の骨子となり核となる部分の報告に全力を尽くすこと」の重要性を主張することに着目する⁽⁹⁾。すなわちポリュビオスは、演説を記録する際にはその全体的な意図を重視し、より事実に近いと思われる語句を選択したと主張する⁽¹⁰⁾。この点に関して、ポリュビオスが大きな影響を受けたとされる、トゥキュディデスの記述の演説についての大戸の指摘も参考となる。トゥキュディデスは事実の正確な伝達を意識しながら、自身の推測も交えて演説を再現したと大戸は主張する⁽¹¹⁾。ポリュビオスがトゥキュディデスの衣鉢を継ぐ歴史家であった、とする大戸の評価もあわせて考えるならば⁽¹²⁾、ポリュビオスは演説の描写に際してはトゥキュディデスの手法を踏襲し、まったくの創作を行ったわけではないにせよ、事実に則することを意識しつつ編集した演説を史書に記録した、と考えることができよう。

ここで次の課題となるのは、チャンピオンの次のような指摘の検討である。すなわち彼は、ポリュビオスはとりわけローマに関する記述におけるについては、ローマをバルバロイと主張する人物たちに直接的な表現を緩和させ、併せて自身のローマに対する敵意を代弁させたと主張する⁽¹³⁾。

筆者は、ポリュビオスが記録する演説の不明瞭さがポリュビオスの編集によるものとする、チャンピオンの見方は妥当なものとする。しかし、それがこの史家自身のローマに対する敵意の代弁を意図したことによるもの、とするチャンピオンの意見には同意しない。この理由については、ポリュビオスが伝える同時代人のローマ観を分析し、その記録を残したポリュビオスの意図の考察を通して明らかにすることを試みる。ポリュビオスの記述の中で、ローマをめぐるヘレニズム諸国側の議論は、前 215 年に始まるピリッポス 5 世とローマの軍事衝突、いわゆるマケドニア戦争に関連する箇所において多くみられる。以下、第 1 次および第 2 次マケドニア戦争における議論から、ローマに対するギリシア／ヘレニズム世界側の見方を検討する。

II、「バルバロイ」ローマをめぐる議論①：第 1 次マケドニア戦争時のギリシア

第 5 章で検討したように、マケドニア王ピリッポス 5 世はローマに対して 2 度、戦火を交えた。最終的な勝者と敗者は前 201 年に起きた第 2 次マケドニア戦争で決したが、ローマに対するヘレニズム諸国からの見方という問題に関する議論が多くみられるのは、前 215 年に始まる第 1 次戦役の時期に関連する記述の中である。これにやや先立つ同盟市戦争を終結させた前 217 年のナウパクトスの和平会議と、第 1 次マケドニア戦争中にスパルタで展開されたアイトリア使節クライネアスとアカルナニア使節リュキスコスによる論戦、そして前 207 年にアイトリア連邦議会でロドス使節トラシュクロスが行った演説が、この問題に関する示唆を多く含むものである。本節では、これらを検討する。

① ナウパクトスの和平会議（前 217 年）

ピリッポス 5 世の即位直後、前 220 年に勃発した同盟市戦争は、このマケドニア王の主導により、ナウパクトスの和平会議をもって終結した。ポリュビオスは、この終戦協定が当時ローマとカルタゴの間で戦われていた、第 2 次ポエニ戦争の動静に触発されたものであることを伝える⁽¹⁴⁾。すなわち、ローマ執政官フラミニヌスの率いるローマ軍がトラシメ

ヌス湖畔で、カルタゴの将軍ハンニバルによって全滅させられたことを知ったピリッポス 5 世が、ハンニバルと提携するために戦役の終結を望み、会議を招集したのである。

この講和会議の席上、アイトリア使節であるナウパクトスのアゲラオスは、次のような演説を行った。

彼は次のように言った、「何よりも、ギリシア人同士で争うことではなく、むしろ神々に大なる感謝を差し出していただろう、もし彼らが全て一つのことを語り、ちょうど河を渡る時のように共に手を携えていたなら、バルバロイの進出をくい止め、彼ら自身とその属する諸都市を救い得ていただろう」と⁽¹⁵⁾。

この箇所での表現は曖昧であるため、ウォールバンクの註釈書はここでアゲラオスが触れた「バルバロイ」が何者を指しているのか、明示していない⁽¹⁶⁾。しかしチャンピオンは、アゲラオスによるローマ-カルタゴ戦争への言及を根拠として、ここでの「バルバロイ」がローマとカルタゴの両者を意味していると指摘する⁽¹⁷⁾。その勝者がローマとカルタゴのいずれであるにせよ、勝った側のバルバロイは勝者たるに満足することはない、というアゲラオスの指摘⁽¹⁸⁾を、チャンピオンは重視する。そして、このアイトリア使節はギリシアの守護者としてのピリッポス 5 世の役割を強調したのである⁽¹⁹⁾。

上掲箇所では、ローマとハンニバルがバルバロイとして、ともにギリシアの脅威として描写されている。また、この西方での戦争の勝者となったバルバロイが、ギリシアに脅威をもたらすとの認識を確認できる。あわせて、アゲラオスはギリシアの指導者としてのピリッポス 5 世の役割を認め、このマケドニア王のギリシア守護者としての役割を強調したと考えることができる。そして、アゲラオスの演説がピリッポス 5 世も臨席の会議で行われていることから考えて、このアイトリア使節がマケドニア王を自分たちと共通の敵、すなわちバルバロイたるローマという敵を共有するギリシア人であるとの認識を持っていたことを示唆する。このアイトリア使節が、同連邦の最高官職である司令長官を何度もつとめた有力政治家だったことは、ローマをバルバロイとする見方が広く共有されていたことを印象づけるものだったといえよう。

② アイトリア使節とアカルナニア使節によるスパルタでの論戦（前 209 年）

以上のような事情を考慮に入れると、前 215 年にアイトリアがローマとの間に同盟を結んだことが批判されたのは、自然なことであろう。これはハンニバルがマケドニアと同盟を結んだ際に、ローマがマケドニアを封じ込めるための作戦を共同で行う相手として、ア

イトリアを選択したことによる。この批判が大きく取り上げられたのが、第4章でも論じた、イトリア使節クライネアスとアカルナニア使節リュキスコスによるスパルタでの論戦である⁽²⁰⁾。この論戦はクライネアスがローマとの同盟への参加をスパルタに呼びかけ、リュキスコスがそれに反論するというものであった。その一節を引用する。

いま君たちは、誰と意志を共有し、どんな同盟への参加を呼びかけているのか？バルバロイとの同盟ではないのか？君たちは、今と前とで問題が同じであると考えているようだ。しかし、実は全く違う。あのとき諸君は、同族であるアカイア人やマケドニア人と主導権や名声を、とりわけピリッポスと覇権を競った。ところがいまは、ギリシア人による余所者たちへの屈服に対する戦いの中にあるのだ。君たちは彼らを引きずり込んでピリッポスと戦わせるつもりだが、君たちは気づいていない、いずれ彼ら自身と、そして全てのギリシア人と戦うことになる。… ⁽²¹⁾

この議論でまず注目されることは、イトリアがローマと結んでいることから考えて、ローマをバルバロイと呼んでいることである。そして、ローマとの緊密な同盟関係は、バルバロイとの連携として、他のギリシア／ヘレニズム諸国からの批判を受ける危険性をはらむものであったことがわかる。

また、引用箇所よりも少し前の部分で、ガラティア人によるデルポイ侵入時にマケドニアが果たした防衛的役割について、リュキスコスが指摘していることにも注意を向けるべきであろう⁽²²⁾。マケドニアについて、このアカルナニア使節はアカイア人などと同列に、ギリシア人同胞として扱っている。さらに彼はスパルタ人聴衆に対してペルシア戦争時の輝かしい記憶を想起させ、そのような先祖を持つ彼らが別のバルバロイであり、ギリシアを奴隷化しようと目論むローマと同盟することがないよう訴えているのである。

ここまで見たように、ローマに関してバルバロイという述語はきわめて多様なかたちで用いられているが、リュキスコスの議論が明快に示していることは、この「バルバロイ」の超大国との提携が、他のギリシア／ヘレニズム諸国によって批判される可能性を内包したということである。加えて、リュキスコスが先に見たイトリアのアゲラオスと同様に、ピリッポス5世を同族とみていることは重要だろう。こういった点からみて、マケドニアがバルバロイの侵攻からギリシアを守る盾の役割を果たしていたことは、ギリシア人たちに広く認められていたとみてよい。

③ ロドス使節トラシュクラテスの演説（前 207 年）

ローマ人たちがバルバロイであり、ギリシアを奴隷化する目論見を持っていたとする議論は、ひとりリュキスコスの演説にのみ見られるものではない。ポリュビオスは別の例として、前 207 年のロドス使節トラシュクラテスによる演説を我々に伝える⁽²³⁾。トラシュクラテスはアイトリアとマケドニアとの戦争収束を目的として、アイトリア連邦議会に派遣された人物であり、ローマとの同盟者の前でローマを批判したものといえる。

和平交渉にプトレマイオス 4 世が熱心に関与しているという点は、注意を向けておく必要があるだろう。リウィウスは、第 2 次ポエニ戦争／第 1 次マケドニア戦争の際、ローマがプトレマイオス 4 世を味方とする外交努力を行っていたことを伝える⁽²⁴⁾。その一方で、ヘルブルは、プトレマイオス 4 世は中立的立場を取っていたとしている⁽²⁵⁾。トラシュクラテスの発言には、当該戦争期間に中立を維持したプトレマイオス朝の認識も含まれている、という可能性を考慮しうるからである。この演説では、ローマがバルバロイであると明快に指摘され、そしてローマとの同盟は恥辱に満ちたものとされている。その理由として、ローマがギリシア人たちを奴隷化することを望んでいる、と主張する⁽²⁶⁾。大意としては、リュキスコスの演説を繰り返したものであるといえることができる。

ここまでみたように、第 1 次マケドニア戦争におけるローマに関する議論から、アイトリア連邦とローマの同盟について否定的な論調が多くみられたことは疑いない。この同盟に対する批判者たち、すなわちアカルナニアのリュキスコスやロドス使節などの主張は、この蛮族がギリシア人を奴隷におとしめる存在であるとの点で一致する。リュキスコスの議論は、ペルシア王クセルクセス、ケルト人そしてローマ人の三者を等しくバルバロイとみなす見方が存在したということを示す。アイトリアそのものというより、この連邦国家がローマと結んだ同盟に対する批判が、このアカルナニア使節の主張の特徴といえるであろう。ここからも、ローマとの同盟が批判をさらされたものであったことが推測される。

III、「バルバロイ」ローマをめぐる議論②：第 2 次マケドニア戦争から

① キュノスケパライの会戦まで

前節においてみたように、ローマをバルバロイとみなす議論は第 1 次マケドニア戦争において多く見いだすことができる。しかしながら、これらの議論は当人たるローマが不在の場所で行われた、という点にも注意を払うべきであろう。これに対して、第 2 次マケドニア戦争については、ヘレニズム諸国とローマが直接に相對した場面での交渉をポリュビ

オスが伝えている。なにより、ポリュビオスの『歴史』中で、ヘレニズム諸国の側がローマを直截にバルバロイと称した唯一の例を見いだしうるのは、この第2次マケドニア戦争の決戦であるキュノスケパライの会戦なのである。こうした点を考慮すると、この戦争に関しても検討を加える必要性は高い。ヘレニズム諸国がローマと直接に対峙した場では、ローマに対してどのような姿勢が取られたのだろうか。順を追って、みることにする。

まず、第2次マケドニア戦争の開戦の火蓋を切った、ピリッポス5世による前201年のアビュドス攻囲戦の際の、マケドニア王とローマ側の議論について検討する。この攻囲戦の開始後、ローマはレピドゥスを派遣して、ピリッポス5世に戦争の中止とプロトレマイオスの領域への侵攻中止を要請した⁽²⁷⁾。この交渉は決裂してピリッポス5世はアビュドスを攻略し、マケドニアとローマはふたたび干戈を交えることとなるが、この際のピリッポス5世の対応は極めて慎重で、相手を見下している要素は見あたらない。むしろ後述するように、レピドゥスの強硬かつ威圧的な姿勢に対して、ピリッポス5世は努めて穏当な態度をとり続け、レピドゥスに対してポエニケの和約維持を要請した。ピリッポス5世はローマとの再戦を避けることを望んでいたため、ローマを蛮族と呼ぶことを避けたのは当然であるとみてもよいかもしれないが、ピリッポス5世がローマに対して一貫して低姿勢である点は、注目してよいだろう。しかし、こうしたピリッポス5世の努力にもかかわらず、マケドニアとローマは戦争を再開することとなった。ピリッポス5世は岳父アンティゴノス3世以来の与党であるアカイア連邦にまで背かれ、小アジアからギリシアに退くこととなった。

両陣営の決戦となったキュノスケパライの会戦直前にあたる前198年冬、ピリッポス5世はローマの司令官フラミニヌス、およびその同盟諸国の代表たちと、ニカイアのロクリスで交渉の場をもった。席上、アイトリア連邦の代表のひとりであるイシスのアレクサンドロスは、ピリッポス5世が幾度か行った都市の破壊という行為に関して、アレクサンドロス大王がペルシア遠征においてもほとんど行わなかったとして批判した。

しかしながら、以前のマケドニア王であった者たちには、敵対する者たちに対しても、そのような意図を持っていなかった。それぞれ開けた野において戦い、都市を破壊し滅ぼすことはまれだった。そのことはアレクサンドロス（大王）がダレイオス（3世）に対して戦ったもの、また後継者間の、全ての者たちがアジアのアンティゴノスに対して戦った戦争から明らかである⁽²⁸⁾。

アレクサンドロス大王によるペルシア支配下のアジアへの慎重な対処の言及は、彼が征

服地の神域の扱いに注意を怠らなかつた、とするポリュビオスの指摘を思い出させるものである⁽²⁹⁾。ウォールバンクが述べているように、アレクサンドロス大王の本国を継承した者という観念は、アンティゴノス朝の王たちの正統意識の根幹を為すものだった⁽³⁰⁾。ポリュビオスは、ピリッポス 5 世がマケドニア王として、アレクサンドロス大王の玉座を継ぐ者としての立場を強く意識していたことを伝える⁽³¹⁾。以上のことから、アレクサンドロス大王との対比は、このマケドニア王への強烈な批判として作用したと考えてよからう。

これに対してピリッポス 5 世はローマとその同盟者に反論しているが、彼がローマと同盟していたアイトリアについて「ギリシア人ではない」としている点が注目される⁽³²⁾。これは、ウォールバンクが説明しているように、エウリピデスがアイトリア人を半バルバロイとしたことを受けての発言であろうと思われる⁽³³⁾。この評価は、古典期におけるバルバロイの規定がこの時点でも有効であったことを、我々に伝えるものといってよい。いまひとつの注意すべき点は、ナウパクトスではそのアイトリア人から「同族」とされたピリッポス 5 世によって、この主張が発せられたということである。いうまでもなくアイトリアはギリシアの有力連邦国家であるにもかかわらず、その代表の面前で、当人たちをバルバロイと呼んでいるのである。

ローマ司令官フラミニヌスに対しては、そのような侮蔑的な態度はみあたらない。むしろ、アビュドスでのレピドゥスに対するものと同様、ピリッポス 5 世はこのローマの将軍に対して丁重な姿勢を崩していない。しかし、第 1 次マケドニア戦争時のギリシア諸都市と同様、マケドニアでもローマは広くバルバロイととらえられていたことが、第 2 次マケドニア戦争の帰趨を決したキュノスケパライの会戦において、マケドニア斥候の言葉が王に対して開戦を促した言葉に明快に示されている。

王よ、敵は退いていきます。この機会を逃してはいけません。バルバロイどもは、わが軍を前にして逃げるばかりです。今日こそ王の日、王の時です⁽³⁴⁾。

ここまで検討してきたように、ローマをバルバロイと呼ぶ際には、この箇所までは曖昧な記述しか為されてこなかった。しかし、マケドニアの君臣がそろってローマを蛮族とみているのでなければ、こうした発言は存在し得ない。ここまで、ローマを直接的にバルバロイとする表現を避けてきたポリュビオスの記述が、ここに来て崩れたとみてよからう。

② 戦後の措置をめぐって

ローマをバルバロイとみなす風潮がヘレニズム世界では広範にみられたとした場合、ロ

ローマのヘレニズム世界進出に際して、軋轢が生じたことが想像される。実際、ローマ側は自分たちがヘレニズム諸国からバルバロイとしてみられていたことを認識している様子がうかがえる。アースキンは、キケロの『国家論』の一節から、このローマの雄弁家ギリシア人たちがローマをバルバロイとしてみていたことを承知していたと指摘する⁽³⁸⁾。さらには、ローマ人たちはギリシア人たちのこうした眼差しについて「カトーからリウィウスに至るまで」承知していた、とする⁽³⁹⁾。

この難問の克服にあたり、ローマはギリシア／ヘレニズム諸国側の認識が改まるのを、ただ待っていたのではない。むしろ、ヘレニズム諸国との親和性を示すことに積極的だった様子を、第2次マケドニア戦争の平和条約締結の場における議論から知ることができる。キュノスケパライの会戦後、勝利したローマ側は、マケドニアの処遇について協議することになった。この会議で、ローマ軍の司令官フラミニヌスは、ピリッポス5世との迅速な講和締結を目指した。この姿勢は、同盟者たちから批判を受けた。ポリュビオスは、アイトリアのアレクサンドロスが、ピリッポス5世の退位を主張したことを伝える⁽⁴⁰⁾。アッピアノスによれば、このときアレクサンドロスはフラミニヌスに対して、マケドニア王国の解体を提案したことになっている⁽⁴¹⁾。このアイトリア人の提案に先立ち、同じくローマの同盟者であるアタマニア王アミュナンドロスは、隣接するマケドニアから受けてきた損害について述べ、敗者への適切な処置を求めた⁽⁴²⁾。しかし、フラミニヌスはこうした主張を、ことごとく退けた。

ポリュビオスは、このローマの戦勝将軍が同盟者に対して、無法なガリア人やトラキア人の侵入からの盾としてのマケドニアの役割を思い起こさせたことを伝える⁽⁴³⁾。この議論が、先に検討したアカルナニア使節リュキスコスのものと酷似していることに注意したい⁽⁴⁴⁾。フラミニヌスは、バルバロイが法を破壊する存在であるとする点まで、リュキスコスの主張をなぞっているのである。

皮肉なことに、リュキスコスにバルバロイとされたローマ人によって、その主要な論点が踏襲されている様子を、我々はこちらに見出すことができる。すなわち、ガリア人はローマにとっても外敵、蛮族であり、このガリア人を外敵として共有すると主張することで、フラミニヌスはギリシアの同盟諸国に対して、ローマの親近性を印象づけることを狙ったと考えられよう。ローマはバルバロイではなく、ヘレニズム諸国とは外敵を共有する隣人である、と主張することがフラミニヌスの思惑だったのである。

このローマの戦勝将軍が、ヘレニズム世界側の論理を踏襲できる、合理的な存在であ

ることを伝えることが、ポリュビオスにとっては重要だった。本論ではここまで、ヘレニズム世界の自他認識の検討にあたって地理的な枠組みを重視してきたが、先行研究、とりわけチャンピオンにおいては理性が重視された。この点を勘案するならば、理をもって同盟者の説得にあたるフラミニヌスの姿勢は、ヘレニズム世界への強圧的な態度を避ける、理知的な姿を印象付けるものといって良い。

ローマの強大化とヘレニズム世界への進出の記録を至上の命題とするポリュビオスにとって、当該時期のヘレニズム世界人のローマ観の記録は必要な仕事だった。しかしその際、ローマへの蔑視を強調する表現は可能な限り緩和する必要があった。そこでポリュビオスは、ローマをバルバロイとした人々の意見を直截な表現で記録することを避け、ヘレニズム世界側とローマ側の双方を刺激することがないように試みたと考えられる。このようにしてポリュビオスは、ローマに対するバルバロイとしての同時代人の認識を同時に伝える一方で、ローマ側によるヘレニズム世界側へのアプローチを伝えることを意図したのである。

おわりに

本章ではポリュビオスの記述を通して、ローマに対するヘレニズム世界の視座を検討してきた。本章での検討から、ローマはバルバロイとみられていたこと、そのためローマとの同盟などに関しては、否定的な文脈で語られてきたことを指摘した。ローマに対するヘレニズム諸王の敗北が敗者の側の権威を大きく損なうものだったのは、こうした認識に基づくものであった。

一方ローマ側でも、ヘレニズム世界側のこうした視座を承知しており、否定的な感情の緩和に努めていた様子をうかがうことが出来た。ヘレニズム諸国に対する、ガリア人を共通の敵としているとのフラミニヌスの主張は、ローマがヘレニズム世界と接触を持つ際に、相手の敵対感情を緩和すべく配慮を試みた例と考えることができよう。

ポリュビオスの同時代人たちの大多数がローマをバルバロイとみていたことは間違いないだろう。そこでポリュビオスは、ローマに関するヘレニズム世界側の主張の記録にあたって、慎重な姿勢を貫いた。ローマをバルバロイとみるヘレニズム世界人の意見と、ローマの理性的な側面の両方を伝える際に、ヘレニズム世界側については直截な表現を避ける編集を行ったことがうかがえる。こうしたポリュビオスの苦心は、ローマという新興勢力

がヘレニズム世界を圧倒する状態が常態化した時点における、感情的軋轢を軽減することが狙いだったと考えられるのである。

こうしたローマの主張を記録したポリュビオスは、ローマをバルバロイと考えていたのだろうか、この点に関しては、終章で全体の議論を整理したうえで、改めて検討することとしたい。

-
- (1) Champion (2000) 427.
 - (2) Walbank, *HCP* 2, 176.
 - (3) Erskine (2000) 170-6 ; Champion (2000) 425-9.
 - (4) Erskine (2000) 172.
 - (5) Polyb.2.56.10.
 - (6) Walbank (1972) 43-6.; 同『ヘレニズム世界』 327-36 頁。
 - (7) 大戸 (2012) 190-97 頁。
 - (8) Champion (1997) 112-3.
 - (9) Polyb. 36.1-7.
 - (10) Champion (1997) 112-7.
 - (11) 大戸 (2012) 126-144 頁。
 - (12) 大戸 (2012) 203-4 頁。
 - (13) Champion (2000) 425; (2004) 235-8.
 - (14) Polyb.5.101.6-102.2.
 - (15) Polyb.5.104.1-2; Austin 2nd, 73; Champion (2000) 433-4.
 - (16) Walbank *HCP*1, 629.
 - (17) Champion (2000) 433-4.
 - (18) Polyb.5.104.3-4.
 - (19) Polyb.5.104.3-6.
 - (20) Polyb.9.28-39.
 - (21) Polyb.9.37.4-10.
 - (22) Polyb.9.35.1-4.
 - (23) Polyb.11.4-6.

-
- (24) Livy, 27.4.10.
- (25) Hölbl (2001) 132-3.
- (26) Polyb.11.5.1.
- (27) Polyb.16.34.3-7
- (28) Polyb. 18.3.4-5.
- (29) Polyb. 5.6-10.
- (30) Walbank (2002) 127-136.
- (31) Polyb.5.9-10.
- (32) Polyb.18.5.5-8.
- (33) Eur. *Phoen.* 138; Walbank, *HCP2*, 557.
- (34) Polyb. 18.22.9.
- (38) Cic., *Rep.* 1.58; Erskine (2000) 166.
- (39) Erskine (2000) 171.
- (40) Polyb.18.36.7.
- (41) Appian, *Mac.* 9.1.
- (42) Polyb.18.36.3-5.
- (43) Polyb.18.37.8-9.
- (44) Polyb.9.35.1-4; 本章 II-③参照。

終章

本稿は、ヘレニズム世界の王権が、その時代の自他認識と密接に関連するかたちで成立していたと想定し、この図式が同時代史家のポリュビオスの記述に示される様子を考察してきた。その結果をここに整理し、展望を示す。

第 1 部で論じたのは、ヘレニズム時代における戦争の性格の違いからみた、ヘレニズム世界の国際関係の枠組みだった。ヘレニズム国家の王たちは、戦争によって権力を確保した。しかし、シリア戦争を例にとりて考察したヘレニズム国家同士の戦争は、絶えることはなかったが、勃発にひとつのメカニズムが存在するものだった。それは王の交代を契機にしていたということであり、互いの勢力範囲を決定が確定された場合には矛が収められ、次の王の交代まで、境を接する国家同士の戦争は再発しないということだった。そこに、ヘレニズム国家間の相互保存の原則を確認し得た。

こうした性質上、ヘレニズム国家同士の戦争は王権の正当性を左右するものではなく、互いの勢力範囲を代替わりごとに確定させるための作業だったと推測される。したがって、王権に必要な軍事的成果を求める敵手は、ヘレニズム世界の外側に求められる必要があった。第 4 次シリア戦争の前後にアンティオコス 3 世が行った東方への遠征は、その敵手の姿を我々に提供した。この王が潜在的なライバルだった有力王族のアカイオスに決定的な差を付けたのは、バルバロイたるメディア・アトロパテネへの遠征だった。アカイオスの反乱鎮圧後にアンティオコス 3 世が行った東方への遠征が、この王の王権を確固たるものとして「大王」の呼び名を与えた事実は、バルバロイへの軍事的功績の重要性をさらに雄弁に物語るものである。この遠征の過程で、バクトリアのエウテュデモスがアンティオコス 3 世に対し、蛮族の侵入の脅威を理由に自己の存続を認め、アンティオコス 3 世がこれを認めたことは、バルバロイの存在がヘレニズム王権の確立と不可分だった事実を傍証するものといえる。

併せて確認すべきことは、こうしたヘレニズム諸国の相互保存と、バルバロイの脅威の強調、これに対する軍事功績の強調は、ディアドコイ諸国の第 2 世代に入ってから見られるものだった、ということである。序章で確認したように、ミッチェルはこの段階まで、すなわちディアドコイ諸国の創始者たちは、支配と王権の正当性を確立し得なかったと指摘する。しかしそうではなく、ヘレニズム諸国の王権の確立パターンが、この段階でディアドコイ戦争期から変化し、完成したと考えるのが妥当である。アレクサンドロス大王の

配下が血で血を洗うディアドコイ戦争期から、一応の領域の確定とそれぞれに王位交代を経た段階で、ヘレニズム諸王国はガラティア人という外敵の存在を得た。軍事功績を求める対象をアレクサンドロス大王の征服領域の外に得ることによって、ヘレニズム世界は相対的な安定と一体性を得たのである。

この構造は、アレクサンドロス大王のペルシア帝国征服という土台の上に成り立っていた。ヘレニズム時代の人々にとって、アレクサンドロス大王とはどのような存在だったのか。第 2 部では、この問題について、アレクサンドロス研究ではほとんど利用されることがなかった、ポリュビオスの記述から考察した。その結果、アレクサンドロス大王が王たちの模範と考えられていたことがポリュビオスからも確認でき、批判的な側面についても擁護がはかられた様子を確認できた。

以上の考察結果から、ローマという新興の大国への軍事的屈服が、ヘレニズム世界側に如何なる衝撃を与えたのか、という問題が浮上した。第 3 部では、この問題を考察した。ローマ進出の最初期にローマに屈したマケドニア王ピリッポス 5 世は、ローマに人質として預けられた王子デメトリオスをローマ内通の嫌疑で処断した。ピリッポス 5 世の後を継いだペルセウスの時にも有力王族の処断が伝えられるなど、敗戦後は王権の動揺がみられた。対ローマ戦で大敗したセレウコス朝のアンティオコス 3 世の場合は、治世初期の対北方蛮族戦や、その後の東方遠征によって確立した権威が、ローマに対する戦争によって一挙に崩れた。

これらの事態は、ローマに対する敗北はヘレニズム国家同士の戦争での敗北と同列に扱われるものではなく、バルバロイに対する戦敗と同様のもの、すなわちローマはバルバロイと認識されていたことが示されている。この背景として、ローマがアレクサンドロスの後継者の系譜を受け継いでいなかったことが考えられる。従ってローマは、ヘレニズム世界の外側の、バルバロイとして位置づけられるべき存在だった。ポリュビオスの記述からは、ヘレニズム世界側がローマをバルバロイととらえていたこと、そしてローマ側でもその事実を認識していたということを看取し得た。そして、ヘレニズム世界がこのバルバロイをどのように受容するのか、新たな自他認識の枠組みをローマ側が、ヘレニズム世界に対して提示したことがうかがえる。ポリュビオスはこの事実を記録するとともに、ローマに対する蔑視を示した発言に包含された敵意を可能な限り和らげ、ヘレニズム世界とローマの双方がこの新たな枠組みを共有しやすくする役割を担ったと考えられる。

本稿における考察の結果として、近年の研究では批判的・否定的な傾向を持ってとらえ

られるヘレニズム世界の一体性について、アレクサンドロス大王という存在を前提とした自他の区分が存在し、その中においての一体性、ないし仲間意識は有効であることを確認した。まず、ヘレニズム諸王国の王権が、その枠組みに規定されていた。ヘレニズム王国間での戦争は頻発したものの、実態として王の交代時の勢力範囲の策定など、規模は限定的なものだった。王たちの王権はヘレニズム諸国に対する戦争では十分に確立させることができず、その外側のバルバロイ集団を相手としての武勲に拠る必要があったのである。ヘレニズム王権の下には属さなかったポリュビオスも、こうした枠組みを前提としたヘレニズム世界人だった。そして、こうした枠組みは、ディアドコイ諸国の第一世代がすべて世代交代した後の時点で確立され、ローマに対する二大ヘレニズム王国の敗北まで、維持されたのである。

バルバロイに関するポリュビオスの記述について、ヘレニズム世界の東方と西方での使われ方を比較すると、東西における基準の使い分けがうかがえる。第3章において指摘したのはアレクサンドロス大王を基準としての地理的区分の存在だったが、これは西方においては明確に見いだすことができない。その一方で、ヘレニズム時代に自他の差異の基準として重視されたという理性的側面の強調は、西方におけるローマ関連の記述に多く見られ、東方ではあまり見られるものではなかった。こうした点はバルバロイ観のダブル・スタンダードというべきものであり、ポリュビオスの苦心の産物といえることができる。この点から考えて、ポリュビオスも他の同時代人と同様に、ローマをバルバロイとしてみていたと考えるのが妥当と思われる。

本稿が、この時点までを分析の対象としたのは、ポリュビオスの残存状況に加え、ローマの登場時の状況とその影響の確認を目的としたためである。それでは、ローマの主導権の確立という問題について、ヘレニズム諸国の側はどう対処したのだろうか。そして、ローマ側はヘレニズム諸国に対して、どのような姿勢を示してこの問題の処理を試みたのか。以下に示して、展望とする。

ローマの影響に対するヘレニズム諸国の対応

ヘレニズム諸王国の対処の一例として、アンティオコス3世の子・アンティオコス4世の事例を見る。第6次シリア戦争の最終盤で、アンティオコス4世はローマ元老院にエジプトからの撤退を強要され、屈服を余儀なくされた^①。アンティオコス4世はエジプトから撤退した後、ダブネで祭礼を行い、盛大な行列を挙行了た。

その背景について、我々はポリュビオスとディオドロスの指摘に注意する必要がある。ディオドロスは、多くの王国が自国の富と力をローマの目から隠すよう務めていたとしてもかかわらず、ひとりアンティオコス 4 世のみは反対の道を取ったと語る⁽²⁾。アテナイオスによって引用されるポリュビオスの記述は、より詳細である。ポリュビオスは、この行事の背景にはマケドニア王ペルセウスを破ってアンティゴノス朝を滅ぼした、ローマ軍司令官パウルスがマケドニアで催した祝勝祭典への対抗意識があった、と指摘する⁽³⁾。

ポリュビオスの指摘は極めて説得的だが、より重要な動機として、アンティオコス 4 世が第 6 次シリア戦争で被った不名誉を早急に回復する機会を求めていた、ということを考えるのが自然であろう。すなわちダプネ祭典は、ローマからの外交圧力に屈したセレウコス朝当主が、権威回復を狙った示威祭典だったとの解釈が可能と思われる。

また、この王が若き日、父王の対ローマ敗戦後にローマへ人質として送られていたことに注意したい。父王ピリッポス 5 世によって粛清されたマケドニア王子デメトリオスと同様に、アンティオコス 4 世もローマ寄りの姿勢を疑われた君主ではなかったか。その兄のセレウコス 4 世の軍事行動がさほど目立たなかったことに比べて、アンティオコス 4 世の治世は、第 6 次シリア戦争を契機に軍事で彩られていった。第 6 次シリア戦争は、プトレマイオス 6 世と同 8 世の対立への介入を契機として開始されたが、アンティオコス 4 世にせよ、対するプトレマイオス 6 世にせよ、即位から暫く経っていた点に従前の 5 度のシリア戦争との違いが見いだされる。少なくとも、王の襲位と同時に開始される双方の勢力範囲の確認作業という構造は、崩れたと考えられる。ローマの進出以降、ヘレニズム世界の変化の一端が、この点からも見いだしうる。

アンティオコス 4 世と同様に、ローマの実力を直接に見ることになったヘレニズム世界人が、歴史家ポリュビオスである。ポリュビオスは、その著作のうちの相当の部分を、ローマの政治体制の分析・紹介に割り当てた。ヘレニズム世界側はローマをバルバロイと考えており、ポリュビオス自身も本質的には、ローマをバルバロイととらえていた。ウォールバンクはこの点について、ポリュビオスはローマをバルバロイと考えてはいなかったとしたが、その後の研究はこの見方を否定した。本稿の検討結果もまた、ウォールバンクの見解を否定するものである。バルバロイたるローマの存在を、どのように受容するのか。これが、ローマに敗北した後のヘレニズム世界に求められた課題であり、アンティオコス 4 世は王として、ポリュビオスは歴史家であると同時にローマとの強いパイプを持つ政治家として、それぞれに対処の道を模索したのである。

そしてローマ側も、ヘレニズム世界からのこうした視線を意識していた。そこで東方への進出に際して、自分たちをバルバロイ的な存在ではなく、むしろ北方のケルト／ガリアという敵を共有していることを強調したのである。こうした敗者たるヘレニズム世界側、そして勝者たるローマ双方のアパメイア後の対応、とりわけピリッポス 5 世死後の状況分析が、今後の課題のひとつである。

また、ローマと敵対するのではなく、そのヘレニズム世界への軍事活動に同盟者として加わり、勝利の果実の分け前に与ったヘレニズム王国は、如何なる形でその代償を支払ったのだろうか。紙幅の都合上、この問題について本稿では取り上げることができなかった。この点も、今後の課題としてここで示しておきたい。

最後に解決すべき課題を列挙することとなってしまったのは、ポリュビオスの読み直しからヘレニズム世界の一体性を再考察する、という問題設定からはズレが生じると考えたためである。なにより、本稿で主な検討対象としたピリッポス 5 世やアンティオコス 3 世の次の世代についての検討となるため、稿を改める必要があるだろう。

本稿では、ヘレニズム世界の一体性および勢力均衡は、近年の批判にもかかわらず、この時代の国際関係を規定する上で有効性を失っていないことを確認して、ひとまず考察を終えたい。

(1) Polyb.29.27; Austin 2nd, 211.

(2) D.S.31.16.1; Austin 2nd, 213(b).

(3) Polyb.30.25.1; Austin 2nd, 213 (a).

参考文献

史料集、注釈書など

- Austin 2nd: Austin, M.M. (ed.) (2006) *The Hellenistic World from Alexander to the Roman Conquest*, 2nd ed., Cambridge.
- Crawford and Whitehead; Crawford, M. and Whitehead, D. (eds) (1983) *Archaic and Classical Greece: a selection of ancient sources in translation*, Cambridge.
- Sachs and Hunger: Sachs, A.J. and Hunger, H. (1988) *Astronomical Diaries and Related Texts from Babylonia*, vol.1, Vienna.
- *FGrH*: Jacoby, F. (1923-) *Die Fragmente der griechischen Historiker*.
- *Staatsv*.III; Schmitt, H.H. (ed.) (1969) *Die Staatsverträge von 338 bis 200 v. Chr.*, vol. III, München.
- Yardley, J.C. (trans.) and Develin, R. (Intro.) (1994) *Justin: Epitome of the Philippic History of Pompeius Trogus*.
- Walbank, *HCP*: Walbank, F.W. (1957-70) *A Historical Commentary of Polybius*, Oxford, 3 volumes.

先行研究

- Ager, S. L. (2003) 'An Uneasy Balance: from the Death of Seleukos to the Battle of Raphia', Erskin, A. (ed.) *A Companion to the Hellenistic World*, Oxford, 35-50.
- Allen, R.E. (1983) *The Attalid Kingdom: A Constitutional History*, Oxford.
- Austin, M.M. (1986) 'Hellenistic Kings, War and the Economy', *Classical Quarterly* 36, 450-66.
- Austin, M.M. (2003) 'The Seleucid and Asia', Erskin (ed.), *A Companion to the Hellenistic World*, Oxford, 121-33.
- Bar-Kochva, B. (1976) *The Seleucid Army*, Cambridge.
- Beloch, K.J. (1925-27) *Griechische Geschichte*, 2. Aufl. IV. Band, 1. und 2. Abtlg., Berlin.
- Bengtson, H. (1937-52) *Die Strategie in der hellenistischen Zeit*, I - III, München.
- Bengtson (1960) *Griechische Geschichte*, München (Zweiter Bd.)
- Bevan, E. (1902) *The House of Seleucus*, 2 vols., London..
- Billows, R. (1990) *Antigonos the One-Eyed and the Creation of the Hellenistic State*, Berkeley and Los Angeles.
- Billows, R. (2000) 'Polybius and Alexander Historiography', Bosworth and Baynham (eds.), *Alexander the Great in Fact and Fiction*, Oxford, 2002, 286-306.
- Boiy, T. (2004) *Late Achaemenid and Hellenistic Babylon*, Leuven.

- Briant, P. (2002) 'History and Ideology: The Greeks and "Persian Decadence"', Harrison, T. (ed.), *Greeks and Barbarians*, Edinburgh, 193-210.
- Brunt, P.A. (1965) 'The Aim of Alexander', *Greece and Rome* 12, 205-15, in: Worthington, I. (ed.) (2003) *Alexander the Great: A Reader*, London, 45-53.
- Cartledge, P. (1993) *The Greeks*, Oxford.
- Champion, C.B. (2000) 'Romans as BAPBAPOI: Three Polybian Speeches and the Politics of Cultural Indeterminacy', *Classical Philology* 95, 425-44.
- Champion, C.B. (2004) *Cultural Politics in Polybius' Histories*, Berkeley and Los Angeles.
- Chaniotis, A. (2005) *War in the Hellenistic World: A Social and Cultural History*, Oxford.
- Derow, P. (1989) 'Rome, the Fall of Macedon, and the Sack of Corinth', *CAH* 2nd, VIII, 290-323.
- Derow, P. (2003) 'The Arrival of Rome: From the Illyrian Wars to the Battle of Raphia', Erskine (ed.) *A Companion to the Hellenistic World*, Oxford, 51-70.
- Droysen, J. G. (1877-8) *Geschichte des Hellenismus*. Gotha (rep. Basel 1952).
- Errington, R.M. (1989) 'Rome and Greece to 205 B.C.', *CAH* 2nd, VIII, 81-106.
- Eckstein, A. M. (2006) *Mediterranean Anarchy, Interstate War, and the Rise of Rome*, Berkeley and Los Angeles.
- Eckstein (2009) 'Hellenistic Monarchy in Theory and Practice', Balot, R.K. (ed.), *A Companion to Greek and Roman Political Thought*, Oxford, 247-65.
- Errington, R.M. (1976) 'Alexander in the Hellenistic World', *Alexandere le Grand - Image et Réalité*, Genève, 137-80.
- Erskine, A. (1990) *The Hellenistic Stoa: Political Thought and Action*, London.
- Erskine (2000) 'Polybios and Barbarian Rome', *Mediterraneo Antico* 3-1, 165-82.
- Erskine (2003) 'Approaching the Hellenistic World', Erskine (ed.) *A Companion to the Hellenistic World*, London, 1-15.
- Flower, M., (2000) 'From Simonides to Isocrates: The Fifth-Century Origins of Fourth-Century Panhellenism', *Classical Antiquity* 19-1, 65-101.
- Grainger, J.D (1997) *A Seleukid Prosopography and Gazetteer*, Leiden and New York.
- Grainger, J.D. (2002) *The Roman War of Antiochos the Great*, Leiden; Boston.
- Grainger, J.D. (2010) *The Syrian Wars*, Leiden; Boston.
- Green, P. (1990) *Alexander to Actium: The Historical Evolution of the Hellenistic Age*, Berkeley and Los Angeles.
- Gruen, E. (1984) *The Hellenistic World and the Coming of Rome*, Berkeley and Los Angeles, 2 volumes.

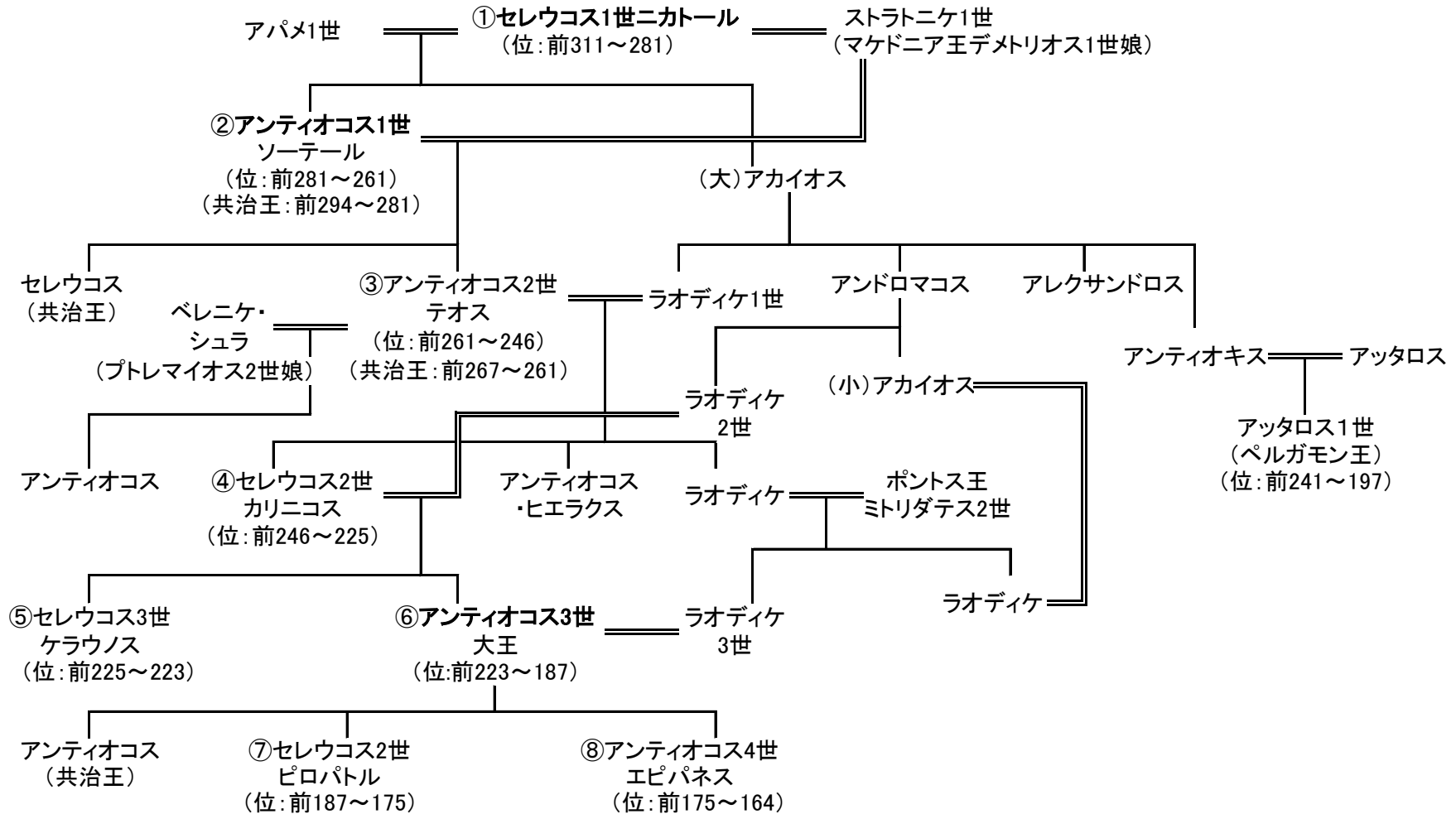
- Gruen, E. (2000) 'Culture as Policy: The Attalids of Pergamon', Grummond, N. and Ridgway, B. (eds.), *From Pergamon to Sperlonga – Sculpture and Context*, Berkeley and Los Angeles, 17-31.
- Gutzwiller, K. (1992) 'Callimachus' Lock of Berenice: Fantasy, Romance, and Propaganda', *American Journal of Philology* 113, 359-85.
- Hall, E. (1989) *Inventing the Barbarian: Greek Self-Definition through Tragedy*, Oxford.
- Harrison, T. (2002) 'Introduction', Harrison (ed.), *Greeks and Barbarians*, Edinburgh, 1-14.
- Hauben, H. (1990), 'L'expédition de Ptolémée III en Orient et la sédition domestique de 245 av. J.-C.', *Archiv für Papyrusforschung* 36, 29-38.
- Heinen, H. (1984) 'The Syrian-Egyptian Wars and the New Kingdoms of Asia Minor', *CAH* 2nd, VII/1, pp.412-45.
- Hölbl, G. (2001) *A History of the Ptolemaic Empire*, London.
- Huss, W. (2003), *Ägypten in hellenistischer Zeit 332-30 v. Chr.*, München.
- Huss, W. (2008), 'Die tochter Berenike oder die Schwiegertochter Berenike- Bemerkungen zu einigen Epigrammen des Poseidippos von Pella', *Zeitschrift für Papyrologie und Epigraphik* 165, 55-7.
- Jähne, A. (1974), 'Die "Syrische Frage", Seleukeia in Pierien und die Ptolemäer', *Klio* 56-2, 501-19.
- Jähne (1997) 'Achaios – König und Rebell', *Altertum* 42, 121-32.
- Kosmetatou, E. (2003) 'The Attalids of Pergamon', Erskine, A. (ed.), *A Companion to the Hellenistic World*, Oxford, 159-74.
- Ligeti, D. (2008) 'The Role of Alexander the Great in Livy's Historiography', *Acta Antiqua* 48, 247-251.
- Llewellyn-Jones, L. and Winder, S. (2011) 'A Key to Berenike's Lock? The Hathoric model of Queenship in Early Ptolemaic Period', Erskine and Llewellyn-Jones (eds.), *Creating a Hellenistic World*, Swansea, 247-69.
- Ma, J. (1999) *Antiochos III and the cities of Western Asia Minor*, Oxford.
- Ma, J. (2003) 'Kings', in: Erskine (ed.), *A Companion to the Hellenistic World*, Oxford, 177-96.
- Marszal, J. (2000) 'Ubiquitous Barbarians', Grummond, N. and Ridgway, B., *From Pergamon to Sperlonga – Sculpture and Context*, Berkeley and Los Angeles, 191-234.
- Marvin, M. (2002) 'The Ludovisi Barbarians: The Grand Manner', Gazda, E.K. (ed.), *The Ancient Art of Emulation: Studies in Artistic Originality and Tradition from the Present to Classical Antiquity*, Michigan, 205-24.

- McGing, B. (1997), 'Revolt Egyptian Style. Internal Opposition to Ptolemaic Rule', *Archiv für Papyrusforschung* 43-2, 273-314.
- Mitchell, L.(2007) *Panhellenism and the Barbarian in Archaic and Classical Greece*, Swansea.
- Mitchell, S. (2003) 'The Galatians: Representation and Reality', in: Erskine (ed.), *A Companion to the Hellenistic World*, Oxford, 280-293.
- Mørkholm, O. (1991) *Early Hellenistic Coinage from the Accession of Alexander to the Peace of Apamea* (336-188 BC), Cambridge.
- Ogden, D. (1999) *Polygamy, Prostitutes and Death*, Swansea.
- Rostovtzeff, M. (1941) *The Social and Economic History of the Hellenistic World*, 3 vols. Oxford.
- Roy, J. (2003), 'The Achaian League', in Buraselis, K. and Zoumboulakis, K. (eds.), *The Idea of European Community in History: Conference Proceedings*, vol.2., Athens, 81-95.
- Sachs, A. J. and Wiseman, D. J. (1954) *Iraq* 16, 202–11.
- Schmitt, H. H. (1964) *Untersuchungen zur Geschichte Antiochos' des Grossen und seiner Zeit*, Stuttgart.
- Sherwin-White, S., Kuhrt, A. (1993) *From Samarkhand to Sardis – A New Approach to the Seleucid Empire*, Berkeley and Los Angeles.
- Spencer, D. (2002) *The Roman Alexander*, Exeter.
- Stewart, A. (2004) *Attalos, Athens, and Akropolis: the Pergamene "Little Barbarians" and their Roman and Renaissance Legacy*, Cambridge.
- Walbank, F.W. (1967) *Philip V of Macedon*, 2nd ed., Cambridge (first published: 1940).
- Walbank, F.W. (1984a) 'Monarchies and Monarchic Ideas', *CAH* 2nd, VII/1 , 62-100.
- Walbank, F.W. (1984b) 'Macedonia and the Greek Leagues', *CAH* 2nd, VII/1 , 446-481.
- Walbank, F.W. (1993) 'Ἡ ΤῶΝ ΟΛΩΝ ΕΛΛΙΣ and the Antigonids', in Walbank (2002), *Polybius, Rome and the Hellenistic World*, Cambridge, 127-136.
- Will, E. (1979-82), *Histoire politique du monde hellénistique: 323-30 av. J.-C.*, Nancy (2nd ed.).
- Worrle, M. 1975. 'Antiochos I. Achaios der Ältere und die Galater. Eine neue Inschrift in Denizli', *Chiron* 5, 59-87.
- Worthington, I. (ed.) (2003) *Alexander the Great: A Reader*, London.
- Worthington (2008) *Philip II of Macedonia*, New Haven and London.

- ・ 伊藤貞夫・本村凌二編『西洋古代史研究入門』東京大学出版会、1999年
- ・ ウォールバンク『ヘレニズム世界』小河陽訳、教文館、1988年（原著1981）
- ・ 大戸千之「ポリュビオスの $\tau\upsilon\chi\eta$ について」『立命館文学』386-390 合併号、1977年、381-396頁
- ・ 大戸千之『ヘレニズムとオリエントー歴史の中の文化変容ー』、ミネルヴァ書房、1993年
- ・ 大戸千之「ヘレニズム時代のコスモポリタニズムについて」『立命館文学』551、1997年、141-165頁
- ・ 大戸千之『歴史と事実』京都大学学術出版会、2012年
- ・ 大牟田章「歴史のなかのアレクサンドロス像」『金沢大学文学部論集 史学科篇』1、1980年、1-19頁
- ・ 小谷仲男「ギリシア人植民都市アイ・ハヌムの滅亡：中国史料からの考察」『富山大学人文学部紀要』35、2001年、21-30頁
- ・ 高島純夫「古代ギリシア人の外人観」弓削達・伊藤貞夫編『ギリシアとローマー古典古代の比較史的考察』河出書房新社、1988年、301-325頁
- ・ ターン『ヘレニズム文明』角田有智子・中井義明訳、思索社、1987年（原著1952年）
- ・ 中井義明『古代ギリシアにおける帝国と都市ーペルシア・アテナイ・スパルターー』ミネルヴァ書房、2005年
- ・ 長谷川岳男「マケドニアとローマーその対立の構造」『歴史評論』543、1995年、37-50頁
- ・ 波部雄一郎『プトレマイオス王国と東地中海世界：ヘレニズム王権とディオニュシズム』関西学院大学出版会、2014年
- ・ 比佐篤『「帝国」としての中期共和政ローマ』晃洋書房、2006年
- ・ 藤井崇「ポリュビオスとローマ共和政」『史林』86-6、2003年、1-35頁
- ・ 前田耕作『バクトリア王国の興亡』第三文明社、1992年
- ・ 三津間康幸「セレウコス朝およびアルシヤク朝時代の王権の展開と都市バビロン」東京大学博士学位論文、2009年
- ・ 森谷公俊『王宮炎上ーアレクサンドロス大王とペルセポリスー』吉川弘文館、2000年
- ・ 森谷公俊『アレクサンドロス大王ー「世界征服者」の虚像と実像』講談社、2000年
- ・ 森谷公俊『アレクサンドロスの征服と神話』講談社、2007年
- ・ 吉村忠典『支配の天才ローマ人』講談社、1985年

- ・ 拙稿「シリア戦争をめぐる考察」『古代史年報』4号、2006年、11-16頁。
- ・ 拙稿「ヘレニズム時代の王権と自他認識ーセレウコス朝とヘレニズム世界東方を中心に」『洛北史学』9号、2007年、52-70頁
- ・ 拙稿「ヘレニズム時代のアレクサンドロス大王像ーポリュビオス『歴史』を手がかりに」『古代文化』62巻4号、2011年、74-91頁

図2 セレウコス朝系譜



Beloch (1912-27), Walbank, HCP I (1957), Ogden (1999)などより作成

関係地図



Austin 2nd xxxi, Erskine (2003) 20などを参考に筆者作製